金沢市戸水B遺跡

――第4・5次調査――

1992

石川県立埋蔵文化財センター

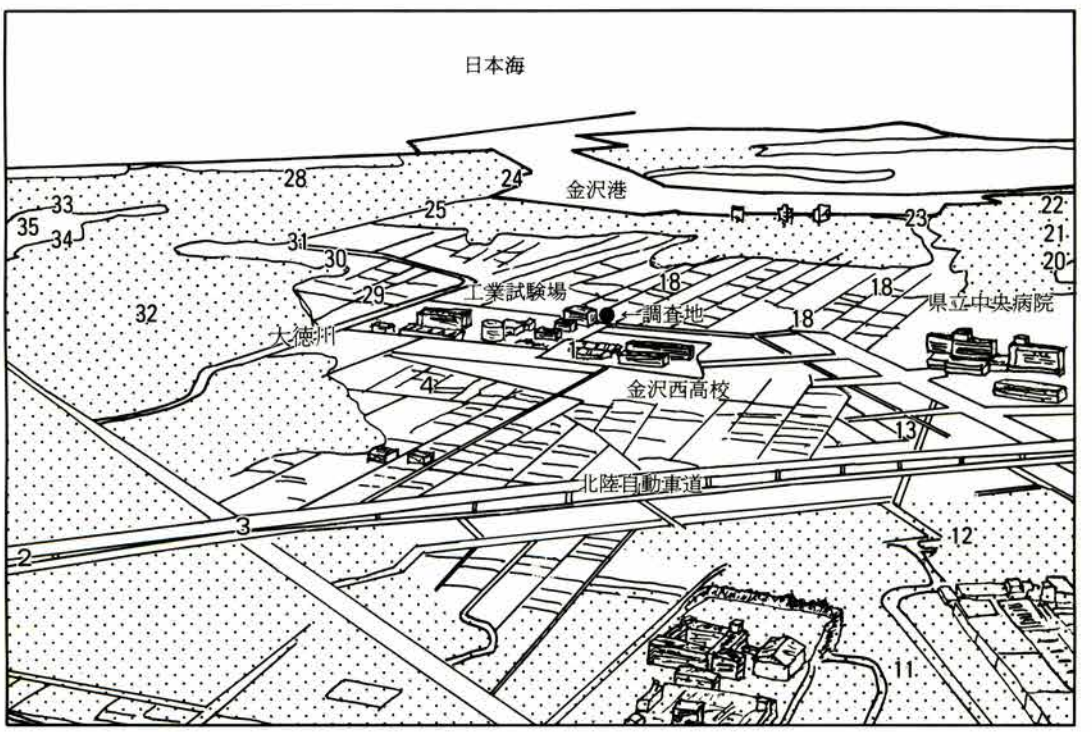
金沢市戸水B遺跡

——第4・5次調査——

1992

石川県立埋蔵文化財センター

戸水B遺跡周辺航空写真（平成３年５月撮影）



調査区の位置

例　　言

1．本書は、石川県金沢市戸水町地内に所在する戸水Ｂ遺跡の第４・５次発掘調査報告書である。

2．本調査は、石川県地場産業振興センター新館建設用地造成に係るもので、昭和63年度に1,500㎡、平成元年度に1,000㎡をそれぞれ対象として実施した。

3．本遺跡の発掘調査は石川県商工労働部商工課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。第４次調査は藤田邦雄が担当し、第５次調査は栃木英道が主に担当し中屋克彦が補佐した。また、調査補助員として現地調査では大藤雅男、田畑　弘、北野裕保、室内作業では真智敏郎、中村繁和の援助を受けた。

4．発掘調査と報告書の刊行に当たっては、石川県商工労働部商工課、石川繊維会館の協力を得た。

5．本遺跡出土遺物の整理作業は、㈳石川県埋蔵文化財保存協会（担当－岡本　晃、浅井勝郎、小野澄江、末富しげ子、辻森由美子、松田智恵子、竹内弘美、川崎由紀子、前田すみ子、中村真由美）に委託して実施した。

6．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

第１章、第３章第２節、出土土器観察表、第４章、第５章 …… 中屋克彦

第２章 …… 栃木英道

第３章第１節 …… 藤田邦雄

7．本報告書の編集は中屋が行った。

8．本報告書の挿図等の扱いは下記のとおりである。

(1) 挿図中の方位は原則として磁北である。

(2) 挿図中の水平基準の数値は海抜高（単位ｍ）である。

(3) 挿図中の縮尺については、原則としてスケールを付し、表題末にも明示した。

(4) 出土土器観察表の表記法については、本文中（第３章第１節）に記した。

(5) 写真図版の縮尺は任意のもので、統一はしていない。

(6) 写真図版中の遺物番号は、挿図中の番号と同一である。

9．本調査の出土遺物・記録資料等は、一括して石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

戸 水 B 遺 跡

目　　次

第１章　位置と環境 ……（中屋）　1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2

第２章　調査の経緯と経過 ……（栃木）　7
　第１節　戸水Ｂ遺跡の既往の調査 …… 7
　第２節　調査に至る経緯 …… 12
　第３節　調査の経過 …… 12

第３章　遺　構
　第１節　第４次調査の遺構 ……（藤田）　15
　第２節　第５次調査の遺構 ……（中屋）　27

第４章　遺　物 ……（中屋）　28
　第１節　出土土器の観察 …… 28
　第２節　弥生土器 …… 29
　第３節　須恵器 …… 32
　第４節　石　器 …… 32
　第５節　木製品 …… 33
　第６節　絵画土器 …… 33
　出土土器観察表 …… 51

第５章　まとめ ……（中屋）　58

挿　図　目　次

第１図　戸水Ｂ遺跡の位置……1
第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）……4
第３図　戸水Ｂ遺跡調査区位置図
（Ｓ＝1/2,000）……9
第４図　第４次・第５次調査区割り
（Ｓ＝1/3,000）……16
第５図　第４次・第５次調査区全体図
（Ｓ＝1/300）……17・18
第６図　土坑（１～８号)(Ｓ＝1/60）……19
第７図　土坑（９・11～16・20号）
（Ｓ＝1/60）……20
第８図　土坑（21～30号）（Ｓ＝1/60）……21
第９図　土坑（17～19号）溝（９・10号）
（Ｓ＝1/60）……23
第10図　大溝断面図(1)（Ｓ＝1/60）……24
第11図　大溝断面図(2)（Ｓ＝1/60）……25
第12図　第１号建物・溝（26・27号）
（Ｓ＝1/60）……26
第13図　戸水Ｂ遺跡出土土器の分類(1)
（Ｓ＝1/6）……31
第14図　戸水Ｂ遺跡出土土器の分類(2)
（Ｓ＝1/6）……32
第15図　第15号土坑出土絵画土器片
（Ｓ＝1/2）……33
第16図　第１号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…34
第17図　第２号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…34
第18図　第３号土坑出土遺物(1)
（Ｓ＝1/3）……34
第19図　第３号土坑出土遺物(2)
（Ｓ＝1/3）……35
第20図　第４号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…35
第21図　第５号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…35
第22図　第６号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…36
第23図　第７号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…37
第24図　第８号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…38
第25図　第９号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…39
第26図　第10号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…39
第27図　第11号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第28図　第12号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第29図　第13号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第30図　第15号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第31図　第16号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第32図　第17号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第33図　第24号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第34図　第25号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第35図　第27号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…40
第36図　第29号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…41
第37図　第30号土坑出土遺物（Ｓ＝1/3）…41
第38図　第９号溝出土遺物（Ｓ＝1/3）……42
第39図　第10号溝出土遺物(1)（Ｓ＝1/3）…42
第40図　第10号溝出土遺物(2)（Ｓ＝1/3）…43
第41図　第10号溝出土遺物(3)（Ｓ＝1/3）…44
第42図　第10号溝出土遺物(4)（Ｓ＝1/3）…45
第43図　第10号溝出土遺物(5)（Ｓ＝1/3）…46
第44図　第11号溝出土遺物（Ｓ＝1/3）……46
第45図　第12号溝出土遺物（Ｓ＝1/3）……46
第46図　第201号溝出土遺物（Ｓ＝1/3）……46
第47図　第202号溝出土遺物（Ｓ＝1/3）……46
第48図　大溝出土遺物（Ｓ＝1/3）……47
第49図　遺構外出土遺物（Ｓ＝1/3）……48
第50図　出土石製品……49
第51図　出土木製品(1)（Ｓ＝1/3）……49
第52図　出土木製品(2)（Ｓ＝1/3）……50

図　版　目　次

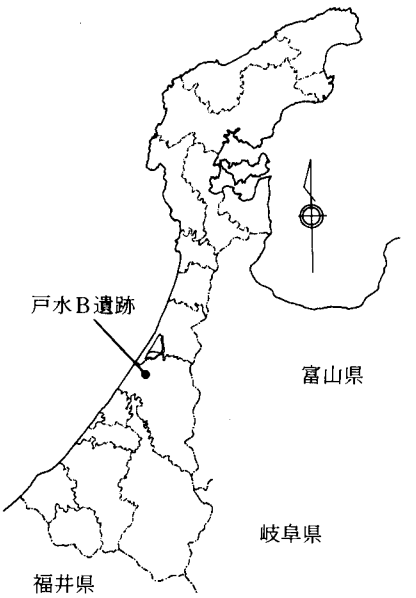
図版1　上　調査前風景（南より）…… 1
中　第4次調査表土除去作業
下　第4次調査完掘状況（南より）
図版2　上下　発掘作業風景（第4次）…… 2
図版3　上　掘立柱建物跡…… 3
下左右　同柱穴
図版4　上　第1号土坑遺物出土状況 …… 4
下　第2号土坑炭化物上面
図版5　上　第3号土坑炭化物上面 …… 5
下　第3号土坑遺物出土状況
図版6　上左　第4号土坑　上右　同遺物出土状況 …… 6
中左　第6号土坑　中右　同遺物出土状況
下左　第8号土坑　下右　同遺物出土状況
図版7　上　第11号土坑 …… 7
下　第15号土坑遺物出土状況
図版8　上　第18号土坑 …… 8
下　第22号土坑炭化物上面
図版9　上　第24号土坑炭化物上面 …… 9
下　第29・30号土坑
図版10　上左　第9・10号溝遺物出土状況 …… 10
上右　管玉出土状況（第14号溝）
中　第27号溝遺物出土状況
下　第5次調査表土除去作業
図版11　上　第201号土坑（第4次調査第1号土坑と同一）…… 11
下　第201号溝
図版12　出土弥生土器（壺）…… 12
図版13　出土弥生土器（甕）…… 13
図版14　出土弥生土器（甕）…… 14
図版15　出土弥生土器（甕）…… 15
図版16　出土弥生土器 …… 16
図版17　出土弥生土器 …… 17
図版18　出土須恵器、石器ほか …… 18

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

戸水Ｂ遺跡は、金沢市の市街地から北西方約５km の、戸水町と藤江北４丁目にまたがって位置する弥生時代中期後半の集落遺跡である。

金沢市は、石川県の県都として能登半島の付け根に位置し、西方には日本海を臨む。北は河北郡内灘町と津幡町に、南は松任市と石川郡野々市町・鶴来町・河内村・吉野谷村とそれぞれ接している。また東は隣県の富山県と接する。面積約460km²を測り、人口約44万人（昭和60年10月現在）を数える北陸の中核都市である。



第１図　戸水Ｂ遺跡の位置

日本海を臨む海岸線は、遠浅の砂浜が続き、全国的にも知られる内灘砂丘が形成されている。その後背地にあたる平野部は、市内を流れる浅野川と犀川によって形成された、複合扇状地である。過去に幾度も氾濫し、洪水を起こしたこの二つの河川も、今では改修が進み、古都金沢の顔として静かなせせらぎを見せている。

海岸線から10km前後までは、標高が10mに満たない沖積平野が広がっている。とりわけ市街地より北西方は、浅野川・金腐川が河口近くで天井川となっていることも手伝って、低湿な地域になっている。

こうした低湿地の一角に、この戸水Ｂ遺跡は立地する。現在この周辺は、見渡す限り平坦な土地となっており、開発著しい金沢市にあっていまだ田園風景をとどめているところである。しかしながら最近の遺跡発掘調査や、土地の老人などの話から、現在見られるこの平坦な土地も、明治の耕地整理以前には小河川が複雑に入り組んだ、変化に富んだ地形であったようである。現在までに発見されている遺跡の多くは、この複雑な地形の微高地上に立地している。当遺跡に隣接する石川県工業試験場が建っている辺りも、以前は麻畑を営む小丘であったという。戸水Ｂ遺跡の中枢部は石川県立金沢西高等学校の敷地で、盛り土による保存がなされていると言われているが、もしかすると中枢部はこの丘の上にあったのかもしれない。

周辺の耕地整理は全国に先駆けて実施された。それまでは田の中に高低があり、水の入らないところは畑として散在し、畦のない田も見られたようである。小字名で「たかだ・たかやま・たかみ」などが残っているのは、当時の名残であろう。耕地整理の折りには大阪からトロッコを借り受けるなどして、かなり大規模に地形の改変がなされたようである。残念ながらこのとき破壊

されてしまった遺跡も、少なくないようである。破壊を免れた遺跡にあっても地面が削られ、包含層は残っていないものが多く、わずか数cmの深さとなった竪穴住居址が検出されることも少なくない。それにも関わらず、周辺は県下有数の遺跡密集地域である。水利のよい低湿な地域での水田耕作を背景に、主に弥生時代から近世まで連綿と暮らした人々の足跡がそこに残されている。

第2節　歴史的環境

金沢平野は犀川－伏見川を境として北部平野と南部平野に二分される。本遺跡は北部平野の南よりの犀川右岸に立地する。

この北部平野では、現在までのところ縄文時代中期にまでさかのぼる遺跡は確認されておらず、縄文時代後期の遺跡が最も古い段階のものである。近いものでは南西方約3kmに北塚A遺跡（46）が存在する。同遺跡は縄文時代中期後葉～後期前葉にかけて営まれた集落跡である。この北塚A遺跡も犀川－伏見川ラインを越えた南にあたり、中屋遺跡、御経塚遺跡、新保本町チカモリ遺跡が鼎立する一大文化圏の一部と考える方が自然であろう。この他南方約1.5kmに北町遺跡（7）、南東方約1.5kmに西念クボ遺跡（10）、東方約0.5kmに二ツ屋遺跡（13）、北方約2.5kmに近岡遺跡（22）、西方約1.5kmに畝田遺跡（33）、北西方約2kmに寺中B遺跡（37）、西方約1.5kmに松村A遺跡（42）と松村B遺跡（44）などが存在しているが、いずれの遺跡も縄文時代については実態が明らかになっていない包含地の遺跡である。

弥生時代に入ると遺構を伴う遺跡が増えてくる。現在の大野庄用水を挟んで南に隣接する藤江C遺跡（4）では、平成2年度に実施された第1次調査で、くるみやどんぐりなどの堅果類を貯えた、貯蔵穴が検出されている[1]。この貯蔵穴は出土した土器から、北陸における弥生時代の最も早い段階に属する遺構であると考えられる。この他、東方約0.5kmの二ツ屋町遺跡（13）でも、平成元年度の調査で柴山出村式の土器が出土している。さらに東方約1kmの南新保三枚田遺跡（15）や北方約1.5kmの戸水C遺跡（23）では、遠賀川系の土器が出土している。

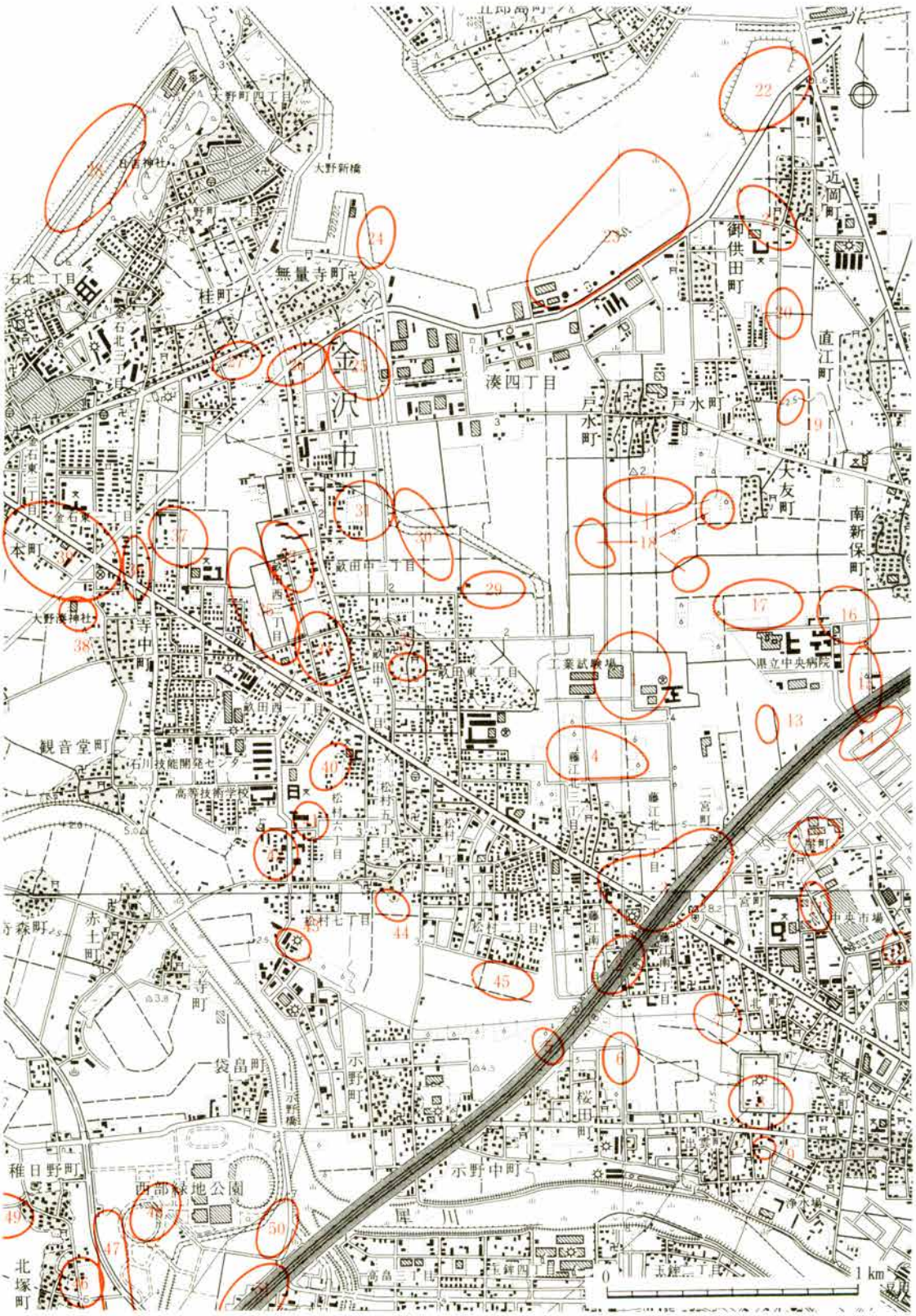
北西方約2kmには加賀地域における弥生時代中期前葉（畿内Ⅲ様式併行期前半）の標式遺跡である寺中B遺跡（37）が存在する。昭和49年に実施された第2次調査では周溝を有する平地式建物が検出されている[2]。戸水B遺跡でも第6次調査で1棟が確認されているものである[3]。畿内第Ⅲ様式併行期後半の遺物を出土した遺跡としては、西方約1.5kmに畝田遺跡（33）、東方約1kmに西念・南新保遺跡（14）が存在する。特に西念・南新保遺跡は昭和55年度から平成元年度までに8次にわたる発掘調査が実施され、方形周溝墓群や焼失竪穴住居などが検出されたり、重圏文鏡や大量の木器・土器が出土している。同遺跡は周辺地域における拠点的集落と位置付けられ得るもので、いわゆる戸水B式土器も出土しており、戸水B遺跡との関連の点でも注目される[4]。

ここまでがほぼ戸水B遺跡以前の遺跡である。戸水B遺跡は、弥生時代中期末のほぼ一時期におさまる遺跡である。これに対し周囲の多くの遺跡は、いくつかの時期あるいはいくつかの時代にまたがる複合遺跡である。それらの遺跡とあり方を比較した場合、戸水B遺跡の特異性が注目される。

戸水Ｂ遺跡以降の遺跡としては、南方約1.5kmに平成２年度の発掘調査で従来の法仏式期よりも古相を示す土器群が出土した、桜田・示野中遺跡（５）が存在する[5]。ここでも周溝を有する平地式建物が６棟検出されている。同遺跡では他に管玉の未成品や剝片が多数出土しており、玉造りとの関係が注目される。中期に続き西念・南新保遺跡（14）では、７次（昭和63年度）と８次（平成元年度）の調査で掘立柱建物群や焼失家屋の竪穴住居などが検出され、弥生時代後期の集落構成が確認された。寺中Ｂ遺跡（37）では平成元年度の発掘調査でさらに１棟の平地式建物が検出され、弥生時代後期を中心とした土器も多く出土している[6]。さらに北方約0.5kmには土地区画整理事業に係る平成３年度の発掘調査で弥生時代後期の土器が多数検出された戸水オモテ遺跡（18）が存在する。この発掘調査は平成４年度以降も継続して実施され、大きな成果が期待される。この他弥生時代の遺跡としては南方約0.7kmに藤江Ｂ遺跡（３）、北東方約1.2kmに近岡カンタンボ遺跡（20）、北西約0.8kmに畝田Ｃ遺跡（30）と畝田無量寺遺跡（31）、その先約1.6kmに無量寺金沢港遺跡（24）、西方約１kmに松村平田遺跡（41）、南西方約1.4kmに松村どのまえ遺跡（43）、南方約１kmに松村高見遺跡（45）、さらにその先犀川を越えた約2.2kmには古府カタガリ遺跡（50）と古府クルビ遺跡（51）がそれぞれ存在する。これらのほとんどは包含地の遺跡であり、弥生時代に関しては実態がはっきりとしていないものが多い。

古墳時代の遺跡では、まず隣の藤江Ｃ遺跡（４）が挙げられる。平成２年度から始まった発掘調査で、河道跡から大量の古墳時代前期の土器が出土したほか、かなり削平はされているものの竪穴住居跡や布掘りの掘立柱建物跡などが検出されている。さらに墳丘が削平された小型の前方後方墳と方墳がそれぞれ１基ずつ検出されている。この藤江Ｃ遺跡も土地区画整理によりその大半が発掘調査対象範囲に含まれている。今後の調査で大きな成果が得られるであろう。平成２年度と３年度には戸水Ｃ遺跡の発掘調査も行われた。この調査では、全長24mの前方後方墳の他、方墳６基以上が検出され、過去の調査と合わせ10基以上の古墳がまとまった古墳群であったことが確認された。平野部での発掘調査で、墳丘が削平され周溝だけが残った古墳の検出例が増えてきており、注意しておかなければならないだろう[7]。また、南東方約１kmには二口六丁Ａ遺跡（11）が存在する。昭和53年の第１次調査では大量の古墳時代前期の遺物が出土している[8]。さらに西方約1.5kmの畝田遺跡（33）では、昭和60年度から３か年にわたって発掘調査が実施され、大量の土器の他、古墳時代初頭の大溝から、玉杖形木製品や弧文板、卜骨などが出土している。また、古府クルビ遺跡（51）は発掘調査で出土した土器群で、古墳時代前期の「古府クルビ式」が設定されたことで知られる遺跡である。南西方約３kmには北塚遺跡群（46～48）が存在する。古墳８基が確認されており、当時の墓域であったと考えられている[9]。この他、南方約1.8kmの薬師堂遺跡（８）、南東方約1.5kmの西念クボ遺跡（10）、北西方約２kmの無量寺遺跡（25）、桂遺跡（27）、南西方約3.3kmの稚日野遺跡（49）などの包含地の遺跡が存在する。

古代の遺跡では、南方約1.2kmに存在し、昭和44年に発掘調査が実施された藤江Ａ遺跡（２）、その翌年に発掘調査が実施された藤江Ｂ遺跡（３）がある[10]。この発掘調査で４間×６間両庇付きの掘立柱建物跡が検出されたほか、「石田庄」、「石田」などの墨書土器が出土しており、石田庄の存在が示唆された。さらに藤江Ｃ遺跡（４）では、平成２年度の調査で７棟以上の掘立建



第2図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

No.	県遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	現　況	時　代	主な出土品
1	1536～1537	戸水B遺跡	金沢市戸水，藤江北4丁目	集落跡	平地，水田，学校	弥生，奈良，平安	弥生土器，砥石，須恵器，土師器
2	1411	藤江A遺跡	金沢市藤江	集落跡	北陸自動車道	奈良，平安	須恵器，土師器
3	1412～1414	藤江B遺跡	金沢市藤江	包含地	平地，水田	弥生，古墳，奈良平安	弥生土器，打製石斧，須恵器，土師器
4	1415	藤江C遺跡	金沢市藤江北	集落跡	平地，水田，梨畑	弥生，古墳，奈良平安，中世	弥生土器，打製石斧，須恵器，土師器
5	1309	桜田・示野中遺跡	金沢市示野中	集落跡	平地，水田，道路	弥生，奈良，平安	弥生土器，須恵器，土師器
6	1409	出雲じいさまだ遺跡	金沢市出雲	包含地	平地，水田	奈良，平安	須恵器，土師器
7	6514	北町遺跡	金沢市北町	包含地	平地，水田，畑地	縄文	打製石斧
8	1410	薬師堂遺跡	金沢市薬師堂	包含地	平地，変電所	古墳	土師器
9	1408	若宮遺跡	金沢市若宮	包含地	平地，水田	室町	珠洲焼，灯明皿
10	1419～1420	西念クボ遺跡	金沢市西念	包含地	平地，宅地	縄文，古墳	
11	1416	二口ロクチョウA遺跡	金沢市二口	集落跡	平地，工場用地	古墳	須恵器，土師器
12	1417	二口ロクチョウB遺跡	金沢市二口	包含地	平地，市場	古墳	土師器
13		二ツ屋町遺跡	金沢市二ツ屋	包含地	平地，水田，道路	縄文，弥生，奈良平安	縄文土器，弥生土器，須恵器，土師器
14	6177	西念南新保遺跡	金沢市西念，南新保	包含地	平地，水田	弥生	
15	1538	南新保三枚田遺跡	金沢市南新保	包含地	平地	弥生，奈良，平安	弥生土器，須恵器，土師器
16	1540	南新保C遺跡	金沢市南新保	包含地	平地，水田，畑地	古墳	土師器
17		南新保E遺跡	金沢市南新保	包含地	平地，水田，病院		
18	6519	戸水オモテ遺跡	金沢市戸水，大友，南新保	包含地	平地，水田	弥生，奈良，平安中世	土師器，須恵器
19	6722	大友遺跡	金沢市大友	包含地	平地，水田	奈良，平安	土師器，須恵器
20	6723	近岡カンタンボ遺跡	金沢市近岡	包含地	平地，水田	弥生，奈良，平安	弥生土器他
21	6724	近岡ナカシマ遺跡	金沢市近岡	包含地	平地，水田	弥生，奈良，平安	弥生土器，土師器，須恵器
22	1543～1545	近岡遺跡	金沢市近岡	包含地	平地，港湾，宅地	縄文，古墳，鎌倉室町	縄文土器，磨製石斧，土師器，管玉磨石，珠洲焼，越前焼など
23	1525，1535	戸水遺跡，戸水C遺跡	金沢市無量寺戸水	包含地	海岸，金沢港湾内	古墳，奈良，平安中世	土師器，管玉，珠洲焼，越前焼など
24	1529，1531	無量寺金沢港遺跡	金沢市無量寺	包含地	海岸，金沢港湾内	縄文，弥生，古墳	土器
25	1526～1527	無量寺遺跡	金沢市無量寺	包含地	平地，宅地，一部水田	古墳，鎌倉，室町	土器，珠洲焼，石臼，漆器椀
26	1528	無量寺B遺跡	金沢市無量寺	包含地	平地，水田	弥生，古墳	土師器
27	1524	桂遺跡	金沢市桂	包含地	平地，水田	古墳	土師器，砥石
28	6716	金石北遺跡	金沢市金石北	包含地	平地，水田	不詳	土師器
29		畝田ナベタ遺跡	金沢市畝田	集落跡	平地，水田，道路	奈良，平安	土師器，須恵器，斎串
30		畝田C遺跡	金沢市畝田	包含地	平地，水田	弥生	弥生土器，小形片刃石斧，石鏃
31	1501～1502	畝田無量寺遺跡	金沢市畝田，寺中，無量寺	包含地	平地，水田	弥生，古墳	土師器，須恵器
32	1516	畝田御台場遺跡	金沢市畝田	堡塁	平地，宅地	江戸	
33	1509～1513	畝田遺跡	金沢市畝田	包含地	平地，水田	縄文，弥生，古墳，奈良，平安，中世	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，珠洲焼，越前焼，青白磁，管玉，勾玉
34	1514～1515	畝田大徳川遺跡	金沢市畝田	包含地	平地，水田，宅地	奈良，平安，中世	土師器，須恵器，珠洲焼，越前焼，井戸枠
35	1499～1500	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田，寺中	包含地	平地，水田	古墳，奈良，平安	土師器，須恵器
36	1497～1498	寺中遺跡	金沢市寺中	包含地	平地，水田	弥生，古墳	土器，磨製石斧，石鏃，砥石など
37	1494～1496	寺中B遺跡	金沢市寺中	集落跡	平地，水田，宅地	縄文，弥生，古墳	土器，打製石斧，土師器など
38	1522	寺中御台場遺跡	金沢市寺中	堡塁	平地，社地	江戸	
39	1523	金石本町遺跡	金沢市金石本町	集落跡	平地，水田，一部宅地	奈良，平安	土師器，須恵器，墨書土器
40	1318～1319	松村西の城遺跡	金沢市松村	包含地	平地，水田	古墳，奈良，平安	土師器，須恵器
41	1320	松村平田遺跡	金沢市松村	包含地	平地，水田	弥生	弥生土器，石斧，石鏃
42	1312～1314	松村A遺跡	金沢市松村	包含地	平地，水田	縄文	縄文土器，打製石斧，石鏃，磨製石斧
43	1311	松村どのまえ遺跡	金沢市松村	包含地	平地，水田，宅地	弥生	弥生土器，石鏃
44	1315～1317	松村B遺跡	金沢市松村	包含地	平地，水田，宅地	縄文	縄文土器，石斧，石鏃
45	1310	松村高見遺跡	金沢市松村	包含地	平地，水田	弥生	弥生土器，石斧，管玉，管玉未成品
46	1296	北塚A遺跡	金沢市北塚	集落跡	平地，水田，道路，宅地	縄文	縄文土器，打製石斧，磨製石斧，石鏃，硬玉，凹石，硬玉大珠，磨石

No.	県遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	現　況	時　代	主な出土品
47	1297～1299	北塚B遺跡	金沢市北塚	包含地	平地，水田，道路，古墳	縄文，古墳，平安	打製石斧，石鏃，御物石器，土師器須恵器，灯明皿
48	1300	北塚C遺跡	金沢市北塚	包含地	平地，水田，公園，野球場	古墳	土師器，管玉
49	1294～1295	稚日野遺跡	金沢市稚日野	包含地	平地，水田，道路	縄文，古墳	須恵器，勾玉，打製石斧
50	1306～1307	古府カタガリ遺跡	金沢市古府	包含地	平地，宅地	弥生，奈良，平安	土器，須恵器
51	1303～1305	古府クルビ遺跡	金沢市古府	包含地	平地，宅地，道路	弥生，古墳，奈良平安	土器，土師器，須恵器，鉄片，石製紡錘車

物跡が検出されたほか、その掘立柱建物跡群内を区画するとみられる掘立柱列も検出されている[1]。藤江C遺跡の発掘調査はさらに続くため、掘立柱建物跡の検出棟数は増えるとみられる。また、桜田・示野中遺跡（5）からも平成2年度の発掘調査で、「石田」と書かれた墨書土器が出土しており、藤江A・B遺跡との関連が注目されている[5]。

戸水C遺跡（23）は、平安時代の初めにはなんらかの官衙的な施設があったとみられている遺跡である。これまで数次にわたる調査がなされ、目を見張る成果が挙げられている。平成2年度と3年度にも発掘調査が実施され、8棟の掘立柱建物跡や、渡来銭の埋納遺構などを検出したほか、緑釉陶器、灰釉陶器、獣脚付円面硯、斎串などが出土している。この他にも北西約0.6kmの畝田ナベタ遺跡（29）、西方約2.2kmの金石本町遺跡（39）などの集落遺跡の他、北方約0.5kmの戸水遺跡群（18）、東方約0.5kmの二ツ屋町遺跡（13）などの古代の遺跡が数多く周辺に立地している。

周辺において中世の遺跡となると、その数は非常に少なくなる。おそらく近世以降現在の集落域とほぼ同じ様な位置に生活域があったのであろう。そうした中で周囲には、南方約1.9kmに若宮遺跡（9）、北西方約1.6kmに無量寺遺跡（25）などが存在するほか、隣の藤江C遺跡でも平成元年度の発掘調査で、鎌倉時代に属する井戸2基などが検出されている。

註

(1)　藤江C遺跡現地説明会資料　1990年

(2)　『金沢市寺中遺跡』　金沢市文化財紀要11　金沢市教育委員会　1977年

(3)　金沢西部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査で、周溝の内側に根がらみ構造を持つ6主柱多角形の建物跡を検出した。

この平地式建物は弥生時代中期に出現し、古墳時代前期まで見られるもので、周溝が土坑を連続させたような不定形を呈するものである。主に北陸を中心とした日本海側に分布するようだが、ここ数年で確認例も増えており、県内でも検出例はすでに数十棟を数えるにいたっている。この寺中B遺跡の例は現在報告されているものの中では古い方に属するものである。

(4)　『金沢市西念・南新保遺跡』　金沢市文化財紀要40　金沢市教育委員会　1983年
『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』　金沢市文化財紀要77　金沢市教育委員会　1989年
『金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ』　金沢市文化財紀要99　金沢市教育委員会　1992年

(5)　『桜田・示野中遺跡』　金沢市文化財紀要92　金沢市教育委員会　1992年

(6)　『寺中B遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1991年

(7)　野々市町御経塚シンデン遺跡、松任市一塚遺跡などの検出例がある。

(8)　『二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1083年

(9)　『北塚遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年

(10)　『藤江A遺跡』　石川県教育委員会　1969年
『藤江B遺跡』　石川県教育委員会　1970年

参考文献

福田弘光編著　『大徳郷土史』　大徳公民館　1970年

第２章　調査の経緯と経過

第１節　戸水Ｂ遺跡の既往の調査（第３図）

１　遺跡の発見（1973年）と第１次調査（1974年）

戸水Ｂ遺跡の発見は、昭和48年（1973年）に遡る。同年６月、石川県立金沢西高等学校の建設予定地として、金沢市戸水町、南新保町、藤江町にまたがる土地約16,000㎡が内定し、県教育委員会庶務課の依頼をうけた同文化財保護課が建設に先立ち分布調査（同年10月30日～11月１日）を実施したところ、弥生時代を主体とする遺跡が発見されたのである。

協議の結果、校舎等構造物は遺跡の確認されなかった予定地東側に建設し、遺跡が発見された予定地西側については、グランド用地として約１ｍの盛土を施し保存することとなり、発掘調査は、予定地西縁の取り付け道路部分のうち、現農道を除く拡幅部分約423㎡（延長約140㎡、幅約３ｍ）について実施することで合意に達した。

発掘調査は、昭和49年（1974年）３月７日～４月６日にかけて、悪天候のなかを年度をまたいでおこなわれ、弥生時代の溝６条、土坑５基、平安時代の溝１条などを検出している。出土土器は、その後橋本澄夫[1]、湯尻修平[2]両氏によって研究が進められ、畿内第Ⅳ様式に並行するものとして戸水Ｂ式土器の設定をみている。同土器は、現在も遺跡の所在する加賀地域のみならず、北陸を代表する弥生時代中期末葉の標式として著名である。

２　第２次、第３次調査（1981年）と立会い調査（1983年）

第１次調査から５年後の昭和54年（1979年）には、金沢西高等学校の西側に隣接して石川県工業試験場（県商工労働部商工課主幹）の移転計画が立案された。工業試験場の依頼をうけ、昭和55年（1980年）３月１日～３月30日にかけて、埋蔵文化財センターが同予定地を分布調査し、現存する遺跡の西端を確認している。その結果、建物等構造物は遺跡の確認されなかった予定地西側に建設し、遺跡が確認された予定地東側は緑地とし、発掘調査は予定地南東縁に計画された進入路約800㎡（第１次調査区の南西側）について実施することとなった[3]。

発掘調査は、昭和56年（1981年）６月９日～７月30日にかけて実施され、溝７条、土坑18基などを検出しているが、この間、金沢西高等学校敷地内では第二体育館建設が計画され、それにともなう発掘調査（約1,200㎡、第１次調査区の南東側）も上記調査にほぼ並行しておこなわれている（同年５月１日～７月20日）[4]。溝12条、土坑20基のほか分銅形土製品などを検出した後者が第２次調査、前者が第３次調査となる。

なお、工業試験場敷地内では、その後第３次調査区の北側（第１次調査区の西側）で建物（鉄工会館）建設にともない埋蔵文化財センターが立会い調査を実施し（昭和58年（1983年）５月４日）、第３次調査区西側で検出した南北溝（27号溝）の延長部と推定される溝内より、完形品の竪杵２点を検出している。

3　第4次（1988年）、第5次調査（1989年）

第4次、第5次調査は本報告分であり、その詳細については次節以降でふれるとして、以下、簡単に経緯と経過をまとめておくこととする。

本調査は、県商工労働部商工課が工業試験場敷地の北側で計画した第2地場産業振興センター（仮称、現地場産業振興センター新館）建設にかかる敷地造成事業を原因としている。昭和62年（1987年）9月に分布調査の依頼がなされ、同年12月に埋蔵文化財センターが分布調査を実施、結果の回答をおこなっている。同予定地は、次項以降でふれる金沢西部地区土地区画整理事業予定地に含まれていたこともあって、すでに昭和61年（1986年）度に同事業にともない分布調査を実施し、本遺跡の存在が推定されていたところであるが、範囲を詳細を確定するため、再度トレンチ法による分布調査をおこなったのである。

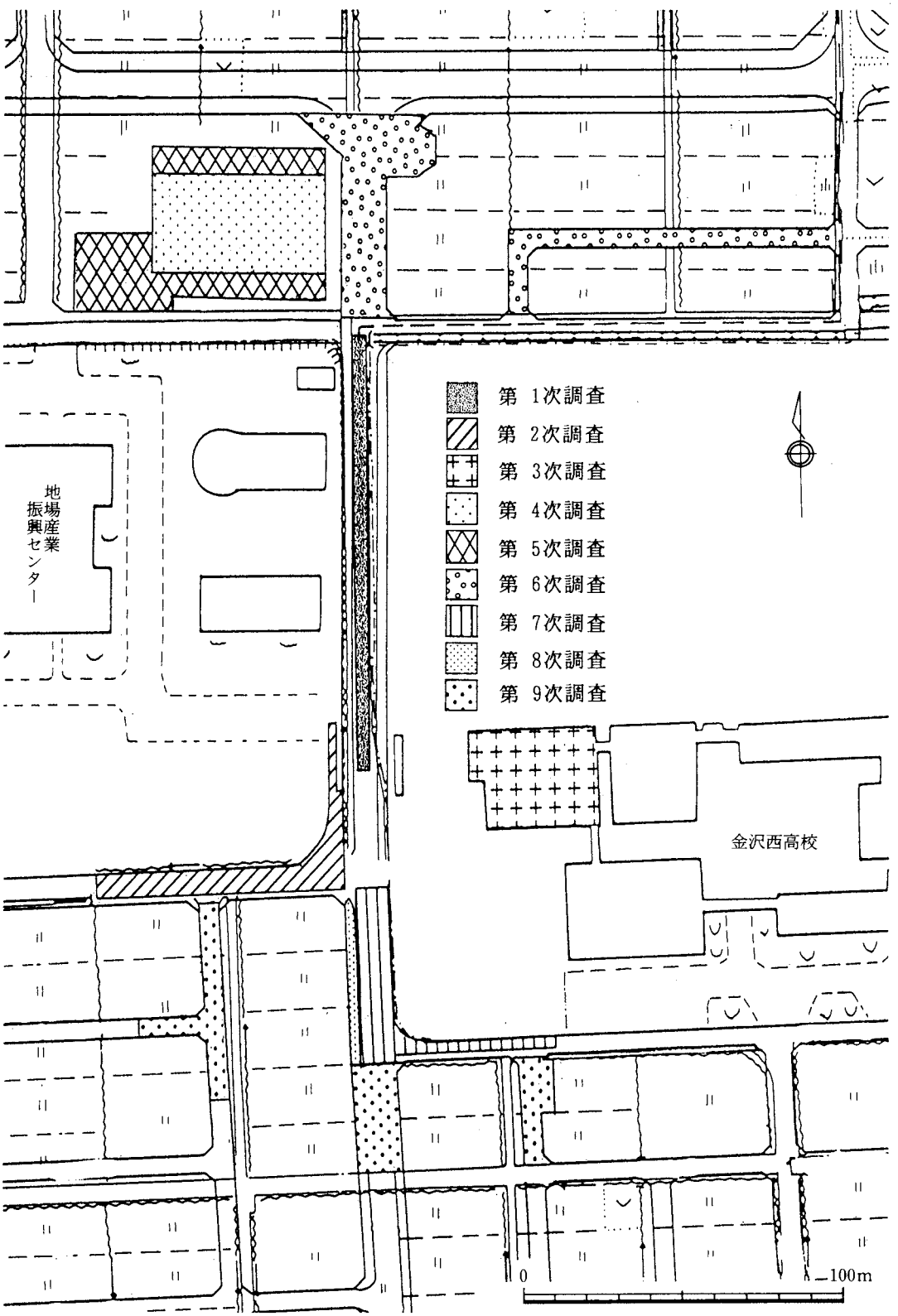
上記の分布調査結果にもとづき、建物建設によって影響をうける部分約1,500㎡（第1次調査区の北西側）について、発掘調査を実施することで合意ができ、昭和63年（1988年）8月8日～10月14日にかけて、埋蔵文化財センターが発掘調査（第4次調査）を実施している[5]。調査では溝、土坑、掘立柱建物などを検出したほか、絵画土器も出土した[6]。

第4次調査終了後、調査区には敷地造成のために盛土（砂）が施され、翌年度には本体工事着工および完成の運びとなったが、その後工事計画が大幅に変更となり、追加発掘調査の必要性が生じてきた。具体的には、建物規模が拡大したため、第4次調査区に接する北、南、南西側あわせて約1,000㎡が新たに影響をうけることとなった。第5次発掘調査は、平成元年（1989年）5月8日～6月9日にかけて実施され、溝、土坑などを検出している。一部は、第4次調査で検出した遺構の延長である。なお、第5次調査は、次項でふれる第6次調査（6月12日～8月2日）にさきだっておこなわれた。

4　土地区画整理事業と第6次調査（1989年）

第6次～第9次調査の原因は、すべて金沢西部地区土地区画整理事業である。同事業は、県金沢駅鉄道高架事務所金沢西部開発室（県土木部都市計画課主幹、現金沢西部開発事務所）が実施するもので、昭和61年（1986年）に同室の依頼をうけ、事業予定地100.9haについて埋蔵文化財センターが分布調査を実施している。その結果本遺跡は、県立金沢西高等学校および県工業試験場敷地の南北両端の同事業予定地内にも所在することが明らかとなった。

同事業の実施によって影響をうける埋蔵文化財の取扱いについては、年度毎に具体的な協議をおこない、順次発掘調査等を実施していくことで大筋の合意ができ、平成元年（1989年）6月12日～8月2日にかけて、街路建設予定地となった第4次、第5次調査区の東側東西2箇所あわせて約1,700㎡について、埋蔵文化財センターが発掘調査をおこなっている（第6次調査）。溝、土坑などのほか、西側の調査区では、柱穴内に柱根、枕木が遺存した平地式建物1基（約二分の一）を検出した[7]。協議の結果、同建物については街路外（区画内）約150㎡を拡張し全掘している。（総調査面積は約1,850㎡）[8]。第6次調査は第5次調査に引き続いておこなわれたことは前述したが、さらに同事業にともなう金沢市二ツ屋町遺跡発掘調査（約1,300㎡、同年6月26日



第3図　戸水B遺跡調査区位置図（S＝1/2,000）

～7月28日）も並行しておこなっている[8]。

5　第7次（1989年）、第8次調査（1990年）

第7次調査は、第6次調査と同じ平成元年度におこなわれたが、調査にいたる経緯は異なるものであった。同年秋、金沢西部開発室が金沢西高等学校敷地の南および西側を通る都市計画道路（3・5・20金沢西校通り線）敷内で、鞍月用水切替えにともなう暗渠工事他に着手したのである。同工事、というより現道下での工事にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、具体的な協議がなされておらず、高等学校敷地南西側（第2次、第3次調査区の南側）現道下には埋蔵文化財が遺存しており、同工事によって影響をうけることが判明したため、事態は深刻であった。協議の結果、急遽発掘調査を実施するものの、冬季間の調査でもあることから当該工事の実施に必要最小限の範囲（約800㎡）にとどめることとなった。平成元年（1989年）11月20日～12月14日にかけておこなわれた調査では、溝、土坑などを検出したほか、弓が出土している[8]・[9]。

翌平成2年度は、上記工事範囲のうち施行予定を次年度へ繰り延べた箇所について、平成2年（1990年）5月2日～5月14日にかけて発掘調査を実施している[10]。第7次調査区西側のさらに西側に隣接する箇所（第3次調査区の南東側約200㎡、延長50m、幅4m）である。なお、同年は引き続き、同事業にともなう金沢市藤江C遺跡（約5,800㎡、5月15日～11月30日）の発掘調査を実施している[11]。

6　第9次調査と立会い調査（1991年）

土地区画整理事業にともなうものとしては第4次、通算では第9次を数える最新の調査は、藤江C遺跡の発掘調査（約4,400㎡、5月21日～12月12日）と一部並行して、平成3年（1991年）4月11日～5月29日にかけて、第3次、第7次、第8次調査区の南側3箇所約1,300㎡についておこなわれた[12]。本遺跡の南端を確認したほか、西側の調査区で第3次調査区西側で検出された南北溝（27号溝）の延長と推定される東西溝を検出している。

第1次調査

第9次調査

なお平成２年度には、工業試験場敷地内（南東側）に石川県ソフトウェア研修開発センター建設計画が立案され、県商工労働部商工課との間で本遺跡の取扱いをめぐって協議がおこなわれている。建物本体は埋蔵文化財の所在範囲外であったため特に支障はなかったが、建物の西側で計画された合併処理施設放流管埋設および駐車場整備工事については、埋蔵文化財の所在範囲内であったため、盛土内で施行することを条件に、平成３年度工事立会いを実施している。

7　小　結

以上、昭和48年（1973年）の遺跡発見からやがて19年、本遺跡の発掘調査は９次にわたり、調査面積も9,000㎡をこえるものとなった。各調査区が概して小規模であるため、検出された遺構も全体像を把握できるものは少なく、隣接する調査区間の相互関係をみても、若干の調査不能範囲が介在することもあって、必ずしも明確とはいえない。公刊された報告書も本書が２冊目であり、大半の整理、報告が今後に持ち越されていることも、調査面積のわりには遺跡の全体像を不明確なものにしている一因であろう。今後も、主として土地区画整理事業にともなう発掘調査が想定されていることもあり、やや冗長となったがこれまでの経過をまとめてみた。

参考文献

(1)　橋本澄夫　「弥生土器－中部・北陸－」　『考古学ジャーナル』　№111　1975
(2)　湯尻修平　『金沢市戸水Ｂ遺跡調査報告』　石川県教育委員会　1975
(3)　小嶋芳孝・佐藤俊也　『戸水Ｂ遺跡　第３次調査の概要』　石川県立埋蔵文化財センター　1984
(4)　『石川県立埋蔵文化財センター年報』　第３号　昭和56年度　石川県立埋蔵文化財センター　1983
(5)　『石川県立埋蔵文化財センター年報』　第10号　昭和63年度　石川県立埋蔵文化財センター　1990
(6)　『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第27号　石川県立埋蔵文化財センター　1988
(7)　『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第31号　石川県立埋蔵文化財センター　1990
(8)　『石川県立埋蔵文化財センター年報』　第11号　平成元年度　石川県立埋蔵文化財センター　1991
(9)　『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第32号　石川県立埋蔵文化財センター　1990
(10)　『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第33号　石川県立埋蔵文化財センター　1990
(11)　『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第34号　石川県立埋蔵文化財センター　1991
(12)　『拓影』　石川県立埋蔵文化財センター所報　第31号　石川県立埋蔵文化財センター　1991

第２節　調査に至る経緯

前節でもふれたとおり、本調査の原因は県商工労働部商工課が工業試験場敷地の北側で計画した第２地場産業振興センター（仮称、現地場産業振興センター新館）建設にかかる敷地造成事業である。昭和62年（1987年）９月28日付商発第449号にて依頼を受け、同年12月３日に分布調査をおこない、敷地の過半に埋蔵文化財を確認し、同16日付埋文収第186号にてその結果を回答している。確認された埋蔵文化財は、周知の戸水Ｂ遺跡の拡がりと推定された。

協議の結果、建物予定地（金沢市戸水町イ63番地外14筆）にはほぼ全域に埋蔵文化財が所在しているため、その建設にかかる約1,500㎡について、昭和63年度に事前の緊急発掘調査を実施することとなった。具体的には、商工課が昭和63年（1988年）６月23日付商発第238号にて文化庁長官あて埋蔵文化財発掘の通知を、埋文センターが８月１日付埋文収第184号にて埋蔵文化財発掘調査の通知をおこない、８月８日から10月14日まで（現地）発掘調査を実施した。

現地調査の終了をうけ、引き続き商工課が水路付替、埋立・整地等造成工事に着手した。翌平成元年（昭和64年（1989年））度には本体工事着工および完成の運びとなり、事業は出土品整理および報告書刊行を残すのみとなるはずであったが、並行して進められていた本体工事実施設計が当初計画から大幅に変更され、建物規模の拡大にともない新たに埋蔵文化財が影響をうける箇所が生じてきた。再度協議をおこなった結果、平成元年度に前年度調査区に接する北、南、南西側あわせて約1,000㎡（金沢市戸水町41街区11－１・２）について発掘調査をおこなうこととなり、新たに商工課と埋文センターが文化庁長官あて埋蔵文化財発掘と埋蔵文化財発掘調査の通知をおこない、平成元年５月８日から６月９日まで（現地）発掘調査を実施した。

第３節　調査の経過

１　昭和63年度調査の経過

昭和63年度の現地発掘調査期間は、８月８日から10月14日まで実働39日である。調査担当者は藤田邦雄（埋文センター主事）、大藤雅男（埋文センター調査員）の協力を得ている。また、平成元年２月17日から３月17日まで、真智敏郎（埋文センター調査員）の協力を得て、種子選別作業等室内作業をおこなっている。以下、発掘調査日誌からその経過をふりかえっておく。

８月	８～11日（月～木）	（晴～晴時々曇）	重機による表土除去作業
	17日（水）	（晴）	機材搬入、調査区杭打ち作業
	18・19・23日（木・金・土）	（晴）	A_3～C_3区遺構検出・掘り下げ作業
	24日（水）	（曇時々晴）	A_3～B_3区遺構掘り下げ、B_4・C_4区同検出作業
	25日（木）	（雨のち曇）	排水、土坑内遺物実測作業
	26日（金）	（雨のち曇）	B_4・C_4区遺構検出・掘り下げ作業
	29日（月）	（晴）	B_4・C_4区遺構掘り下げ、A_3・B_3区遺構実測作業
	30・31日（火・水）	（晴）	A_4・B_4区遺構掘り下げ・土坑内遺物実測・取り上げ作業

9月	1・2日（木・金）	（晴時々曇）	10号溝遺物実測・取り上げ、C_5区遺構掘り下げ作業
	5・6日（月・火）	（曇時々雨）	遺構平面・土層断面実測作業
	8・9日（木・金）	（晴）	遺構平面・土層断面実測、A_4・B_5区遺構検出・掘り下げ作業
	12・13日（月・火）	（曇時々雨）	遺構平面・土層断面実測、A_5・B_5区遺構検出・掘り下げ作業
	14・19日（水・月）	（晴）	A_5区遺構検出・掘り下げ作業
	21・22日（水・木）	（曇時々晴）	遺構平面実測、B・$C_{1\cdot2}$区遺構検出・掘り下げ作業
	26～30日（月～金）	（曇）	A～$C_{1\cdot2}$区遺構検出・掘り下げ・遺構平面・土層断面実測作業
10月	1・3日（土・月）		同　上
	4・5日（火・水）	（晴）	調査区清掃、土層断面実測、写真撮影作業
	7日（金）	（曇）	10号溝掘り下げ、土層断面実測作業
	11日（火）	（晴）	土層断ち割り作業
	12～14日（水～金）	（曇時々雨）	遺構実測・標高記入・撤収作業

現地調査参加作業員（順不同、敬称略）

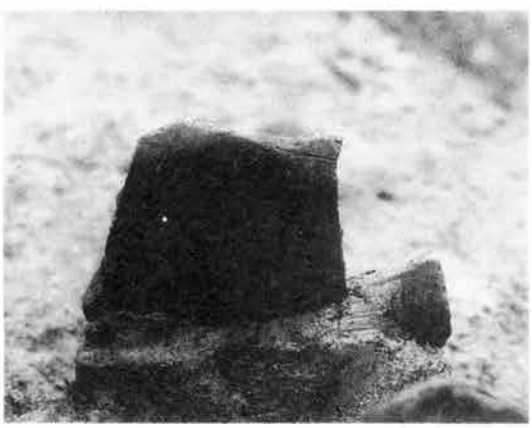
川端美智子　北野さや子　倉部　三郎　坂井かず子　坂井　澄江　佐野　外子　炭　博子
高倉　英明　高柳　春子　高柳美代子　竹内千鶴子　竹山くに子　谷口　宗治　中栄みゆき
西川　愛子　西村みどり　野間　耕平　蓮田　一雄　蓮田　貞子　三谷　正子　宮田　ハル
村上　勝次　村上　義雄　最里健太郎

室内作業参加作業員（順不同、敬称略）

姉崎　盛次　桑原奈都子　示村　誠一　高倉　英明　高橋由起子　早川　裕子　南　陽利志

2　平成元年度調査の経過

平成元年度の現地発掘調査期間は、5月8日から6月9日まで実働22日である。調査担当者は中屋克彦・栃木英道（埋文センター主事）、田畑弘、北野裕保（埋文センター調査員）の協力を得ている。調査着手時、前年度調査区に盛土用の砂が5mほどの高さに盛られており、周囲には



絵画土器

第4次調査

有刺鉄線が巡らされていた。雨水を含んだ砂が調査区に流出しその処理に苦慮した反面、相対にみて遺構密度が低かったこともあって、調査は順調に進んだ。昭和63年度調査同様、以下発掘調査日誌からその経過をふりかえっておく。

5月	8～10日（月～水）	（晴）	重機による表土除去作業
	11日（木）	（雨）	機材搬入準備、基準点確認作業
	17日（水）	（曇）	機材搬入、整理作業
	18・19日（木・金）	（晴）	遺構検出作業
	22日（月）	（晴）	排水作業
	23～25日（火～木）	（晴）	遺構検出作業
	26日（金）	（雨）	排水作業
	29～31日（月～火）	（晴）	遺構検出、掘り下げ作業
6月	1日（木）	（晴）	調査区清掃、203号溝掘り下げ作業
	2日（金）	（晴）	調査区清掃、203号溝掘り下げ、写真撮影作業
	5～7日（月～水）	（曇）	遺構実測、攪乱土中遺物片採集
	8日（木）	（曇）	遺構実測、201号土坑掘り下げ、調査区断ち切り作業
	9日（金）	（曇時々雨）	実測図確認作業

現地調査参加作業員（順不同、敬称略）

加藤　直枝　川村　春枝　木村　和雄　坂井かず子　坂井　澄江　坂田　進午　清水美佐枝
高崎　春子　高村　松子　高柳美代子　竹山くに子　西村みどり　西本与三作　藤高きよ子
本田　和子　宮上　正吉　宮田　ハル　最里健太郎

なお、出土品整理事業は主として社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。内容は、平成元年度に遺物洗浄、平成3年度に記名・分類・接合、復元、実測、トレースである。

第3章　遺　　構

第1節　第4次調査の遺構

1　土　坑

1号土坑（第6図）　C3区に位置する。北側は調査区外に拡がるため全形は不明。調査区内での大きさは東西135cm、深さ20cmである。そう深くない土坑であるが、遺物の残りは案外良く、土器はP1～5に分けて取り上げている。土坑覆土二層目の深さ10cm程度の位置に3cm前後の厚さを持つ炭化物層が堆積しており、遺物の多くは炭化物層以上から出土している。

2号土坑（第6図）　C3区に位置する。平面形は楕円形に近く、東西270cm、南北120cm、深さ15cmである。東側はやや浅い。基本層序は三層で、中間に厚さ5cm程の炭化物層が挟まる。最下層は黄白色粘土層である。

3号土坑（第6図）　C3区に位置し、北端を東西方向に伸びる溝状遺構に切られる。三方に突出する不整形の土坑で、南北220cm、深さ46cmである。土器はP1～7に分けて取り上げており、木片も少量出土している。やはり二層目に炭化物層が認められ、最下層は黄白色粘土層である。

4号土坑（第6図）　B3区の3号溝北側に位置する。平面形は隅円二等辺三角形状で東西160cm、南北100cm、西側にやや深く14cm程緩く落ち込む。最上層に多量の炭化物を含む粘土層、その下に白黄色粘土層の堆積が見られる。

5号土坑（第6図）　B3区に位置し、3、5号溝に切られる。方形に近いが、北側は二段掘り状となる。長辺125cm、短辺95cm、中央の最深部は49cmである。土器の量は多く、P1～9に分けて取り上げている。土層は一部冠水のため崩落したが、厚さ3cm程の炭化物層が三層目に認められる。また最下層の褐色腐植土層からは形状の残る木片が出土している。

6号土坑（第6図）　B3区に位置する。長径125cm、短径85cm、深さ31cmの楕円形の土坑である。南側の上方に土器が集まっており、P1～5に分けて取り上げている。遺物を多く含む1、2層には少量の炭化物が混じるが、炭化物自体が層を成してはいない。

7号土坑（第6図）　A・B3区に位置し、7号溝に切られる。楕円形で、東西190cm、南北100cm、深さ17cmである。炭化物層は見られない。

8号土坑（第6図）　A3区に位置する。周辺はピット状の遺構が多く見られる。南北105cm、東西80cm、深さ47cmの楕円形で、遺物は層位に関係なく多く、P1～6に分けて取り上げている。土層の堆積は二時期あり、最初期の最下層には植物遺体や炭粒を含む粘土層、二時期目の最下層には炭粒を多量に含んだ暗褐色粘土層が認められる。炭化物層になると思われる。

9号土坑（第7図）　A3区に位置する不整形の土坑で、中央を7号溝に切られる。東西220cm、南北125cm、深さ15cmである。二層目には、厚さ2cm程の炭化物層が若干認められる。

10号土坑（第5図）　土坑ではなく川状の落ち込みである。A3～5区に拡がり、南北に伸びる9・13号溝と接続する完掘はしていない。土坑群より新しい時期の遺構である。

11号土坑（第７図）　Ａ２・３区に位置する。一辺150cm程の方形に近い土坑で、北側に平坦面を持つ。最深部は74cmと当遺跡の土坑群中最も深い。土層は二時期に別れ、最下層は黒褐色植物遺体層、二時期目の最下層には厚さ２cm前後の炭化物層が認められる。全体に炭粒の混入が多い。

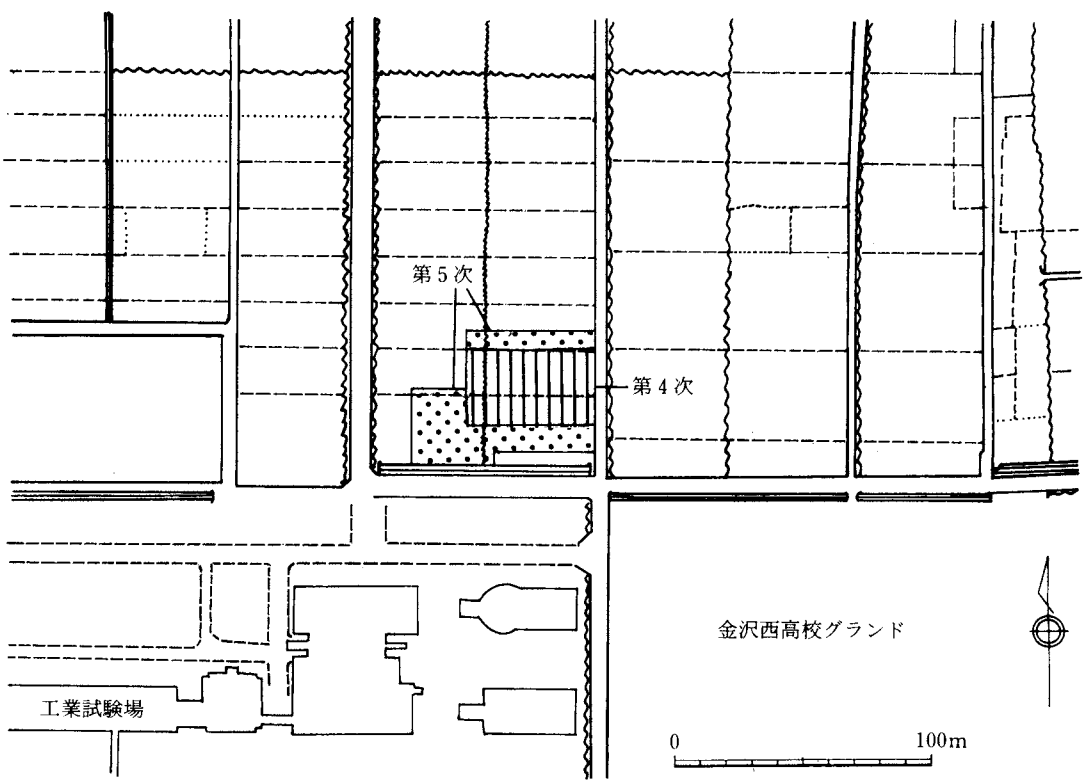
12号土坑（第７図）　Ａ２・３区に位置する不整の溝状遺構である。南北320cm、東西80cm、最深部20cmで、両端は10cm弱と浅い。炭化物層は見られない。

13号・14号土坑（第７図）　Ｂ３区に位置する。７号土坑の東側に並ぶ楕円形の土坑で、それぞれ東西150cm、80cm、南北60cm、50cm、深さ５cm、７cmである。覆土は共に地山に近い黄白色粘土層の単層である。

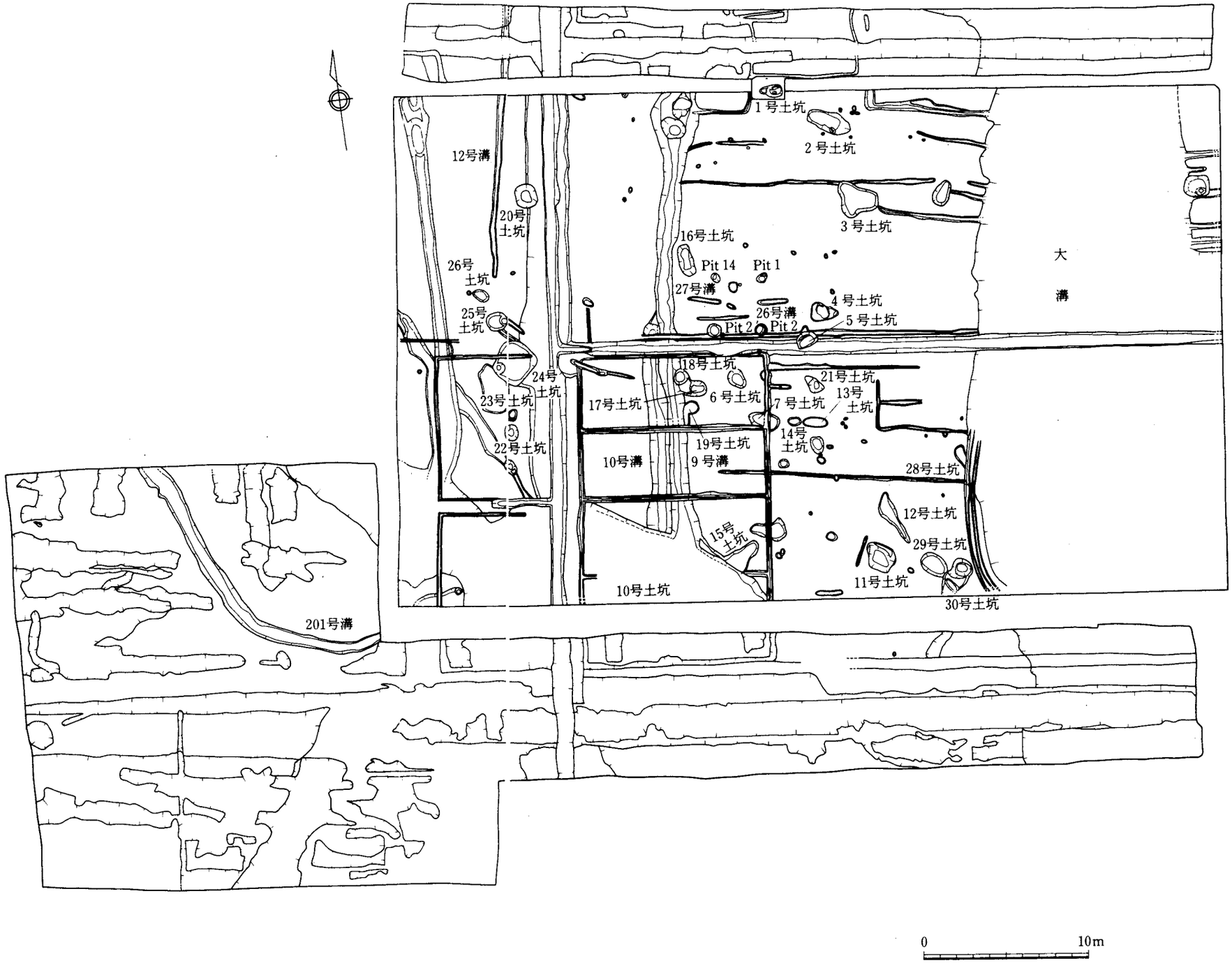
15号土坑（第７図）　Ａ３・４区に位置する。南西側を10号土坑、７・９号溝に切られるため全形は不明。確認できる最大幅は150cm、深さは22cmである。覆土は三層に分かれ、いずれにも炭粒が含まれるが、特に二層目の黄灰色粘土層には多量に混入している。土器は一、二層目に多く、Ｐ１～９に分けて取り上げている。

16号土坑（第７図）　９号溝の東側に並び、Ｂ・Ｃ４区にまたがる。やや不整の楕円形で、南北195cm、東西90cm、深さ20cmである。下層に炭化物層が存在するが、炭化物の量はやや少ない。最下層は白黄灰色粘土層である。

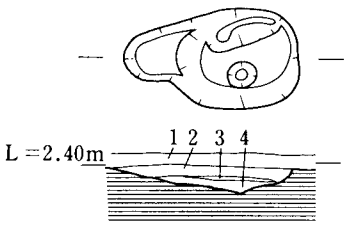
17・18号土坑（第９図）　Ｂ４区に位置し、９号溝に切られる。中央部に浅い平坦面を挟み、東側に17号土坑、北側に18号土坑が掘り込まれているが、同一遺構の可能性もある。平面形は両



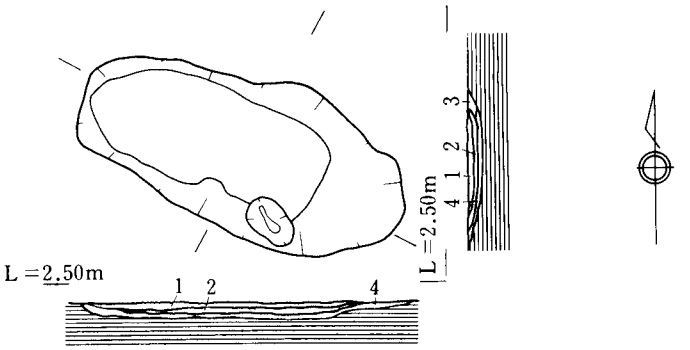
第４図　第４次・第５次調査区割（Ｓ＝1/3,000）



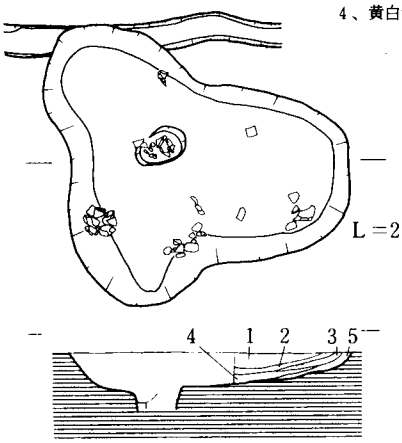
第5図　第4次・第5次遺構全体図



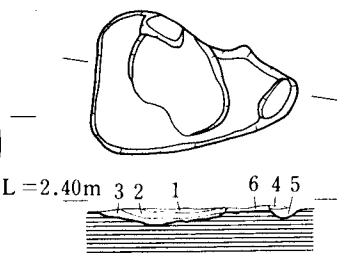
第１号土坑
１、耕土
２、濁灰色粘土（炭化物粒少量含む）
３、炭化物層
４、２に多量の炭化物含む



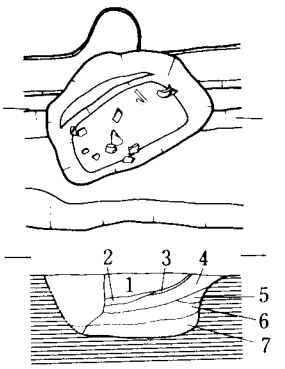
第２号土坑
１、濁暗灰色粘質土（炭化物少量、地山ブロック少量含む）
２、炭化物層（炭化物層がサンドイッチ状になっているところもある）
３、黄白色地山（やや粘質）
４、黄白色粘土（地山色で少量炭化物が混入）



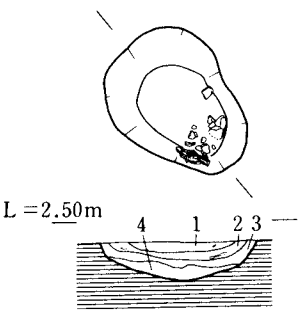
第３号土坑
１、黄白色地山層（砂質で少量炭化物粒含む）
２、炭化物層（間層と地山土が入る箇所有り）
３、黄灰色粘土（少量炭化物粒含む）
４、暗灰色粘土（細かい多量の炭化物粒含む）
５、黄白色粘土（地山色で少量の炭化物粒含む）



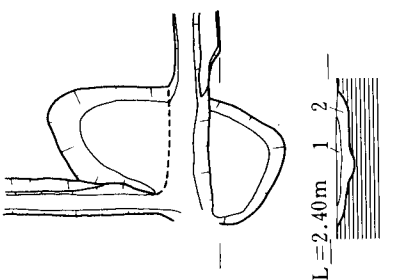
第４号土坑
１、灰色粘土（炭化物粒多量に含む）
２、黄白色粘土
３、２に地山土混入
４、灰色粘質土（炭化物粒少量含む）
５、黄白色粘質土
６、５とほぼ同じ



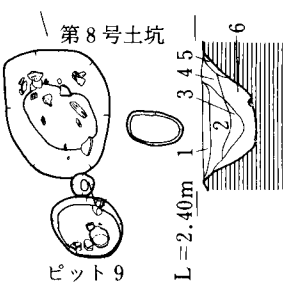
第５号土坑
１、濁灰色粘質土（地山ブロック、炭化物粒含む）
２、炭化物層
３、黄白色粘土
４、濁灰色粘土（地山ブロック、炭化物粒含む）
５、濁黄色粘質土（炭化物粒含む）
６、灰褐色粘土（炭化物粒含む）
７、褐色腐植土（形のある木有り、下に敷いたものか）



第６号土坑
１、黄灰色粘質土（炭化物粒少量含む）
２、暗灰色粘土（細かい炭化物粒含む）
３、２に地山ブロックが少量混じる
４、黄白色地山砂（炭化物、黄白色粘土が少量混じる）



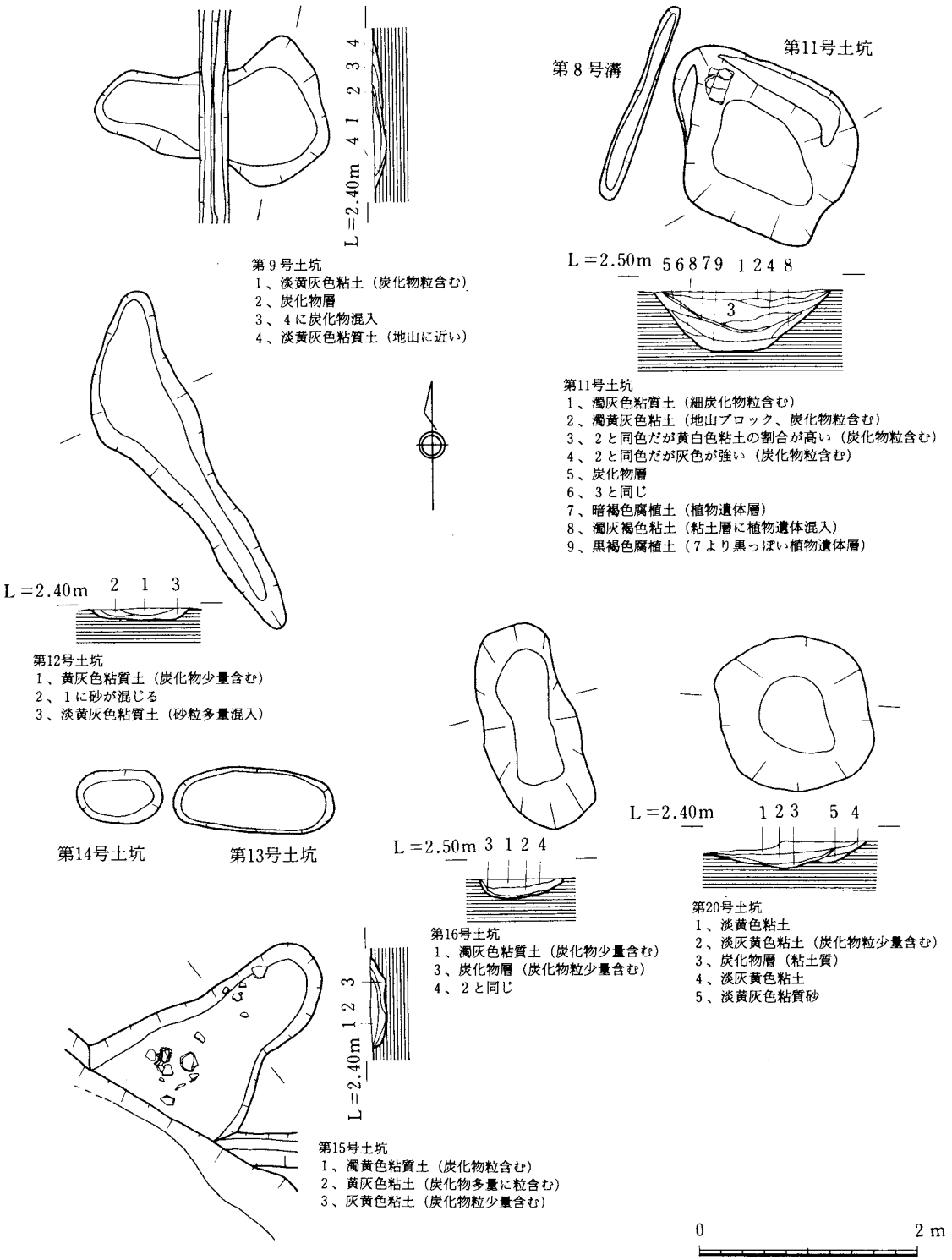
第７号土坑
１、淡灰色粘質土（炭化物粒含む）
２、淡黄灰色粘質土（炭化物粒少量含む）



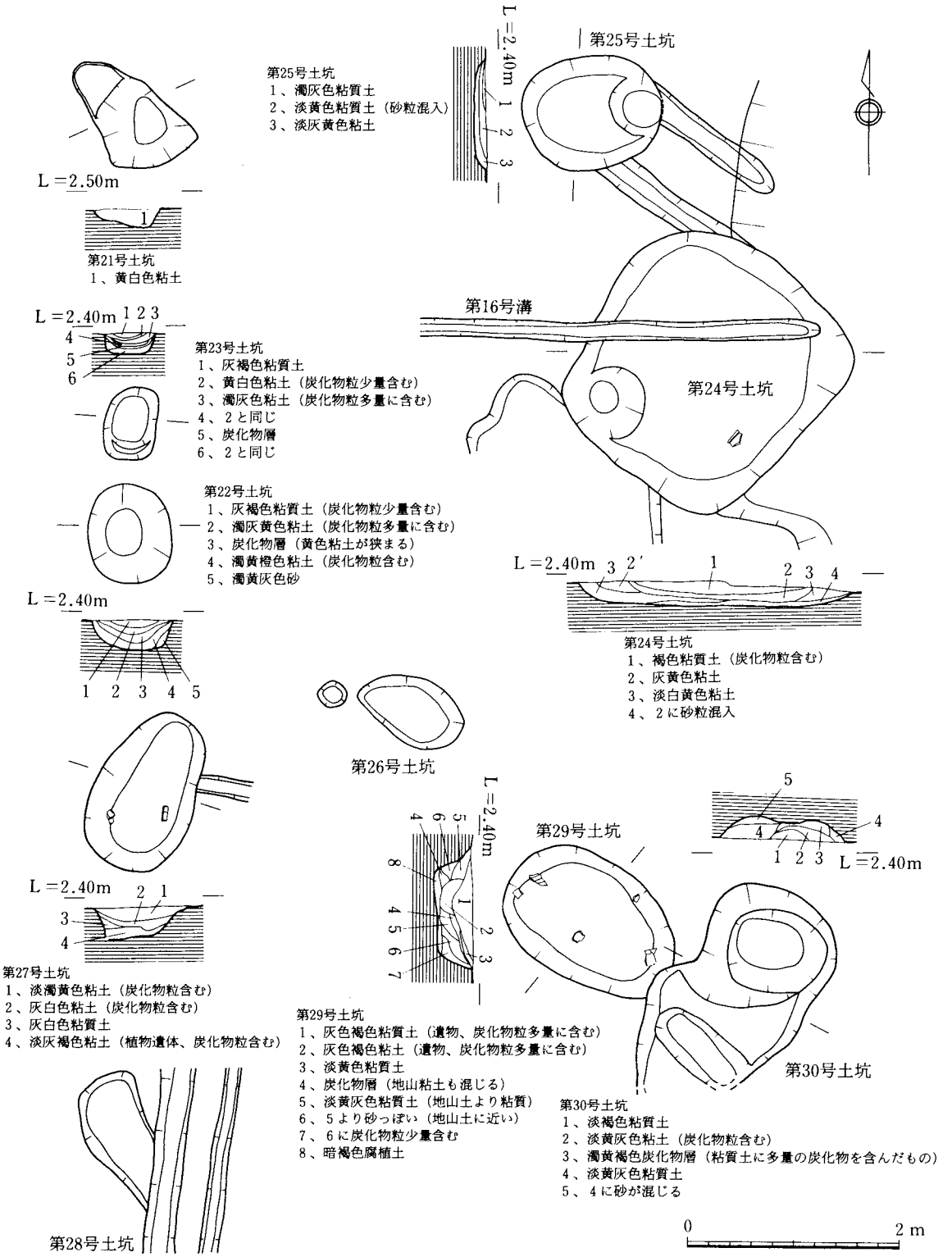
第８号土坑
１、濁褐色粘質土（炭化物粒含む）
２、暗褐色粘土（炭化物粒含む）
３、暗褐色粘土（炭化物粒多量に含む）
４、黄褐色粘質土（炭化物粒含む）
５、４よりやや白っぽい粘土（炭化物粒含む）
６、濁暗褐色粘土
（植物遺体、地山ブロック、炭化物粒含む）

0　　2 m

第６図　土坑（１～８号）（S＝1/60）



第7図　土坑（9・11～16・20号）（S＝1/60）



第8図　土坑（21～30号）（S＝1/60）

者とも楕円形に近く、それぞれ長径170cm、100cm、短径100cm、90cm、深さ31cm、54cmとなる。炭化物層は認められない。

19号土坑（第９図）　Ｂ４区に位置する。７・９号溝に切られるため全形は不明。北側の円形部分での径は80cm、深さは11cmである。７・９号溝の方が深いため、土坑の西側は残っていない。確認された範囲内では炭化物層は見られず、黄白色粘土層の覆土が認められる。

20号土坑（第７図）　Ｃ５区に位置する。東側半分を現代の１号排水路に切られるが、排水路が浅かったため、土坑自体にあまり影響はない。径140cmの円形で、深さは26cmである。土層の堆積状況は三時期に分かれ、二時期目の最下層に厚さ４cm前後の炭化物層が認められる。

21号土坑（第８図）　Ｂ３区に位置する不整形の土坑である。北側に平坦面を持ち、南側はピット状に深くなる。長軸90cm、短軸70cm、最深部22cmで、覆土は黄白色粘土層の単層である。

22号土坑（第８図）　Ｂ５区に位置する。南北100cm、東西80cm、深さ31cmの楕円形である。全体に炭化物を含み、三層目には間に黄色粘土を挟むやや厚めの炭化物層が堆積する。

23号土坑（第８図）　Ｂ５区に位置し、22号土坑と軸を同じにして並ぶ楕円形の土坑である。南北70cm、東西50cm、深さ22cmで南側にやや浅い平坦面を持つ。覆土は四層目に白黄色粘土層を挟みその上下に炭化物層が認められるが、22号土坑と同様に厚めの炭化物層中に間層が入ったものとも考えられる。

24号土坑（第８図）　Ｂ５区に位置し、16号溝に切られる隅円方形状の大型土坑である。一辺230～250cm、深さ25cmで西角には深さ43cmのピットがある。最上層に炭化物は混入するが、明確な炭化物層は確認できない。

25号土坑（第８図）　Ｂ５区に位置する。南側で重なる二本の溝状遺構との切り合い関係は不明。東西135cm、南北110cm、深さ13cmで東側には深さ39cmのピットがある。覆土は三層に分かれるが、炭化物層は見られない。

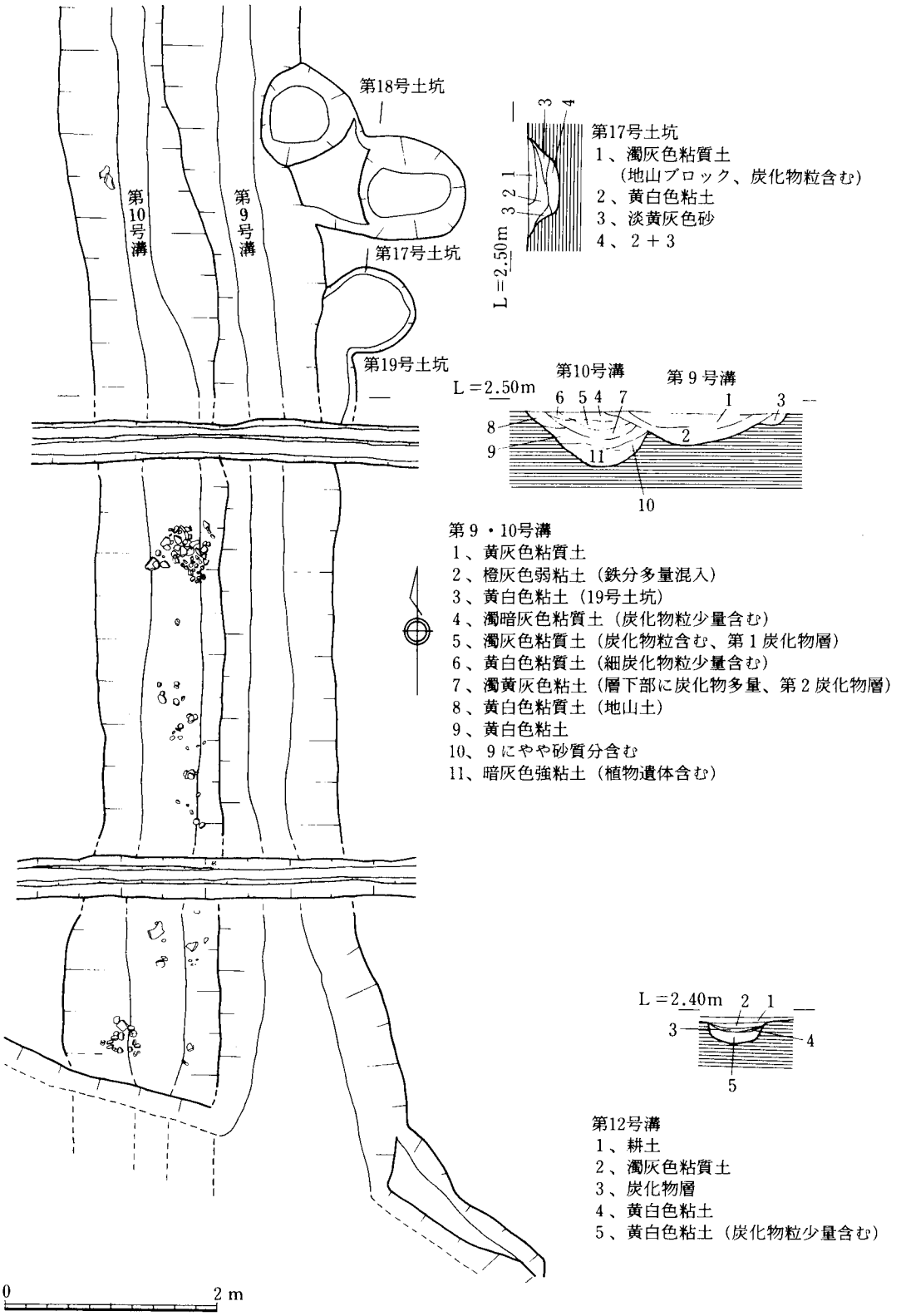
26号土坑（第８図）　Ｃ２区に位置し、大溝から伸びる28号溝に切られる。南北155cm、東西100cm、深さ30cmの楕円形の土坑である。いずれの層にも炭粒は含まれるが、炭化物層は見られない。最下層には炭粒以外に植物遺体も認められる。

28号土坑（第８図）　Ａ２区に位置する。21号溝に切られるため全形は不明。幅55cm、深さ14cmである。炭化物層は見られない。

29号土坑（第８図）　Ａ２区に位置する楕円形の土坑で、東端を30号土坑に切られる。長径180cm、短径120cm、深さ43cmである。上～下層にかけて土器は多く、残りの良好なものはＰ１～５に分けて取り上げている。土層断面は箱型に近く、明瞭な立ち上がりを持つ。最下層には暗褐色腐植層が見られるが、土坑の幅以上に脇へ拡がるため、覆土ではなく地山下の堆積層の可能性もある。炭化物層は５cm程度と割合厚く、断面を対角線上に横切るような形で堆積している。

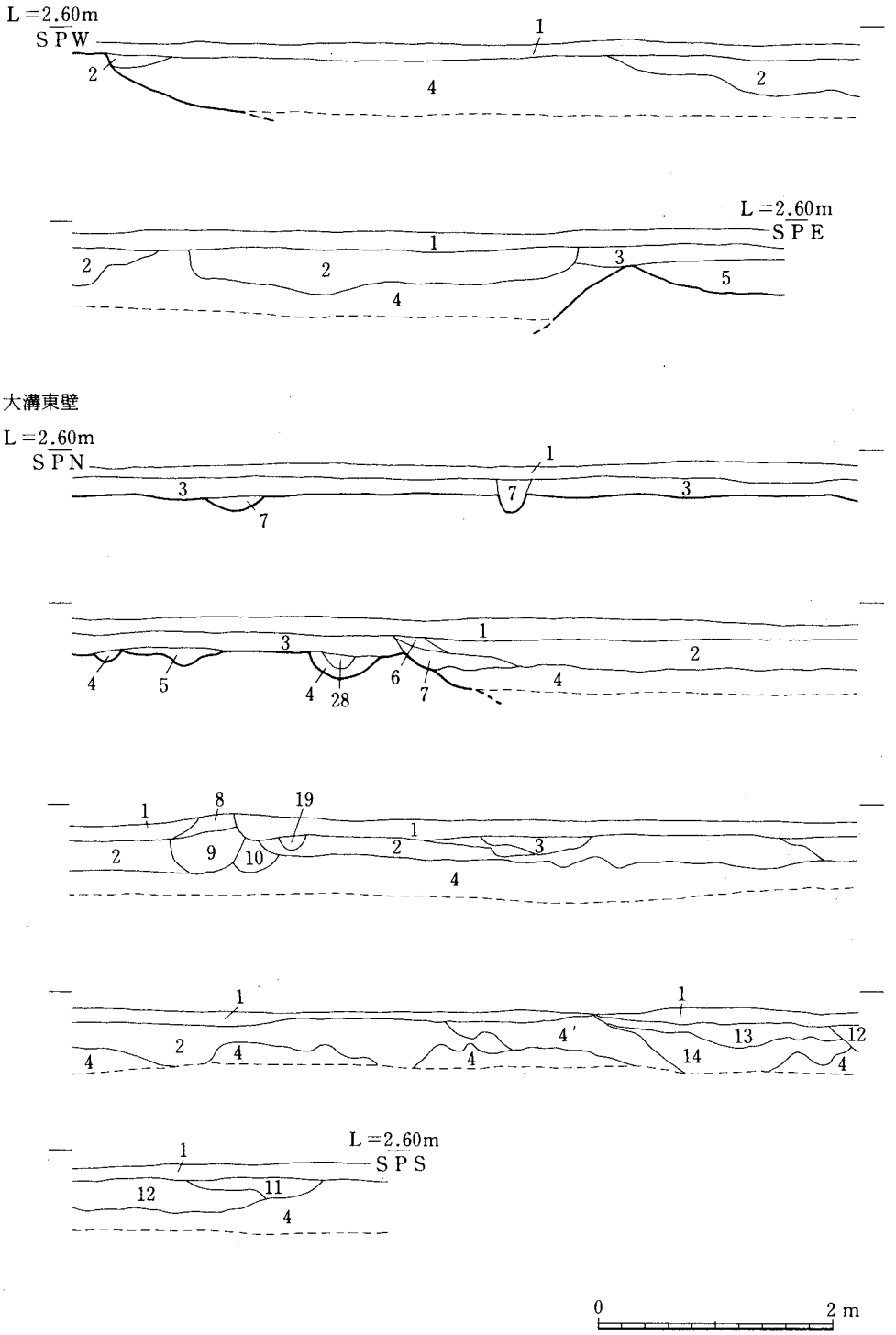
30号土坑（第８図）　Ａ２区の29号土坑脇に位置し、南端は調査区外へ伸びている。幅130cm、北側の最深部は39cmである。三層目には粘土層に多量の炭化物を含む濁黄褐色炭化物層が認められる。

以上土坑は多数確認されたが、その形状および分布域に関して規則性を求めるのは難しい。た

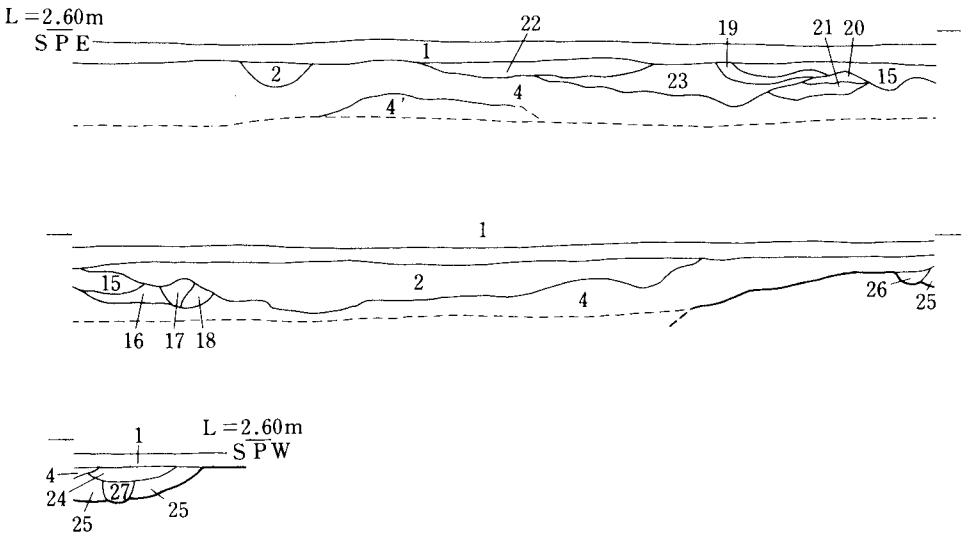


第9図　第9・10号溝、第17～19号土坑（S＝1/60）

大溝北壁

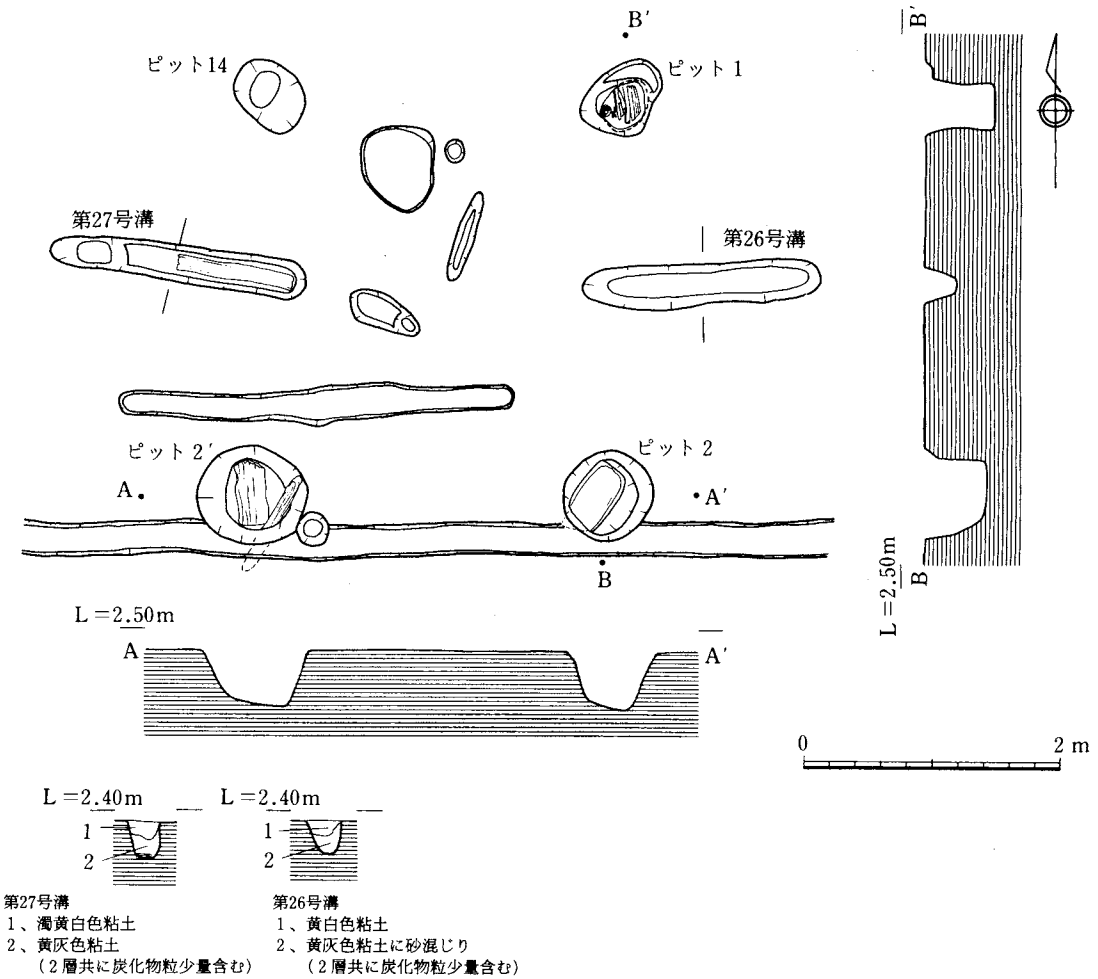


第10図　大溝断面図(1)（S＝1/60）



大溝
1、耕土
2、濁黄色粘質土（灰色土、褐色土、砂、炭化物粒などの土が混じる。攪乱か）
3、灰褐色粘質土
4、暗灰色粘質土（大溝の下層覆土と思われる）
4'、同上（色が明るくなり砂質含む）
5、濁黄色粘質土（古い遺構か）
6、濁灰褐色粘質土
7、暗灰色粘質土
8、濁黄褐色粘質土
9、濁橙灰色粘質土（鉄分多い、5号溝覆土）
10、濁暗灰色粘質土
11、黄褐色粘質土
12、2に近いが灰色強い
13、11と同色
14、暗褐色粘質土
15、黄灰色粘質土
16、15に地山ブロック混入
17、濁黄灰色粘質土（地山土）
18　灰褐色粘質土
19、濁褐色粘質土
20、黄褐色粘質土
21、濁灰色粘質土（炭化物粒含む）
22、濁灰色粘質土
23、12よりやや2に近い
24、黄色粘土（灰色ブロック、炭化物粒含む）
25、黄色粘土（炭化物粒含む）
26、淡黄灰色粘土
27、淡灰色粘土（炭化物粒含む）
28、暗黄色砂質土
29、橙色砂質土

第11図　大溝断面図(2)（S＝1/60）



第27号溝
1、濁黄白色粘土
2、黄灰色粘土
（2層共に炭化物粒少量含む）

第26号溝
1、黄白色粘土
2、黄灰色粘土に砂混じり
（2層共に炭化物粒少量含む）

第12図　第1号建物、第26・27号溝（S＝1/60）

だ覆土中に見られる炭化物層の有無を一つの基準にしてみると、Ａ２区の28号土坑とＢ５区の25・26号土坑近くを直線で結んだ周辺の土坑には、いずれも炭化物層が認められないことに気付く。これが何を意味しているかは判然としないが、一つの傾向性として捉えることができるかもしれない。

2　溝

溝状遺構は１～28号まで番号が付けられているが、その多くは近現代以降の農地開発に伴うものと推察される。ここでは上記の土坑に関連すると思われるものについて記述する。

10号溝（第９図）　Ａ・Ｂ４区に位置する。３、５、７、９号溝、10号土坑に切られ、９号溝と切り合い関係を保った状態で南北に伸びている。幅は120cm前後、深さは南へ行くほど深く最深部は62cmである。調査範囲内での北端と南端の溝底レベル差は27cmで、北から南への流れが予想される。遺物の入り方および炭化物層は南側ほど明瞭であり、Ａ４区では残りの良好な土器群をＰ１～12に分けて取り上げている。炭化物層は中間層に見られ、遺物もその上方に位置していることが多いようである。

12号溝（第５図）　Ｂ・Ｃ５区に位置する。幅40cm～50cm、深さは北端の最深部で18cmである。やはり南北方向に伸びており、溝底レベル差は南端と15cmある。二層目に厚さ３cmほどの炭化物層を確認できるが、この層も南へ行くにつれてほとんど認められなくなる。

26号溝（第12図）　Ｂ３区のピット２・１間に位置する溝状遺構である。長さ190cm、幅35cm、深さ30cmで東西方向に伸びる。27号溝と対をなす。

27号溝（第12図）　Ｂ４区のピット2′・14間に位置する。長さ200cm、幅30cm、深さ30cmで、溝底からは長さ90cm、幅12cmの板材が検出されている。26号溝と同様、炭化物層は認められない。

なお他にはＡ３区の８号溝、Ｂ４・５区の11号溝などが古くなる可能性がある。

3　建　物

１号建物（第12図）　Ｂ３・４区のピット２・１・2′・14で構成される１×１間の建物である。柱間距離は南北に長く300～330cm前後、東西に270cm前後となる。ピットの深さは最深部で43～54cmと大きな差はないが、径を見ると北端の二個が一回り小さくなっている。またピット14以外の三個は底に板材を残す。覆土はいずれも地山に近く、何度目かの精査でようやく検出確認されている。

第２節　第５次調査の遺構

第201号土坑（第６図）　第４次調査で半分だけ検出された第１号土坑の北側半分である。この結果この土坑は東西135cm、南北80cm、深さ20cmを測る土坑であることが判明した。５次調査でも４次調査同様炭化物層の上から遺物が出土している。

第201号溝（第５図）　第４次調査で調査区の南西隅に検出されたＳＸ－１から西へ伸びる溝で、第５次調査の調査区にはいると北西に向きを変え、調査区外に抜けていく。幅は40～80cm、深さは15cm～30cmを測る。

第3章　遺　　物

第1節　出土土器の観察

今回この報告書では、135点の出土土器実測図を掲載した。その全てについて観察を行い、後掲の観察表を作成した。観察は主に石川県埋蔵文化財保存協会の辻森・松田・竹内・川崎が行い、これを中屋が補足する形で実施した。観察表への記載方法と内容は以下のとおりである。

No.：この項目の番号は、挿図版のものと同一である。

出土遺構（地区）：遺構出土のものは遺構名を、遺構外出土のものは地区を記入。接合した遺構出土遺物については、接合関係のある遺構全てを記入した。200番台の遺構が第5次調査の遺構である。

器種：後述の形式分類にしたがって記入。器種のわからないものについては（　）で部位を記すにとどめた。

法量：口径（口：）、胴部最大径（胴：）、底径（底：）、器高（器：）を計測し記入。数値に不確実な要素の強いものには（　）をつけた。

調整・文様・装飾など：土器の口頸部・胴部・底部（脚部）に分けてそれぞれ観察した。すす・炭化物の付着、黒斑の有無、成形、整形の痕跡などについても観察を行ったが、スペースの都合上割愛した。基本的に調整を先に記入し、その後に文様・装飾を記入している。また→印は後の意味である。

色調：外面（O：）と内面（I：）を分けて観察した。観察者による色の統一はいま一つ図ることができなかったが、黄橙色系と、白色系に大きく分けられるようである。観察前に黄橙色系が在来、白色系が外来というイメージを漠然と抱いていたが、つくりなどからもかなりそのイメージに近い結果がでたように思われる。

胎土：土器胎土中に含まれる、石英（石）、長石（長）、黒雲母（黒）、焼土粒（焼）、海綿骨片（海）などの大きさ、量について裸眼で観察した。筆者の不勉強のため、判別できない砂礫もいくつか確認したが、それらはその他（他）の中に含めた。大きさは概ね2㎜以上の物をL、1㎜前後の物をM、0.5㎜以下の物をSとして表記した。量は5段階表示とし、5：多い～1：少ないの段階で判断した。

一応以上の基準により観察を行ったが、観察者により多少の個人差もでていると思われる。なお、今回は砂礫の形状にまで観察が及ばなかった。今後周辺の地層や、岩石の分布状態を把握し、戸水B遺跡産の土器とそうでないものの分別を試みる必要があるかもしれない。

なお、挿図版の土器実測図のスケールは全て1/3である。

第2節　弥生土器

今回の発掘調査で出土した土器の大半は、凹線文系土器群の影響を受けた。いわゆる戸水B式期のものである。

1974年の第1次調査で、凹線文系の土器群がまとまって出土したことにより、「戸水B式土器」が設定された。以来、加賀地域における弥生時代中期末の標式土器群として、幾つかの論考にも引用されたりしながら今日に至っている。しかしながらその内容は、当該期の資料が乏しいこともあっていまだ詳細には検討されていないのが現状である。

ここで報告する土器群は土坑などの遺構からの出土品が多く、良好な一括資料と認定し得るものである。本項では、今回の調査で得られたこの良好な一括資料の分類と検討を試みる。

土器の分類

今回の調査で出土した土器では、壺形土器、甕形土器、高坏形土器、鉢形土器などが認められる。以下器種ごとに分類して報告する。今回の発掘調査で出土していない器種でも、既往の報告で分類されているものも参考として触れた。

壺形土器

壺形土器A　口縁部はラッパ状に大きく開き、その先端が「く」の字形に内屈する壺で、大型のものが多い。

壺形土器B　大きく開いた口縁端部が、緩く上方に立ち上がる壺。

壺形土器C　いわゆる無頸壺。

壺形土器D　口縁部がラッパ状に大きく開いた壺。端面が無文のもの（D_1）、A種凹線が施されるもの（D_2）、波状文が施されるもの（D_3）とに細分される。

壺形土器E　口縁部が頸部からほぼ直口する壺。口縁外面にC種の凹線が施されるものが多い。

壺形土器F　壺Eより少し長めの口縁端部に指掛け状のへこみがある壺（水差形土器か）。口縁外面にC種の凹線が施される。

壺形土器G　口縁部がゆるく「く」の字形に開く広口壺。

甕形土器

甕形土器A　口縁が斜め上方に開き、口縁端部にA種凹線が施された甕。端部を肥厚させたり（A_2）、頸部に粘土帯を貼り付けたりする（A_3）バリエーションがある。

甕形土器B　口縁がゆるく開き、端部にA種凹線が施された甕。

甕形土器C　口縁の端部が上方につまみ上げられた受口状口縁の甕。口縁の端面にはA種凹線が施される。つまみ上げの長（C_2）短（C_1）で二つに細分できる。

甕形土器D　受口状口縁をもち、口縁部から胴部最大径付近にかけて櫛描文が施された甕。

甕形土器E　甕A同様口縁端面にA種凹線が施されるが、端部が上下につまみ出された甕。

甕形土器F　胴部の内面を頸部まで削り上げている甕。調整以外は甕Aと同様のもの（F_1）とやや直口気味に開くもの（F_2）とに細分できる。

甕形土器G　「く」の字形の口頸部をもつ甕。口縁はややゆるく開く。端面に沈線を一本巡らせているもの。

甕形土器H　口頸部が「く」の字形にくびれたもの（甕Aの凹線が施されていないもの）。くびれの強（H_1）弱（H_2）で二つに細分できる。

甕形土器I　「く」の字形の口頸部をもつが、口縁端部に面を作り出しているもの。端部を押さえて広げたもの（I_1）とつまみ出しているもの（I_2）とに細分できる。

甕形土器J　口縁端部に櫛歯状原体を使って連続刺突文を施した甕。口縁端部に施文するもの（J_1）と、口縁部下に施文するもの（J_2）とに細分できる。

甕形土器K　口縁が大きく外反した甕。胴部の最大径が口径を越えない。口縁端部が無文のもの（K_1）と連続刺突文を施すもの（K_2）とに細分できる。

甕形土器L　「く」の字形の口頸部をもつが、口縁部内側に櫛歯状原体を使って刺突羽状文を施した甕。口縁端部が無文のもの（L_1）と連続刺突文を施すもの（L_2）とに細分できる。

高坏形土器

高坏形土器A　坏部の口縁が直立し、外面にC種凹線を施した高坏。脚部に透かし孔が開けられるものもある。

高坏形土器B　坏部がなだらかなカーブを描いて立ち、直口する口縁部をもつ高坏。外面にC種凹線紋が施されている。

高坏形土器C　筒状の脚部に逆三角形錘状の坏部がつく高坏。高坏A・Bに比べ、つくりが稚拙である。今回の調査では出土していない。

台付鉢

台付鉢A　体部は内わんしながら立ち上がり、口縁は直立もしくはやや外傾する台付鉢。外面に一条もしくは二条の沈線が施される。口縁から体部にかけての破片だけでは、高坏Bとの区別はつかない。

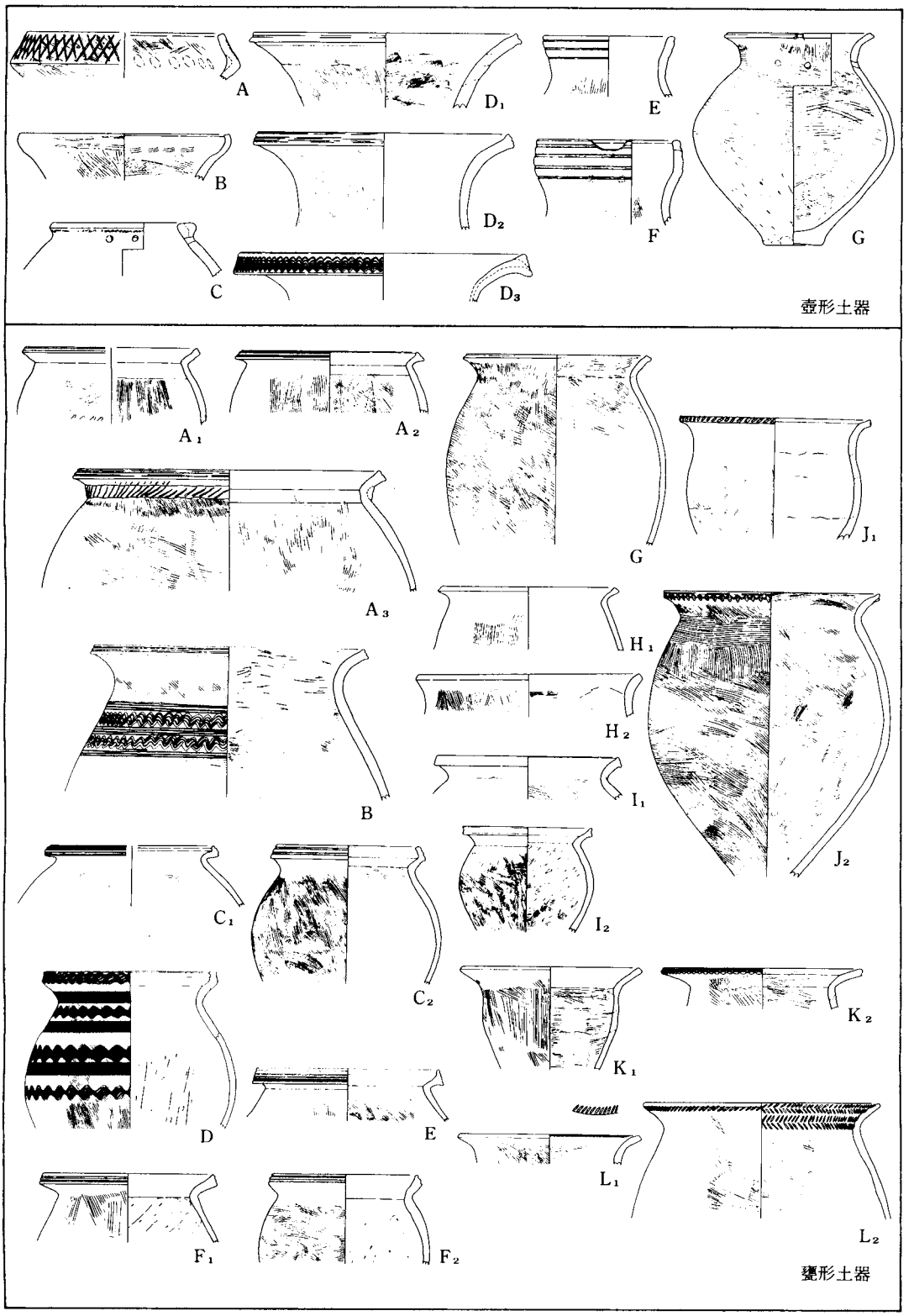
台付鉢B　体部は内わんしながら立ち上がり、口縁は内傾する台付鉢。台付鉢Aより深めである。外面にC種凹線が施される。台部には3～4方向に透かし孔が開けられる。

鉢形土器

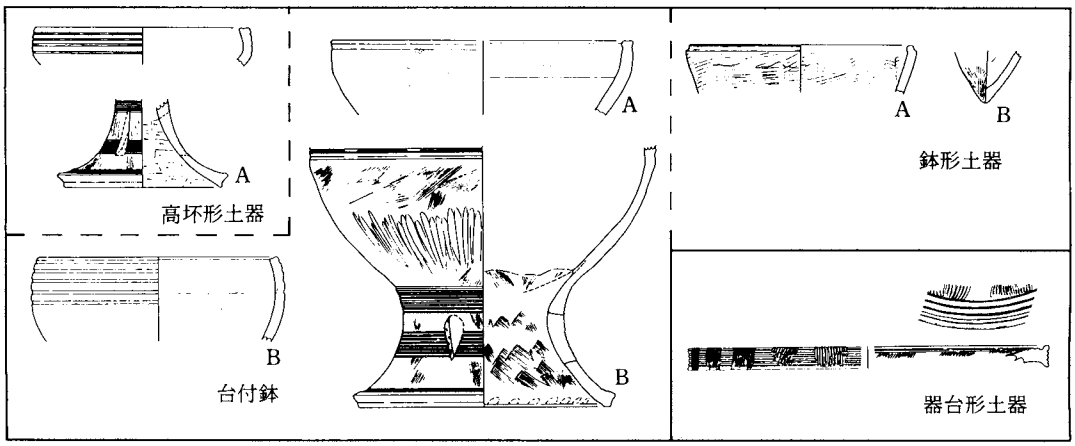
鉢形土器A　体部は直線的に斜め上方へ立ち上がる鉢。口縁の端部を内側に屈曲させている。

鉢形土器B　尖底の小型鉢。戸水B式期のものではない。

器台形土器　大きく外反し開いた口縁を櫛描文で加飾した器台。今回は器台として分類したが、壺の可能性も否定できない。



第13図　戸水B遺跡出土土器の分類(1)（S＝1/6）



第14図　戸水B遺跡出土土器の分類(2)（S＝1/6）

第3節　須　恵　器

今回の発掘調査で出土した須恵器は、第12号溝から坏が1点（110）、大溝から坏と坏蓋がそれぞれ1点（123・124）、包含層から坏の底部片が1点（135）の合わせて4点である。包含層の出土遺物はさておき、他の3点については8世紀の後半に位置付けられるものであろう。

ここで124の坏について少し触れておきたい。この坏の内面にはいわゆる漆紙が付着している。漆紙は、容器に入れた漆の乾燥防止のため、和紙により蓋をしたものであったと考えられているものである。当時、紙は貴重品であったため、文書などで使用された後の紙が使われたことが多いようで、漆紙が貴重な文字資料となることもある。残念ながら本遺跡から出土のこの漆紙は、紙の端部の一部であるようで、文字は残されていない。また、乾燥という面から考えれば、開口部の大きい坏に漆を保管したとは考えにくく、むしろ作業過程の取り皿と考えた方が妥当であろう。

第4節　石器（第50図）

1は88年度の調査で出土したものであるが、出土地点がわからなくなってしまったものである。やや偏平な円礫で、平らな面の表裏中央部がへこんでいるほか、周縁に打撃痕が見られる。2は24号土坑から出土したもので、軽石である。3は包含層遺物で偏平片刃石斧と思われるが、欠損部が大きく原形がよくわからないものである。

4は203号溝、5は包含層からそれぞれ出土したもので、いわゆるパステル形石製品と呼ばれるものである。6は14号溝から出土したもので、緑色凝灰岩製の管玉である。7は大溝から出土した凹基式の石鏃である。8は包含層からの出土品で、平基式の石鏃である。

第５節　木製品（第51・52図）

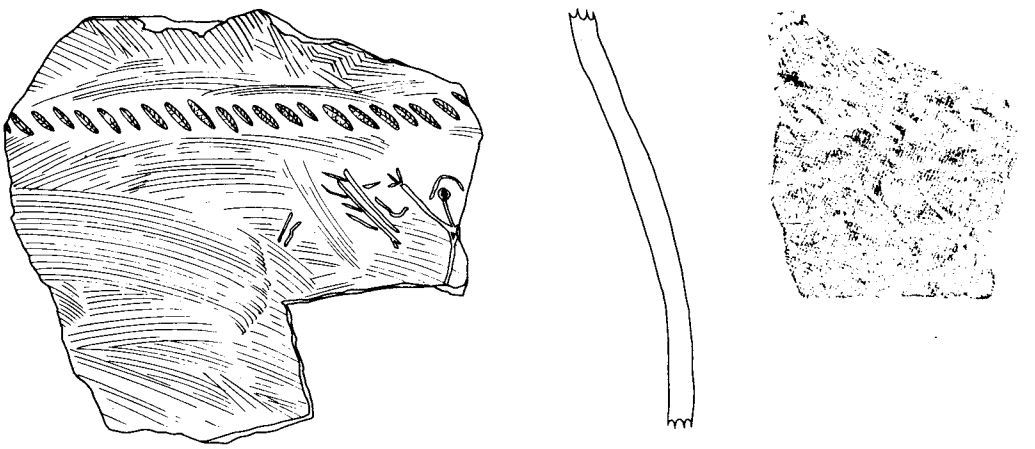
１～４は５号土坑からの出土品である。１は板目に木取りした板材に、糸目穴と思われる穴の列が２列開けられているものである。原形はわからない。２はおそらく混じりと考えられる。３・４は加工痕がみられるものの、どういう形態でとういう風に使用されたものかはわからない。５の10号溝出土の木製品も加工痕があるというだけのものである。６は大溝出土の曲物もしくは桶の底と考えられるものである。８・９は掘立柱建物跡の柱穴ピット２から出土した、柱根と礎板である。

第６節　絵画土器（第15図）

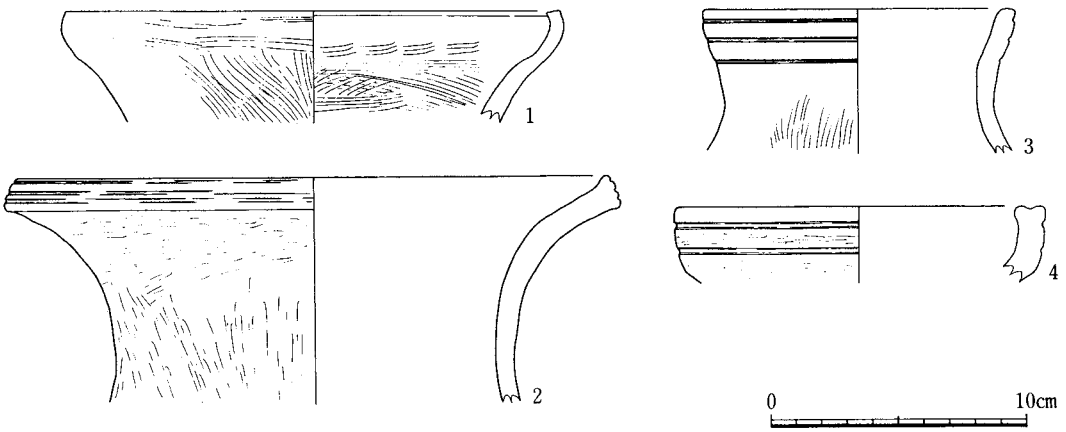
この絵画土器は、15号土坑からの出土品である。甕の胴部片と思われるが、上下に接合する破片は発見されなかった。

描かれているのは人物であり、手を高く上方に差し上げた姿である。人物の右側にも何か描かれているようであるが、今のところわからない。人物は頭に何かかぶっているようにも見える。また、差し上げた手から放り出されたように、枝状の物も描かれている。

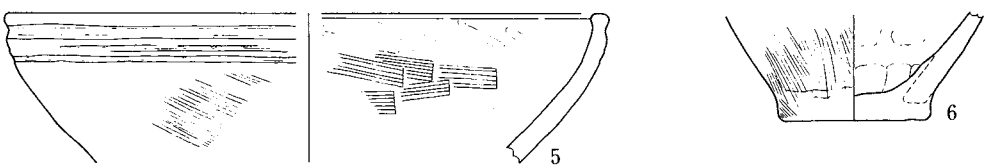
土器に絵を描くことが最も盛んになるのが、畿内でもⅣ様式併行期であり、凹線文系土器群の波及と共に北陸でも見られるようになるのではないだろうか。石川県では金沢市の西念・南新保遺跡で４点出土例があるほか、志賀町柴垣須田遺跡などで出土例が報告されている。今のところ柴垣須田遺跡出土の物が、絵画土器分布の北限とされている。（『古代史復元５　弥生人の造形』講談社、1989年）



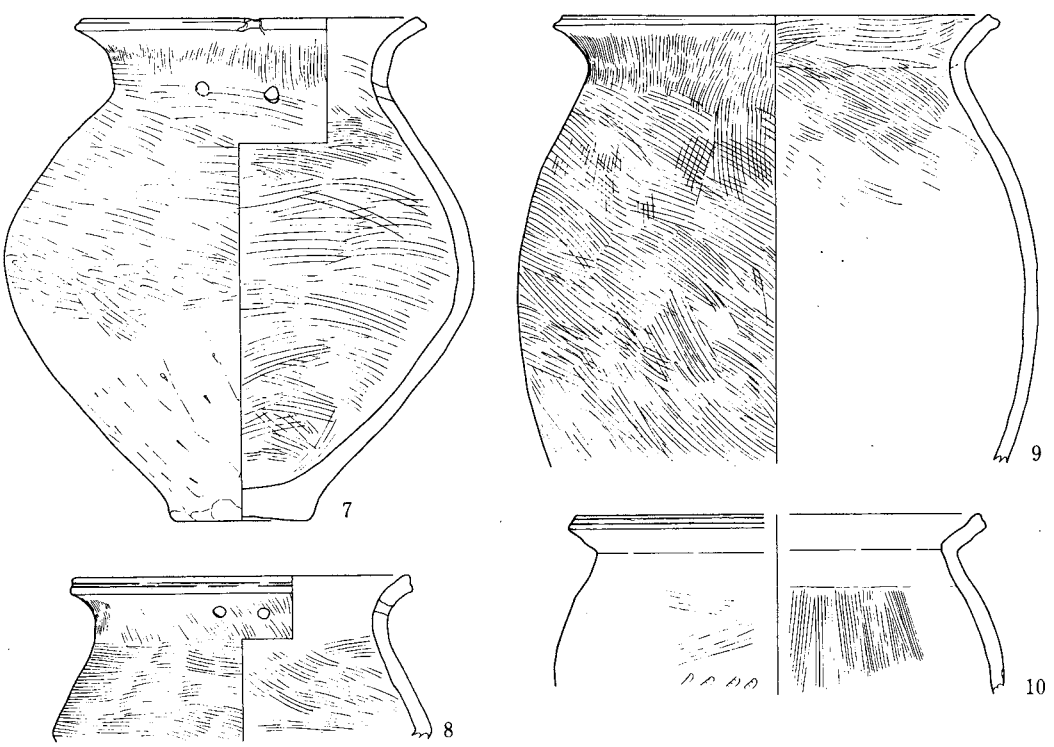
第15図　第15号土坑出土絵画土器（Ｓ＝1/2）



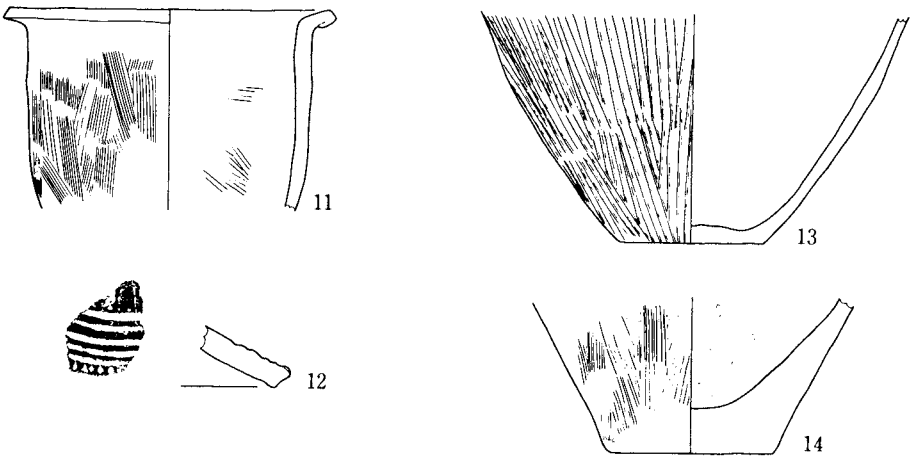
第16図　第１号土坑出土遺物



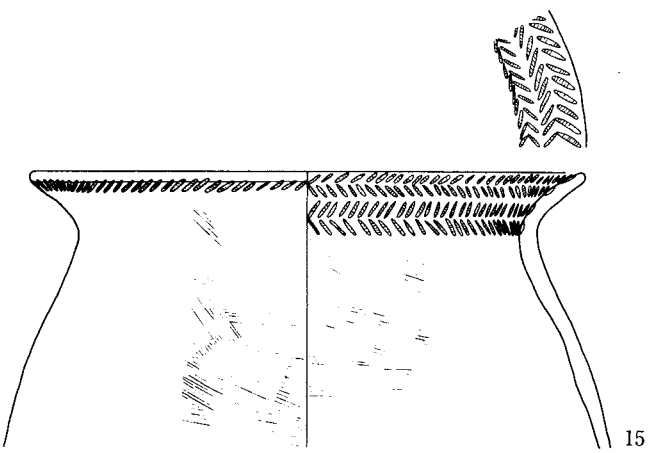
第17図　第２号土坑出土遺物



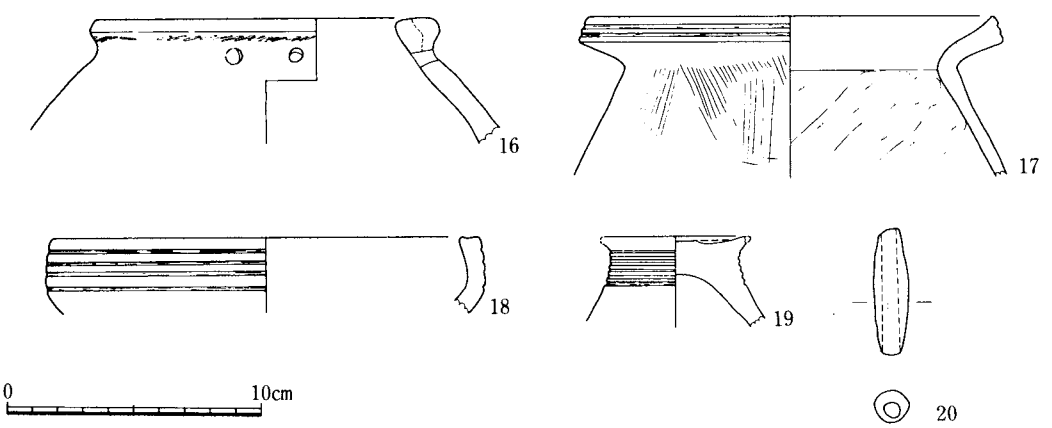
第18図　第３号土坑出土遺物(1)



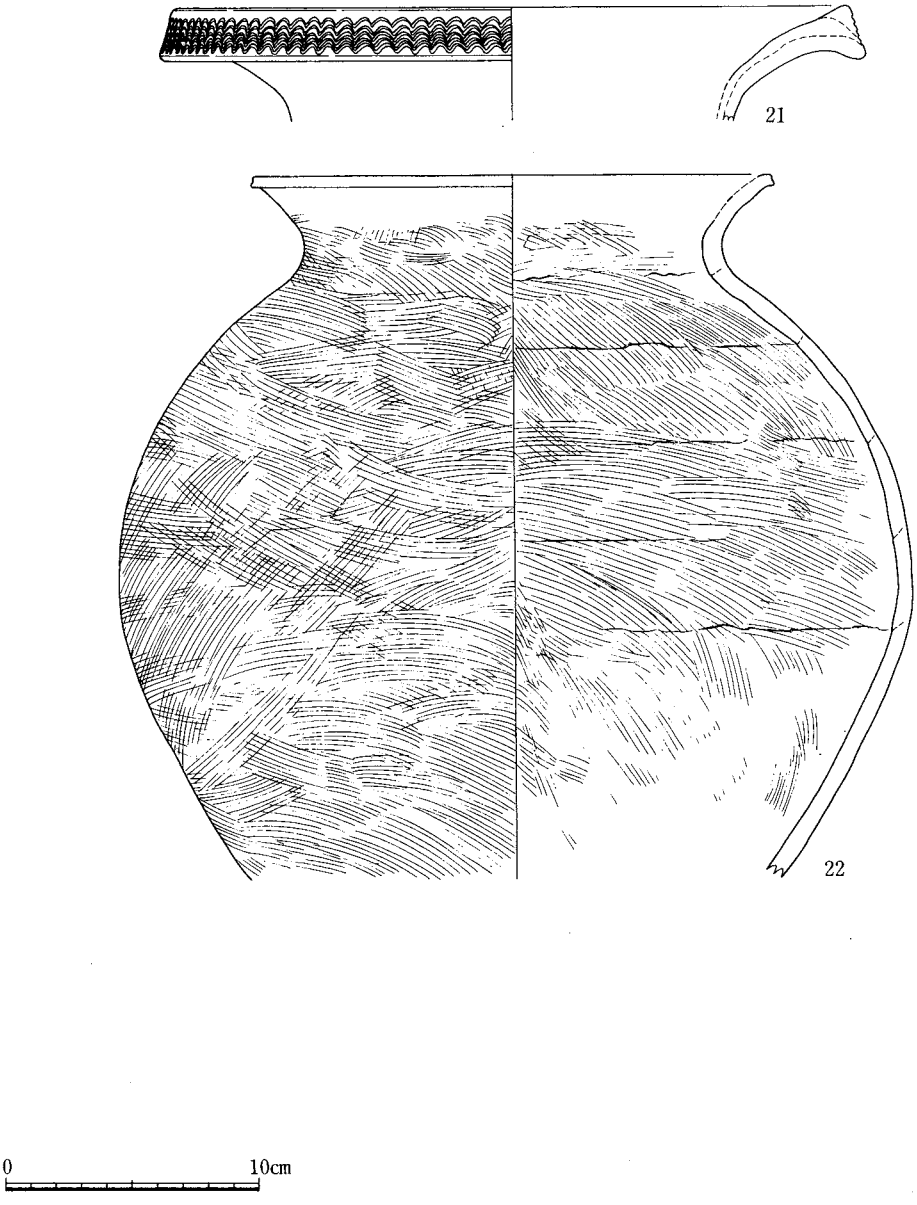
第19図　第３号土坑出土遺物(2)



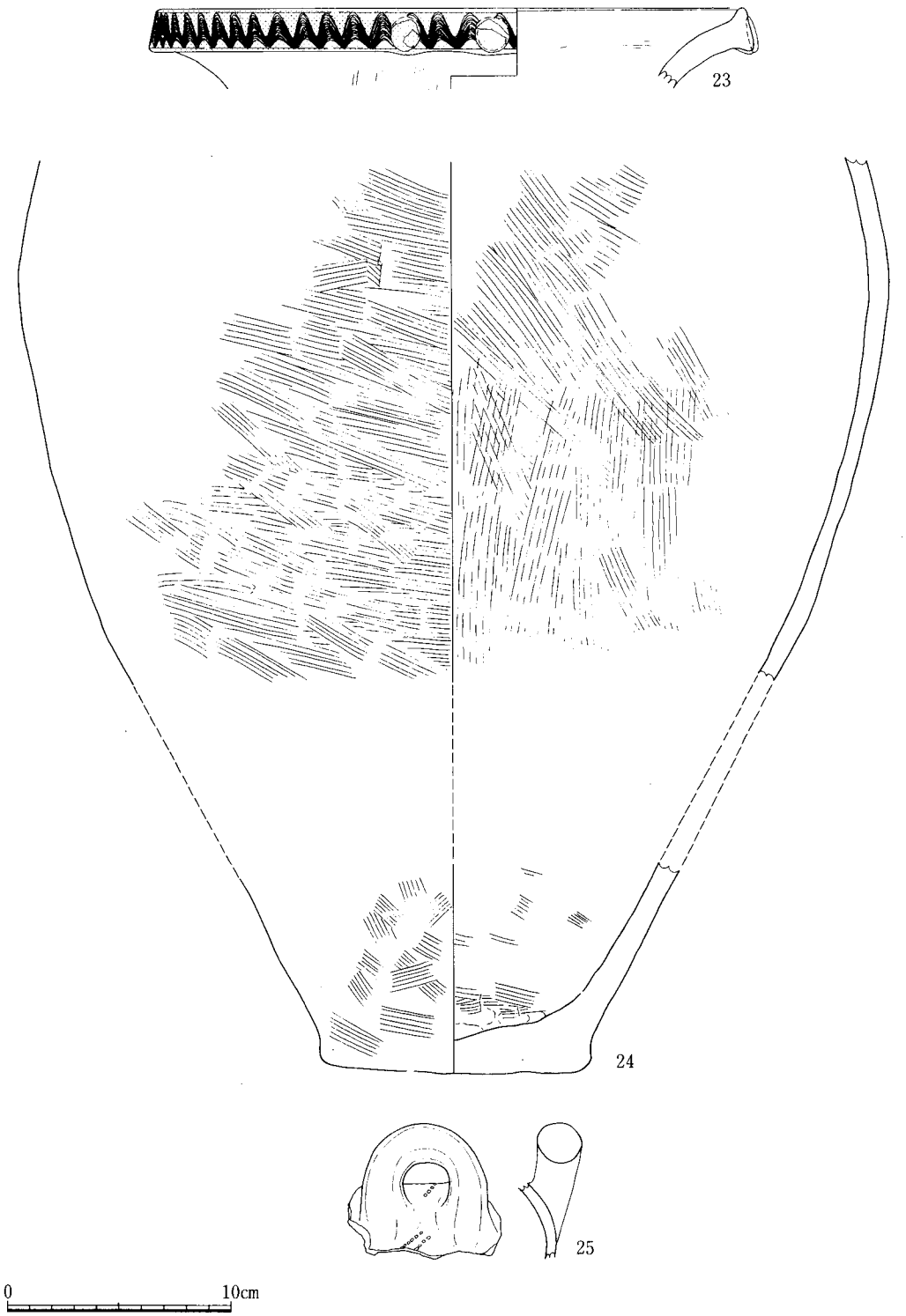
第20図　第４号土坑出土遺物



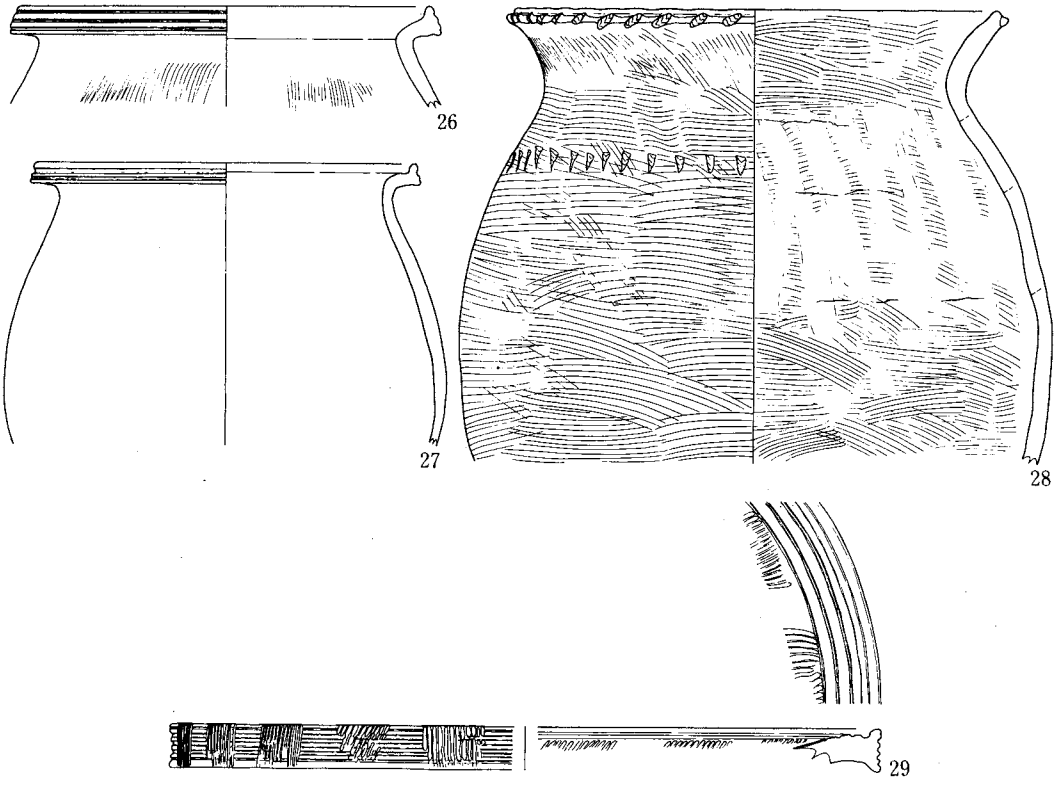
第21図　第５号土坑出土遺物



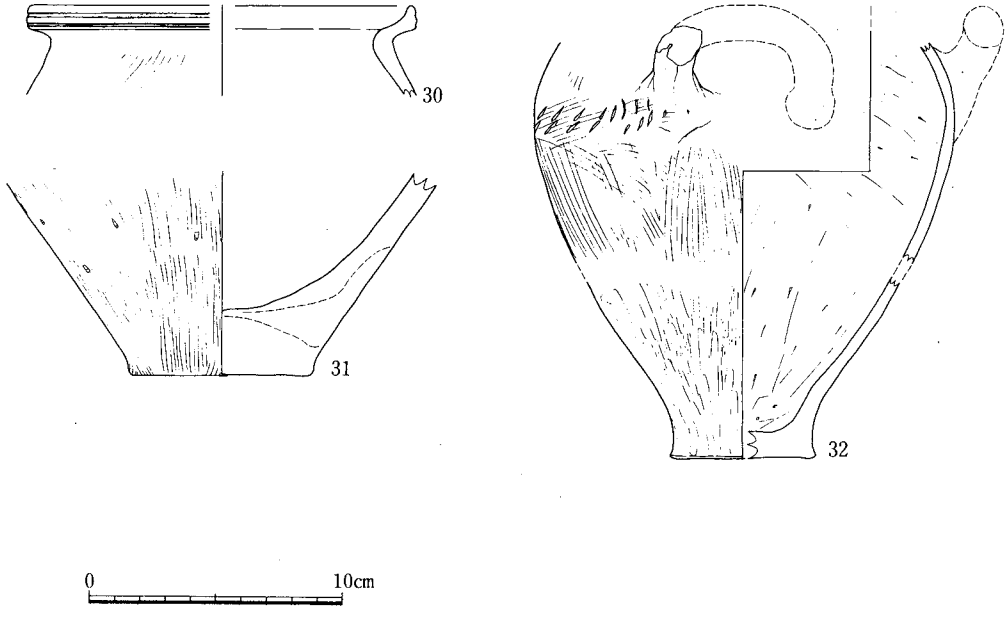
第22図　第６号土坑出土遺物



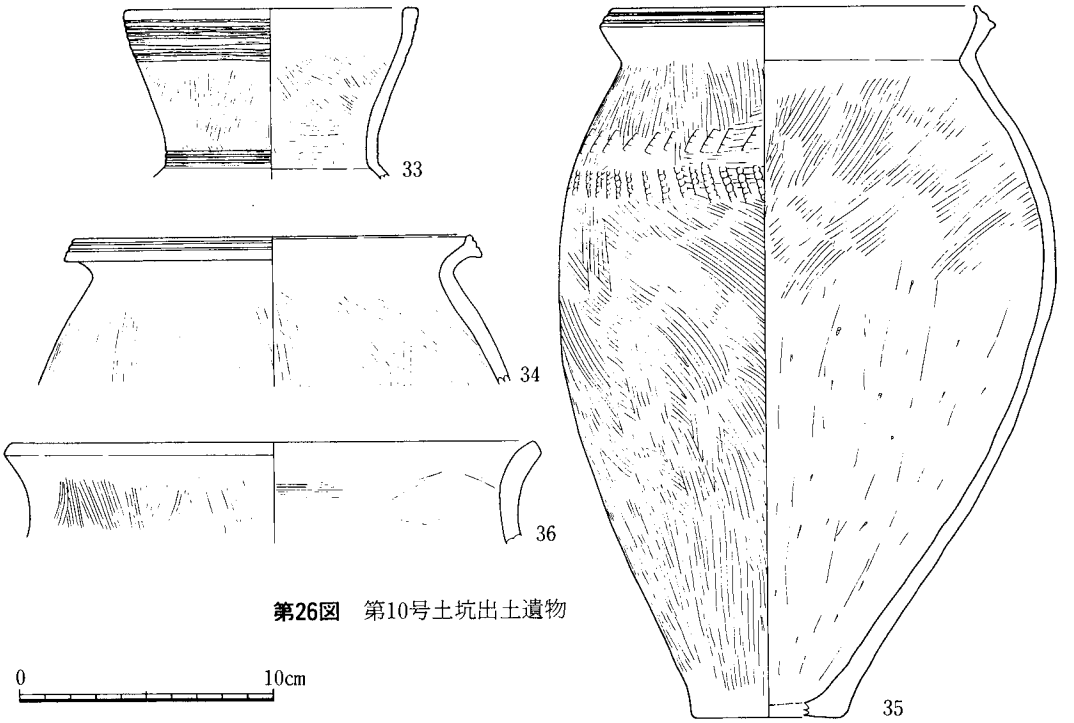
第23図　第７号土坑出土遺物



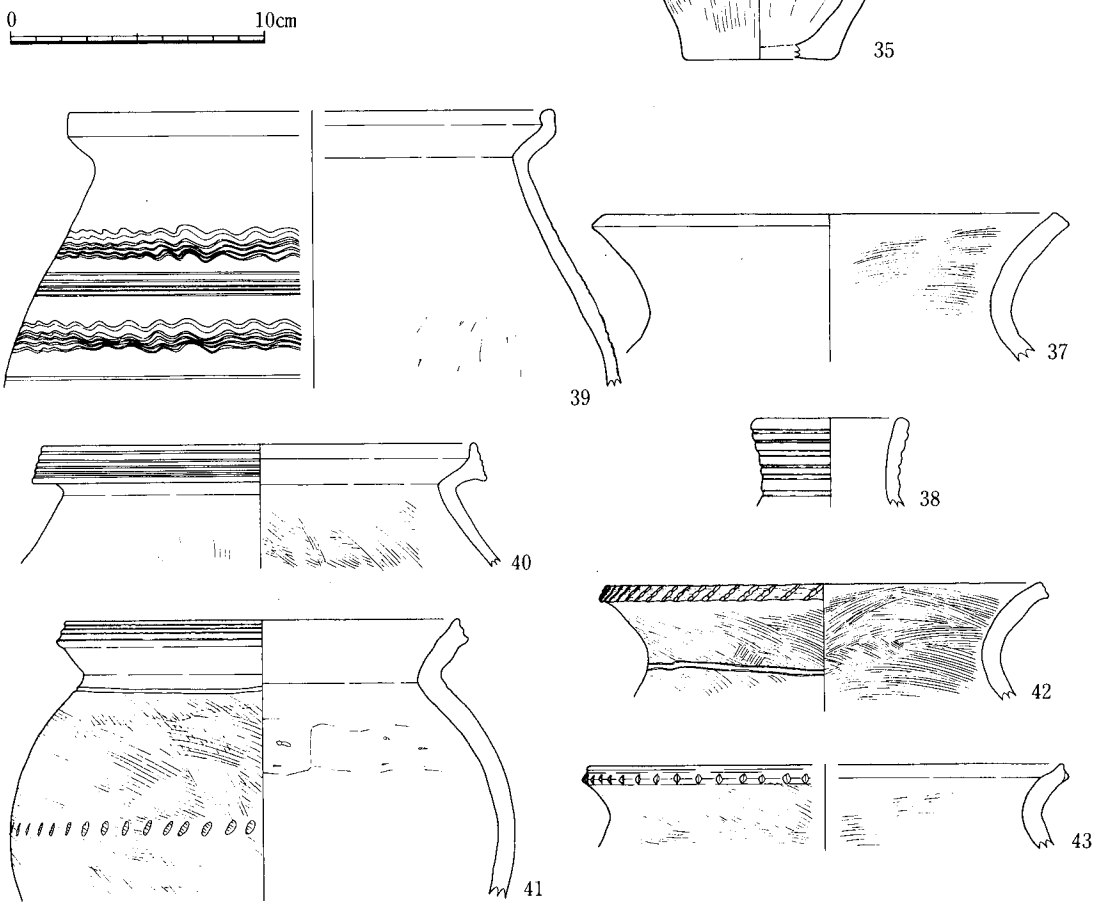
第24図　第８号土坑出土遺物



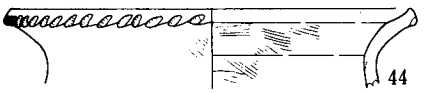
第25図　第９号土坑出土遺物



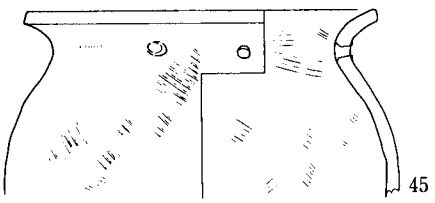
第26図　第10号土坑出土遺物



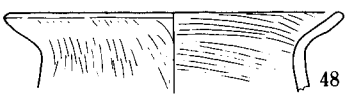
第27図　第11号土坑出土遺物

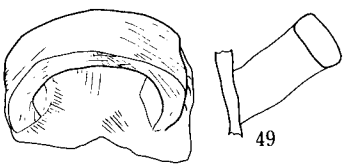


第28図　第12号土坑出土遺物

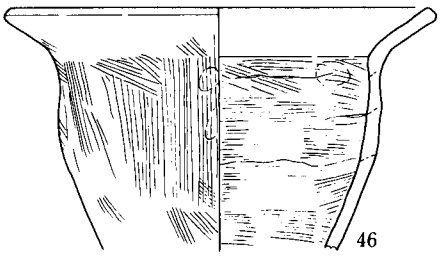


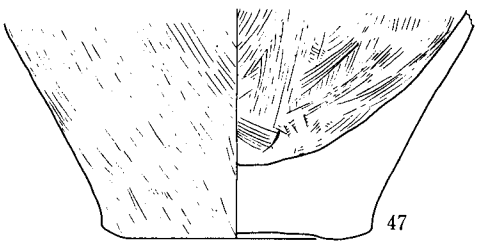
第29図　第13号土坑出土遺物



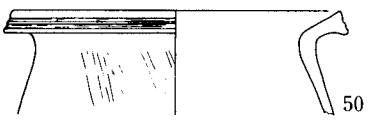


第31図　第16号土坑出土遺物

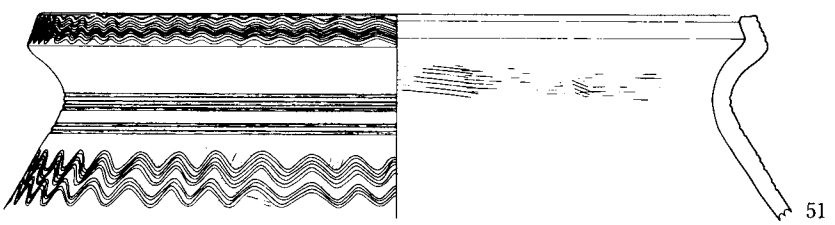


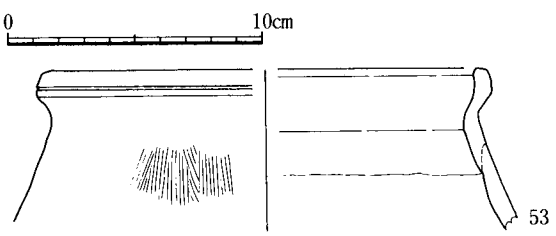


第30図　第15号土坑出土遺物

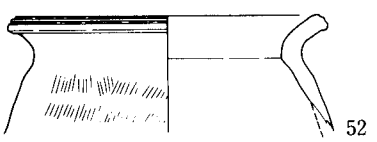


第32図　第17号土坑出土遺物

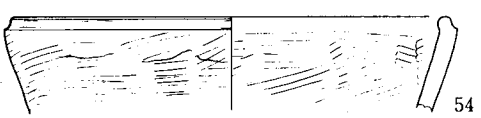


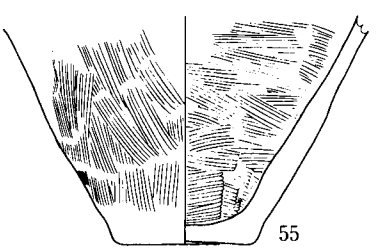


第34図　第25号土坑出土遺物

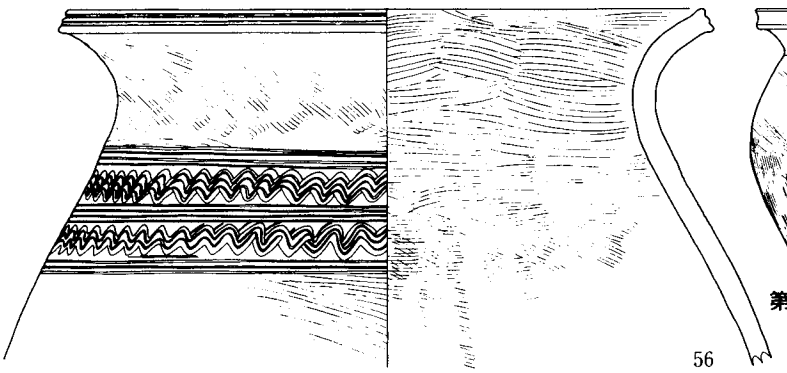


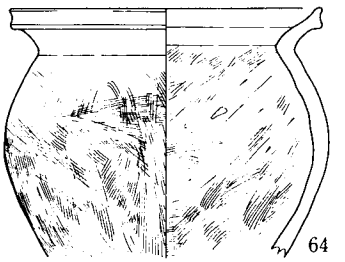
第33図　第24号土坑出土遺物



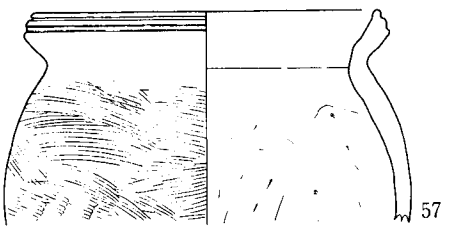


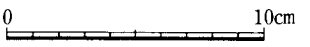
第35図　第27号土坑出土遺物

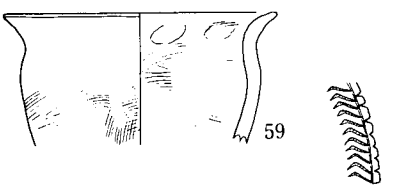


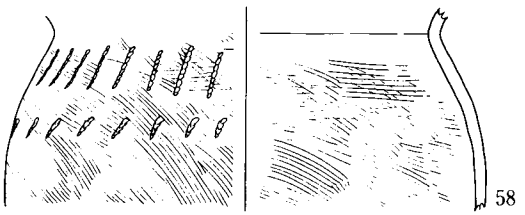


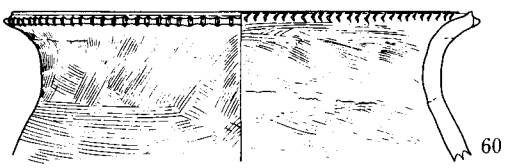
第37図　第30号土坑出土遺物

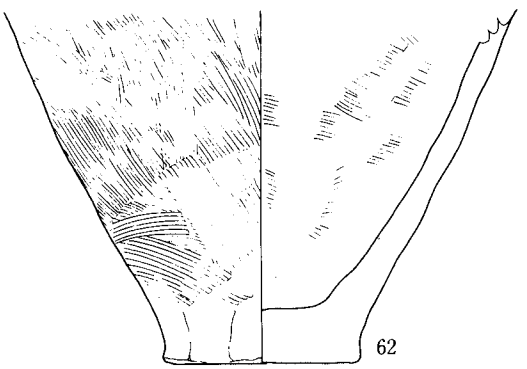


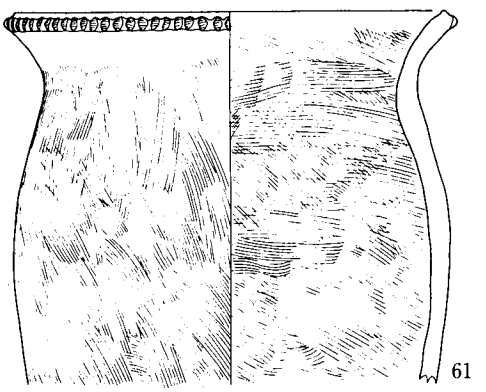


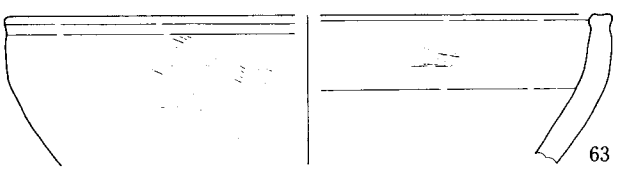




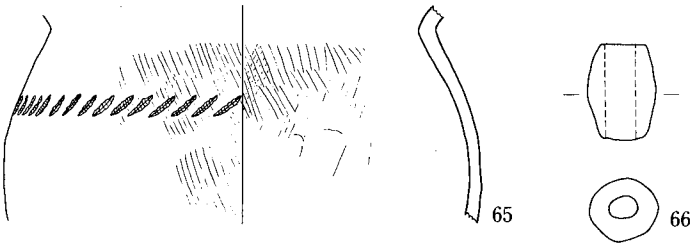




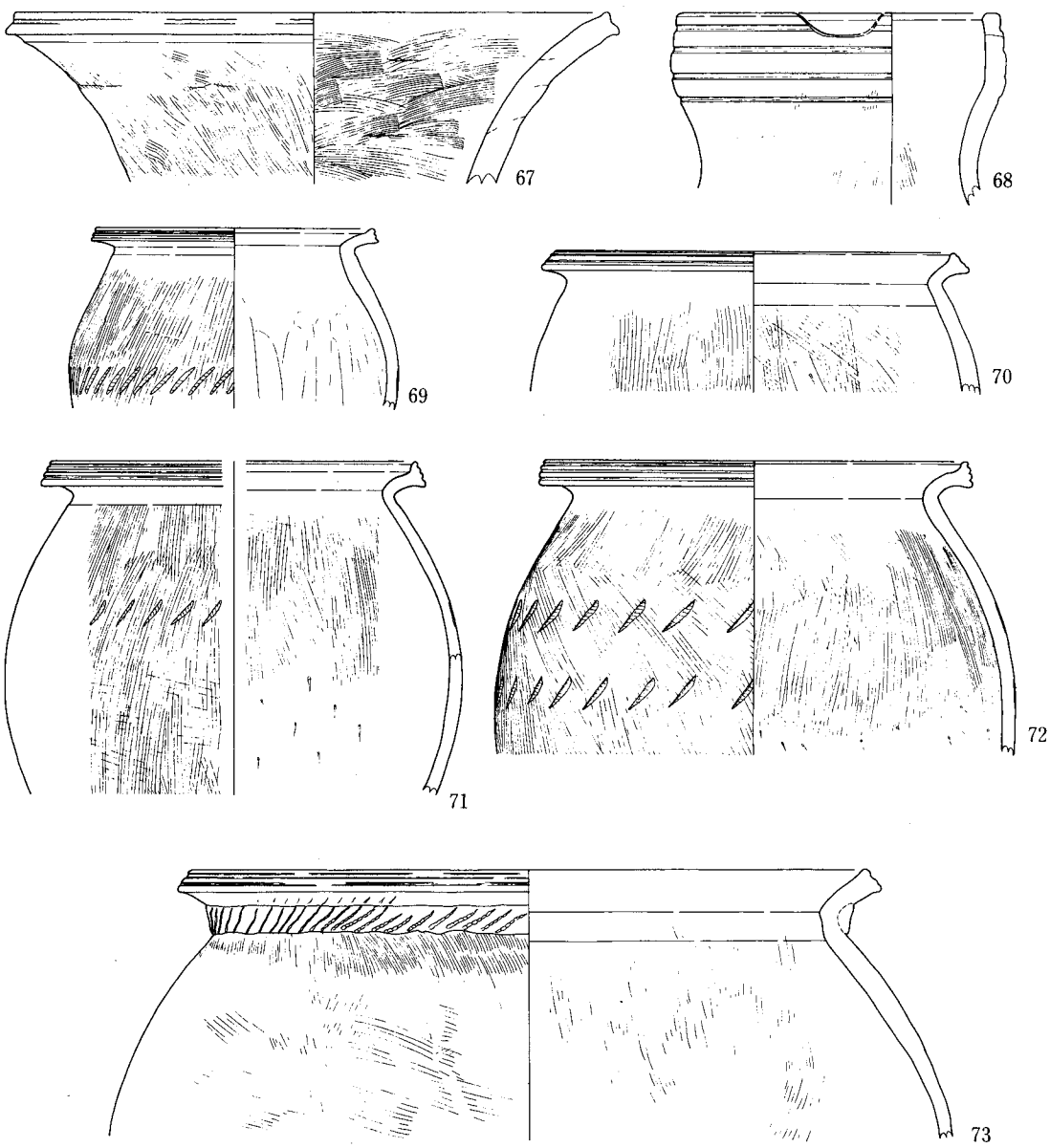




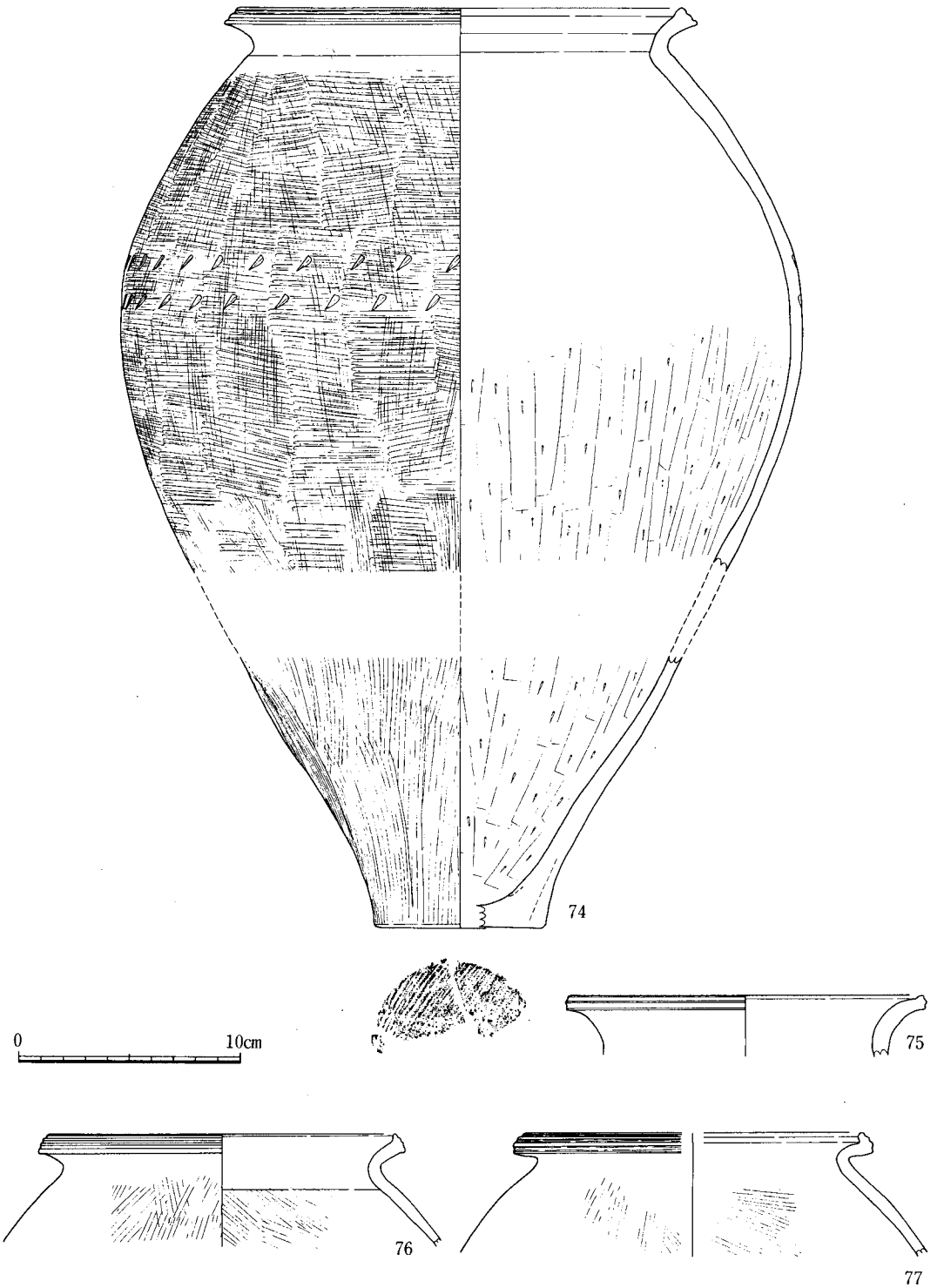
第36図　第29号土坑出土遺物



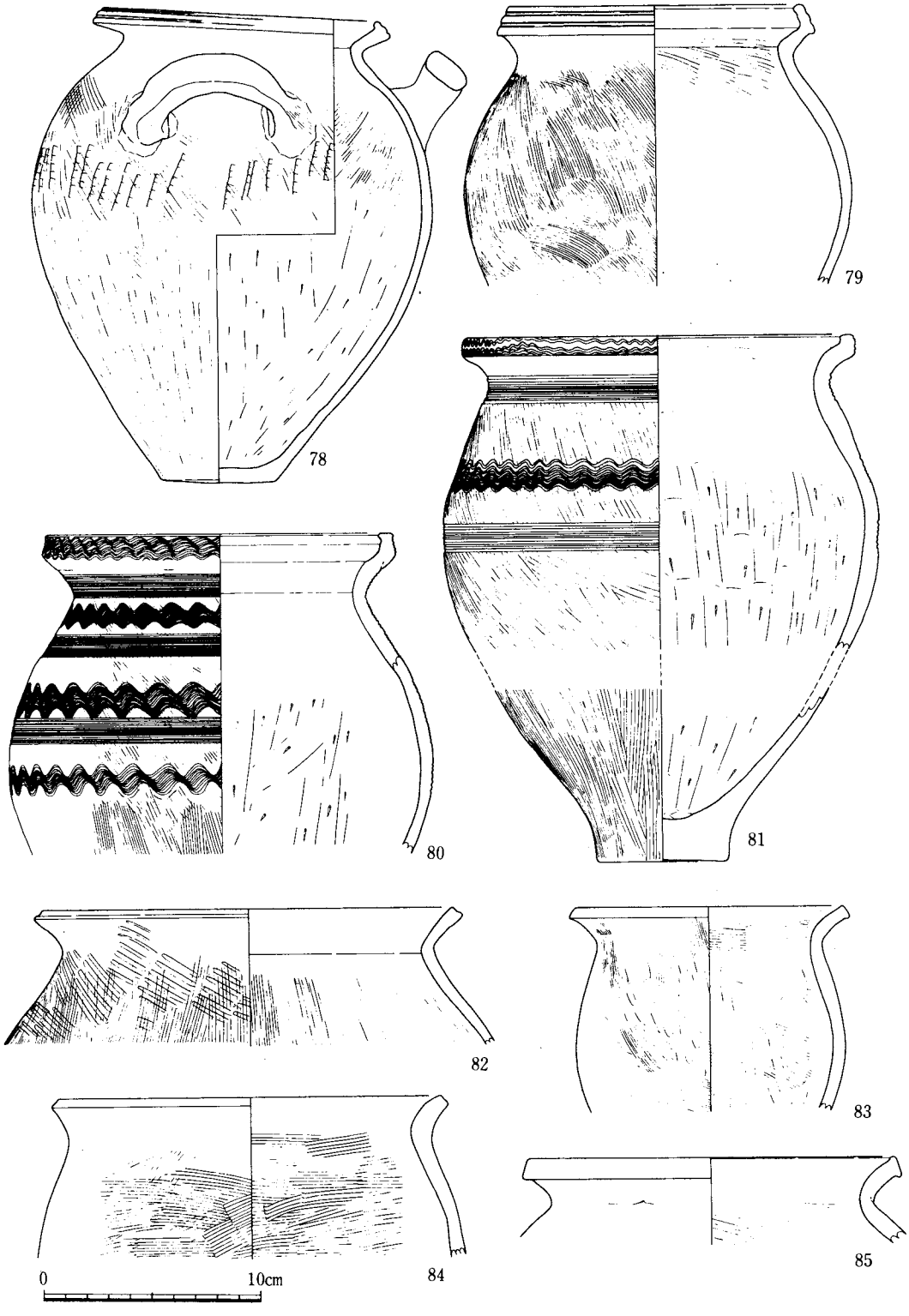
第38図　第９号溝出土遺物



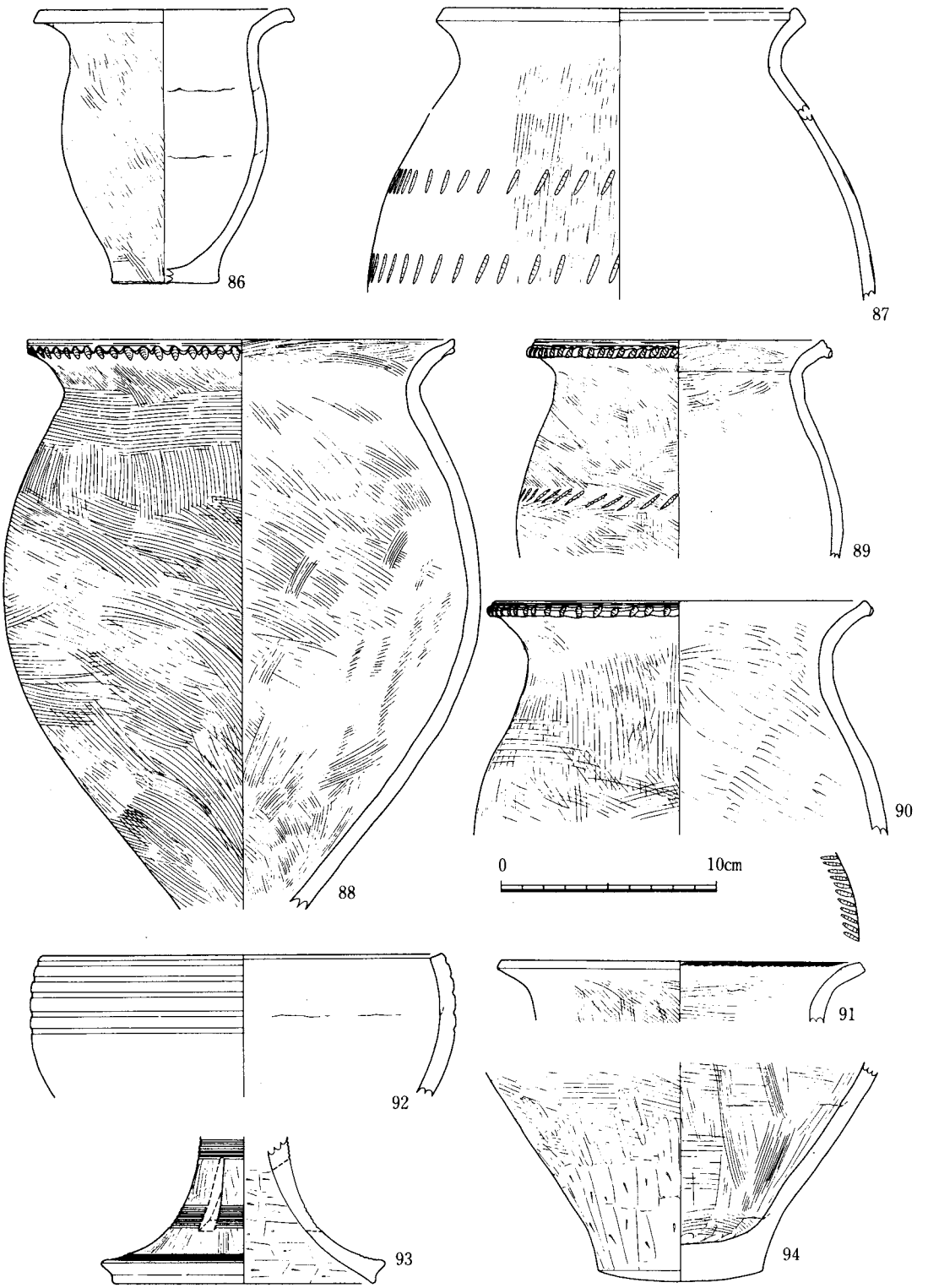
第39図　第10号溝出土遺物(1)



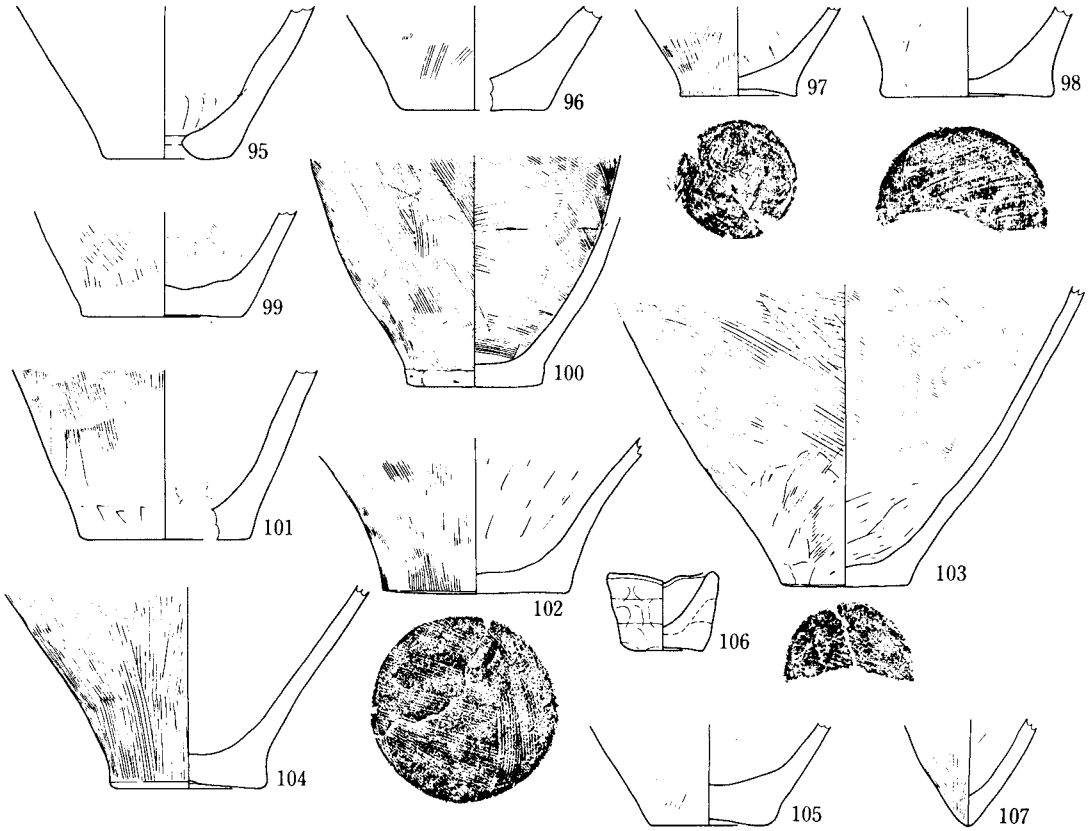
第40図　第10号溝出土遺物(2)



第41図　第10号溝出土遺物(3)

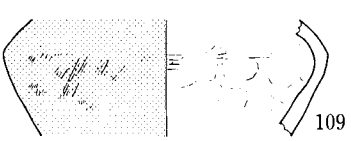


第42図　第10号溝出土遺物(4)



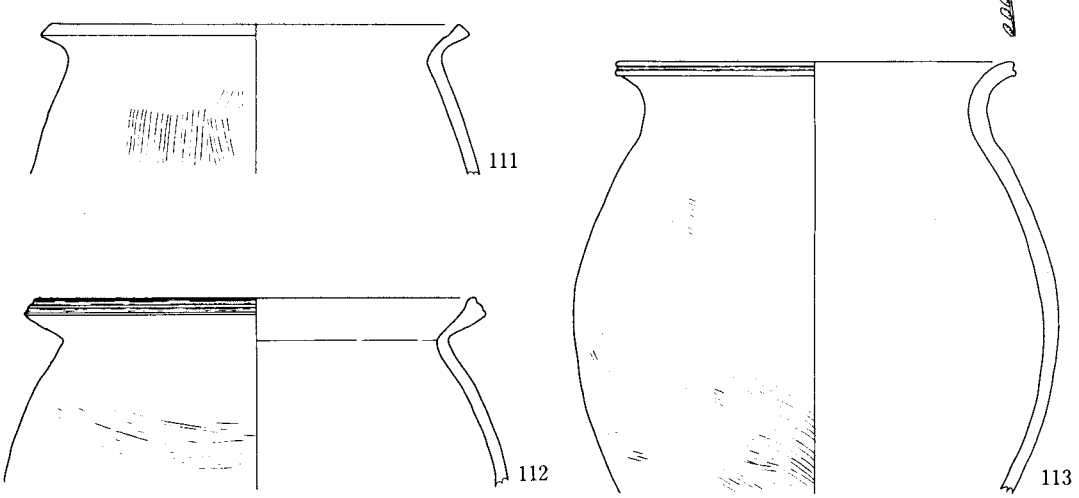
第43図　第10号溝出土遺物(5)

第44図　第11号溝出土遺物

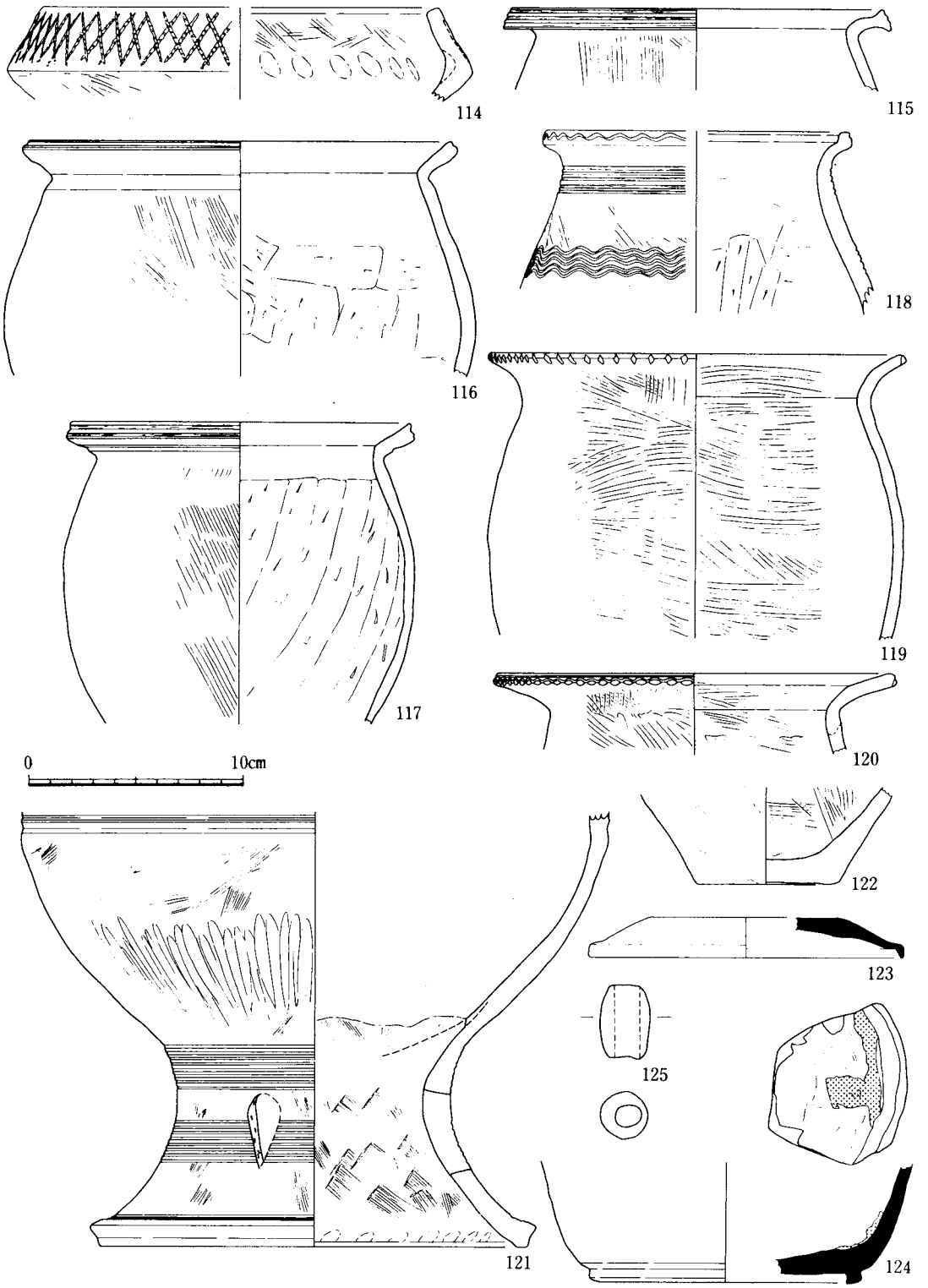


第45図　第12号溝出土遺物

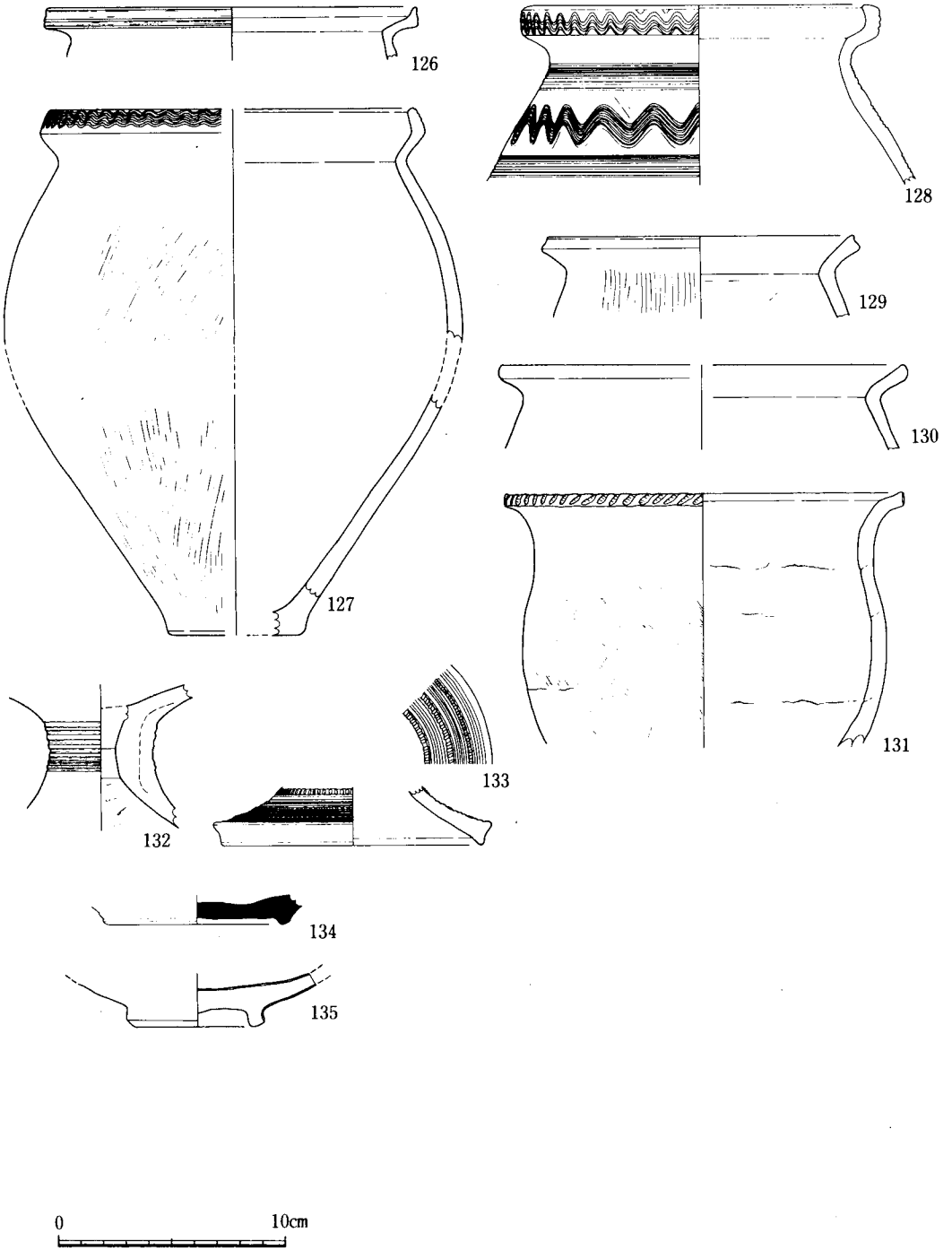
第47図　第202号溝出土遺物



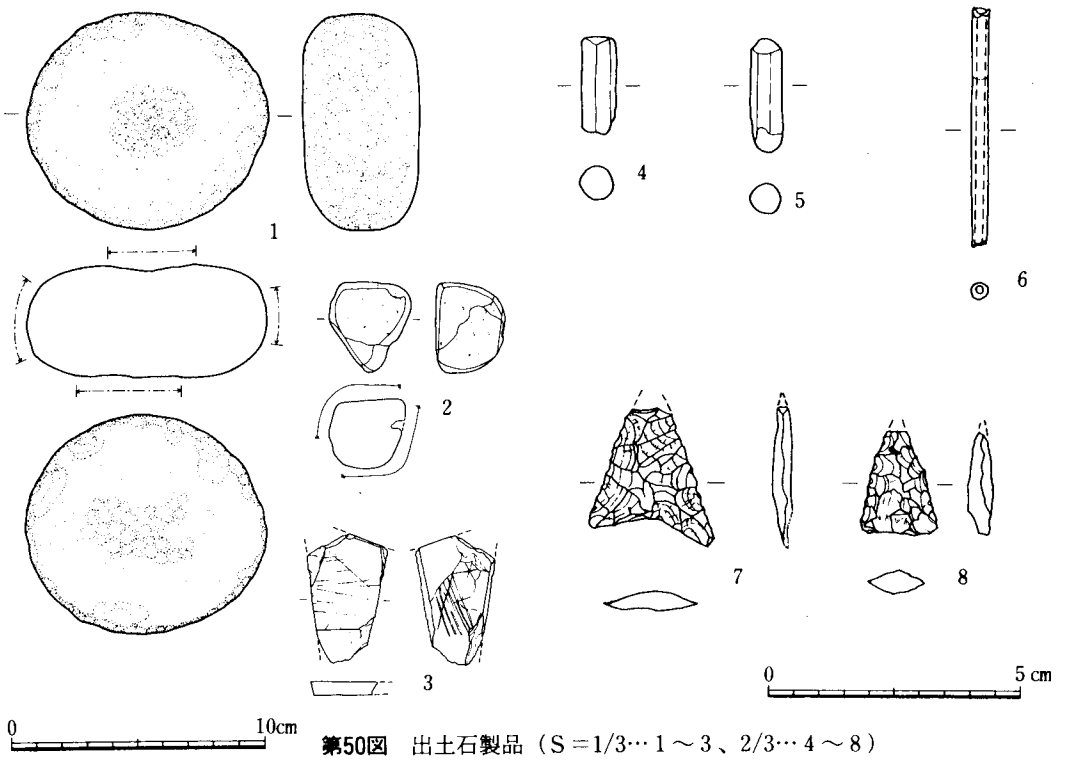
第46図　第201号溝出土遺物



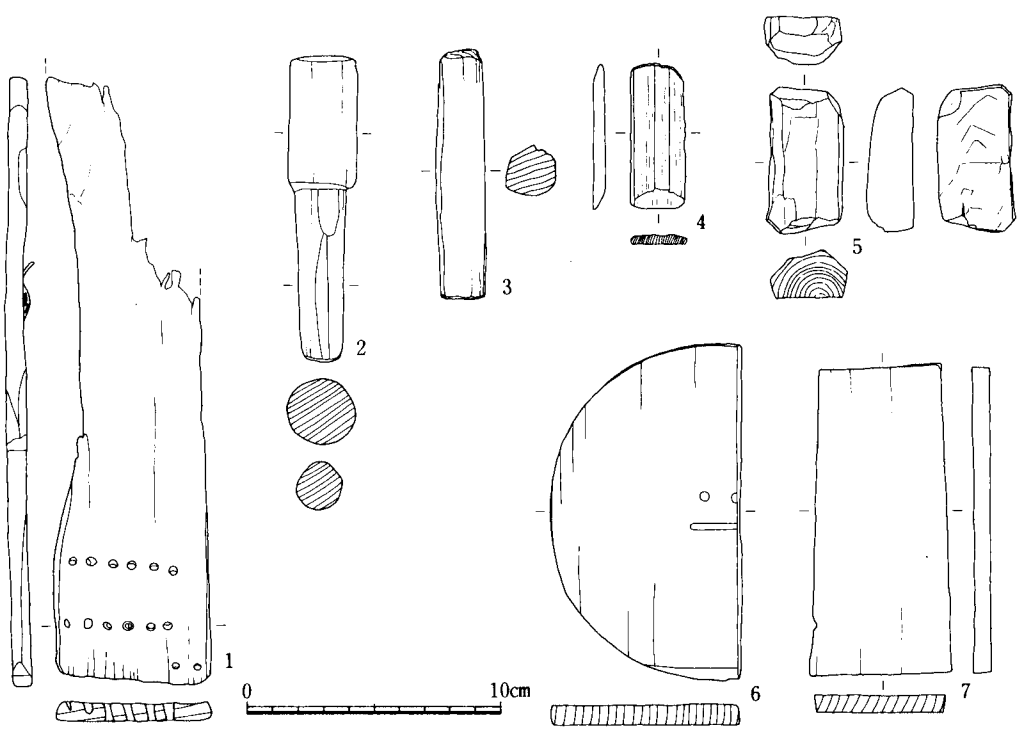
第48図　大溝出土遺物



第49図　遺構外出土遺物



第50図　出土石製品（S＝1/3…1～3、2/3…4～8）



第51図　出土木製品（S＝1/3）

第52図　出土木製品（柱根・礎板）

出土土器観察表

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
1	201号土坑	壺B	口:19.6cm	O：ヨコナデ，ハケ I：ヨコナデ，ハケ			O：淡黄 I：灰白	S 2	S 2	S 2				
2	201号土坑 1号土坑	壺D_2	口:23.4cm	O：ヨコナデ，ミガキ，凹線			O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3	S 3	S 2				
3	201号土坑 1号土坑	壺E	口:12.0cm	O：ハケ，凹線			O：橙 I：橙	S 2	S 2					
4	201号土坑	高坏A	口:14.3cm 胴:14.5cm	O：ヨコナデ，ミガキ，凹線 I：ヨコナデ			O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 2	S 2	S 2	2			
5	2号土坑	鉢A (台付)	口:(24.0)cm	O：ハケ→ナデ，凹線 I：ナデハケ→ナデ (工具)			O：灰黄褐 I：灰黄褐		S 3	S 2				
6	2号土坑 3号土坑	(底部)	底:6.0cm			O：ハケ I：指頭圧痕→ナデ	O：にぶい橙 I：にぶい橙		M 3				S 1	
7	3号土坑	壺G	口:13.3cm 胴:18.6cm 底:5.2cm 器:20.0cm	O：ヨコナデ，ハケ，円孔2コ2組 I：ヨコナデ，ハケ	O：ハケ，ナデ，ミガキ I：ハケ	O：ケズリ，ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2				
8	3号土坑	壺G	口:13.2cm 胴:15.0cm	O：ヨコナデ，ハケ，凹線，円孔2コ2組 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	M 3	M 3	M 3				
9	3号土坑	甕G	口:16.8cm 胴:20.5cm	O：ヨコナデ，ハケ I：ヨコナデ，ハケ	O：ハケ	I：ハケ→ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 3	S 3	S 3				
10	3号土坑	甕A_1	口:(16.5)cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ハケ→ナデ	O：ハケ→ナデ，キザミ I：ハケ		O：褐灰 I：褐灰	M 3		M 2				
11	3号土坑	甕K_1	口:13.1cm	O：ハケ→ナデ I：ナデ	O：ハケ I：ハケ		O：橙 I：橙，褐灰						S 1	
12	3号土坑	(脚部)		O：キザミ，凹線 I：ナデ，ケズリ			O：灰黄褐 I：灰黄褐	M 3					S 1	
13	3号土坑	甕	底:5.6cm		O：ハケ（粗） I：ナデ	O：ケズリ I：ナデ	O：明赤褐，黒 I：明赤褐，黒	M 4						
14	3号土坑	(底部) 甕	底:6.4cm			O：ハケ I：ケズリ	O：褐灰 I：灰白	M 3		M 3				
15	4号土坑 6号土坑	甕L_2	口:21.8cm	O：キザミ I：羽状文	O：ハケ I：ハケ→ヨコナデ		O：灰白 I：灰白							
16	5号土坑	壺C	口:13.8cm	O：ミガキ，円孔2コ2組 I：ヨコナデ			O：灰白 I：にぶい黄褐							
17	5号土坑	甕F_1	口:15.8cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ヨコナデ，ハケ I：ケズリ		O：浅黄橙 I：にぶい黄褐	M	M	S 2				
18	5号土坑	高坏A	口:16.8cm	O：ミガキ，凹線			O：にぶい黄褐 I：浅黄橙	M 2				M 3		
19	5号土坑	蓋	つまみ径:5.6cm		O：ヨコナデ，凹線	O：ケズリ I：ナデ	O：黄褐 I：淡黄							
20	5号土坑	土錘												
21	6号土坑	壺D_3	口:26.5cm	O：ヨコナデ，波状文 I：ヨコナデ			O：灰白 I：灰白	MS 3				MS 2		
22	6号土坑	壺G	口:20.5cm 胴:31.5cm	O：ヨコナデ，ハケ I：ハケ	O：ハケ I：ハケ，ケズリ		O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3	S 3	S 3				

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
23	7号土坑	壺D₂	口:26.0cm	O：ハケ→ヨコナデ，波状文，円形浮文 I：ハケ一部ヨコナデ			O：灰白 I：灰白	M S 3	S 2	M S 3				
24	7号土坑 Pit9	壺	底:12.2cm		O：ハケ I：ハケ	O：ケズリ I：指頭圧痕，ハケ		M 4						
25	7号土坑	把手			O：ナデ，キザミ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：灰白	S 5	S 2					
26	8号土坑	甕E	口:16.2cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ナデ，ハケ		O：浅黄橙 I：灰白	S 3	S 3	S 3			M 3	
27	8号土坑	甕C₁	口:15.0cm 胴:17.6cm	O：凹線			O：灰白，橙 I：にぶい黄橙	MS 3	M 3	S 3				
28	8号土坑	甕J₂	口:19.0cm 胴:23.4cm	O：ヨコナデ，ハケ，キザミ I：ヨコナデ，ハケ	O：ハケ，キザミ I：ハケ→ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい橙	S 2	S 2	S 2				
29	8号土坑	(器台)	口:(28.0)cm	O：凹線，クシ描平行線 I：クシ描平行線			O：浅黄橙，淡橙 I：浅黄橙	S 4	S 4	S 4				
30	9号土坑	甕C₁	口:(11.2)cm	O：凹線	O：ハケ		O：淡黄 I：淡黄	S 2	S 2	S 2				
31	9号土坑	(底部)	底:7.1cm			O：ナデ，ハケ I：ナデ	O：にぶい黄橙，灰白 I：灰白	S 2	S 2	S 2			S 1	
32	9号土坑	甕	胴:16.6cm 底:5.8cm		O：ハケ，ミガキ，キザミ，把手 I：ケズリ	O：ミガキ I：ケズリ	O：にぶい褐 I：灰白，灰黄褐	S 4	S 4	S 4				
33	10号土坑 12号土坑	壺E	口:11.6cm	O：ハケ，凹線 I：ナデ，ハケ，ミガキ			O：灰白，灰 I：灰白，灰						S 3	
34	10号土坑 10号溝	甕A₂	口:15.6cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ナデ，ハケ I：粗いハケ		O：にぶい黄橙，灰黄褐 I：灰白	M 3			M 3			
35	10号土坑	甕C₁	口:14.3cm 胴:19.5cm 底:6.1cm 器:28.2cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ，キザミ I：ハケ，ケズリ	O：ナデ I：ケズリ	O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	S 3	S 3	S 3				
36	10号土坑	甕H₂	口:20.6cm	O：ヨコナデ，ハケ I：ヨコナデ			O：にぶい黄褐 I：灰黄褐	M 2				S 1		
37	11号土坑	壺G	口:17.8cm	I：ヨコナデ，ハケ			O：黄灰 I：灰黄褐	M 2	M 3	S 2				
38	11号土坑	壺E	口:5.8cm	O：凹線 I：ナデ			O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 2	 2	S 1				
39	11号土坑	甕D	口:(19.0)cm 胴:(21.8)cm	I：ヨコナデ	O：凹線，波状文 I：ケズリ		O：淡黄 I：淡黄	S 2	M 2	S 2			S 1	
40	11号土坑	甕E	口:17.0cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：浅黄橙	S 3	S 3	S 3				
41	11号土坑	甕F₂	口:15.5cm 胴:20.0cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ，キザミ I：ナデ，ケズリ		O：淡黄 I：淡黄	M 2	M 2	S 2				
42	11号土坑	甕J₁	口:(18.6)cm	O：ヨコナデ，キザミ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい褐 I：にぶい黄褐	S 2	S 2	S 2				
43	11号土坑	甕J₂	口:(18.6)cm	O：ヨコナデ，ハケ，キザミ I：ヨコナデ，ハケ			O：にぶい黄褐 I：灰黄	L 2	M 2	S 2				

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
44	12号土坑	甕J₁	口:16.4cm	O：ハケ→ナデ，キザミ I：ヨコナデ，ハケ			O：にぶい黄褐 I：灰黄，褐灰	LS 2						
45	13号土坑	甕H₁	口:13.8cm	O：ハケ→ヨコナデ，円孔2コ2組 I：ヨコナデ，ハケ	O：タタキ，ハケ I：ハケ→ナデ		O：灰白 I：灰白							
46	15土坑	甕K₁	口:16.4cm	O：ハケ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙		S 3					
47	15号土坑	(底部)甕	底:10.6cm		O：ハケ I：ハケ	I：ハケ	O：灰白 I：灰白				M 4			
48	16号土坑	甕K₁	口:(13.0)cm	O：ハケ→ヨコナデ I：ハケ	O：ハケ I：ハケ		O：浅黄橙 I：灰白							
49	16号土坑	(把手)			O：ハケ，把手		O：灰白 I：灰白	M 3						
50	17号土坑	甕A₂	口:12.8cm	O：凹線 I：ナデ	O：ハケ I：ケズリ		O：灰白 I：灰白	S 3						
51	24号土坑	甕D	口:28.2cm	O：ヨコナデ，波状文，凹線 I：ヨコナデ，ヨコハケ	O：ハケ，波状文 I：ナデ		O：灰白 I：灰白	S 4		S 1		S 1		
52	24号土坑	甕A₁	口:12.0cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ		O：灰白，褐灰 I：灰白，褐灰	MS 3		S 4				
53	25号土坑	甕D	口:(16.8)cm	O：ヨコナデ	O：ハケ		O：浅黄橙 I：浅黄橙，褐灰					S 1		
54	27号土坑	鉢A	口:17.2cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：灰白，灰褐 I：灰白			S 3			S 1	
55	27号土坑	(底部)甕	底:5.0cm		O：ハケ，ヨコナデ I：ハケ	O：ナデ I：ナデ	O：灰白 I：浅黄橙					LM S5		
56	29号土坑	甕B	口:25.0cm	O：ヨコナデ，ハケ，凹線 I：ハケ	O：ハケ，波状文，凹線 I：ハケ，ナデ		O：淡黄 I：淡黄	S 2	S 2	S 2				
57	29号土坑	甕F₂	口:13.4cm 胴:16.1cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ		O：にぶい橙 I：にぶい黄橙	L 2	M 3	S 2			M 1	
58	29号土坑	甕		O：ヨコナデ I：ナデ	O：ハケ，キザミ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2				
59	29号土坑	甕K₁	口:10.8cm 胴:9.4cm	O：ヨコナデ，ナデ I：ハケ	O：ハケ I：ハケ→ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2			S 2	
60	29号土坑	甕L₂	口:18.0cm	O：ヨコナデ，キザミ I：ハケ，キザミ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 3			S 2	
61	29号土坑	甕J₂	口:16.8cm 胴:17.2cm	O：ヨコナデ，キザミ I：ヨコナデ，ハケ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	M 2			M 2	
62	29号土坑	(底部)甕	底:7.7cm		O：ハケ I：ハケ→ナデ	O：ナデ I：ハケ→ナデ	O：浅黄橙，にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2				
63	29号土坑	(台付)鉢A	口:(24.0)cm	O：ヨコナデ I：ハケ→ナデ	O：ハケ→ヨコナデ I：ヨコナデ		O：灰白 I：灰白			S 2			S 1	

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
64	30号土坑	甕Ⅰ2	口:12.0cm 胴:12.7cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ，ナデ	O：ハケン I：ハケ，ケズリ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	M 3				
65	9号溝	甕	胴:19.0cm		O：ハケ，キザミ I：ハケ，ケズリ		O：浅黄橙 I：浅黄橙							
66	9号溝	土錘												
67	10号溝	壺D1	口:24.6cm	O：ヨコナデ，ハケ I：ハケ			O：淡黄 I：淡黄	S 2	S 2	S 3				
68	10号溝	壺F	口:13.0cm	O：ハケ→ヨコナデ，凹線，指かけ I：ヨコナデ，ハケ			O：灰白 I：灰白	MS 2			MS 2	MS 1		
69	10号溝	甕A1	口:11.4cm 胴:13.6cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ，キザミ I：ナデ		O：浅黄橙，灰黄褐 I：灰白	MS 2						
70	10号溝	甕A2	口:16.4cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：タナハケ I：ハケ，ケズリ		O：浅黄橙，にぶい黄橙 I：浅黄橙，橙	S 4	S 2	S 1		S 1		
71	10号溝	甕A2	口:(15.0)cm 胴:(19.0)cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ(粗細)，キザミ I：ハケ，ケズリ		O：灰黄褐，にぶい黄橙 I：灰黄褐，にぶい黄橙	MS 5	M 2		M 3			
72	10号溝	甕C1	口:17.4cm 胴:21.6cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ，キザミ I：ハケ，ケズリ		O：淡黄 I：淡黄	S 4	M 2			M 1	M 1	
73	10号溝	甕A3	口:28.0cm	O：ヨコナデ，凹線，凸帯文，キザミ I：ヨコナデ，ハケ	O：ハケ I：ハケ→ナデ		O：淡黄 I：浅黄橙	S 2	S 2	S 3				
74	10号溝	甕A1	口:20.0cm 胴:30.8cm 底:7.8cm 器:(42.0)cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：叩き→タテハケ，キザミ I：上－ナデアゲ 下－ケズリ	O：ハケ I：ケズリ	O：灰白，灰黄 I：灰白	MS 2			MS 2	MS 1		
75	10号溝	甕	口:15.8cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ			O：暗褐，にぶい褐 I：暗褐，にぶい褐	M 3	S 2			MS 2		
76	10号溝	甕C1	口:15.6cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：灰白 I：灰白	MS 3			MS 2		MS 2	
77	10号溝	甕C1	口:(15.0)cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：灰白 I：灰白	MS 3				M 2	M 2	
78	10号溝 10号土坑 15号土坑	甕C1	口:12.6cm 胴:18.5cm 底:5.2cm 器:22.0cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ，ミガキ，キザミ，把手 I：ハケ，ケズリ	O：ミガキ I：ケズリ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 4	S 4	S 4				
79	10号溝	甕C2	口:13.5cm 胴:17.8cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ，ハケ	O：ハケ I：ナデ		O：にぶい橙 I：にぶい褐	S 2	S 2	S 2				
80	10号溝 9号溝 5号土坑 10号土坑	甕D	口:(15.8)cm 胴:(19.6)cm	O：ヨコナデ，波状文，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ，波状文，凹線 I：上－ナデ 下－ケズリ		O：にぶい黄橙，灰白 I：にぶい黄橙	MS 5	MS 2	M 1				
81	10号溝	甕D	口:17.6cm 胴:29.1cm 底:6.1cm 器:(24.3)cm	O：ヨコナデ，波状文，凹線 I：ハケ→ヨコナデ	O：ハケ，凹線 I：ケズリ，頸部付近ナデ	O：ハケ，底面ナデ I：ケズリ	O：灰白 I：灰白，灰	MS 3			MS 3			

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
82	10号溝	甕D	口:18.9cm	O：タタキ→ヨコナデ I：ヨコナデ	O：タタキ→タテハケ I：タテハケ，ケズリ		O：灰白 I：灰白	MS 4	MS 2		MS 4	MS 4		
83	10号溝	甕H_1	口:12.2cm 胴:12.3cm	O：ハケ→ヨコナデ I：ハケ→ヨコナデ	O：ハケ→一部ミガキ I：ハケ→ナデ		O：灰白，淡黄 I：灰白	MS 3				M 1		
84	10号溝	甕H_2	口:17.6cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：淡黄 I：灰白	S 3		MS 2				
85	10号溝	甕I_1	口:16.8cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：灰白	S 4					M 5	
86	10号溝	甕K_1	口:11.6cm 胴:9.7cm 底:5.0cm 器:12.9cm	O：ハケ	O：ハケ	O：底面ナデ	O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2				
87	10号溝	甕H_1	口:16.2cm 胴:25.7cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：タテハケ，キザミ		O：橙，浅黄橙 I：橙，浅黄橙	M 4			M 4	LM 5		
88	10号溝 15号土坑	甕J_2	口:20.0cm 胴:22.4cm	O：ヨコナデ，ハケ，キザミ I：ハケ，ナデ	O：ハケ I：ハケ，ナデ		O：にぶい黄橙 I：にぶい黄橙	S 2	S 2	S 2				
89	10号溝	甕J_2	口:13.4cm 胴:15.2cm	O：ヨコナデ，凹線，キザミ I：ハケ	O：ハケ，キザミ I：ハケ，ナデ		O：にぶい黄橙，淡赤橙 I：淡赤橙，にぶい黄橙	S 3	S 2	S 3				
90	10号溝	甕J_2	口:17.0cm 胴:19.2cm	O：凹線，キザミ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：浅黄橙	S 2	S 2	S 2				
91	10号溝	甕L_1	口:16.7cm	O：ハケ→ヨコナデ I：ハケ，キザミ			O：明褐灰 I：褐灰，にぶい橙	M 4			M 4	M2 3		
92	10号溝	鉢B	口:18.6cm	O：凹線			O：浅黄橙，灰白 I：浅黄橙，灰白	M 4				M 1		
93	10号溝	(脚) 高坏A	脚:12.0cm			O：ハケ→ミガキ，凹線，透かし I：ケズリ	O：灰白 I：灰白	MS 5	S 2	M 4	MS 4			
94	10号溝	(底部)	底:7.6cm		O：ハケ一部ミガキ I：ハケ→ナデ	O：ケズリ I：ハケ，ナデ	O：にぶい橙 I：淡黄	MS 2				MS 2		
95	10号溝	(底部) 甕	底:5.1cm			O：底部 I：指頭圧痕	O：灰白 I：灰白			S 2				
96	10号溝	(底部) 甕	底:5.6cm			O：ハケ I：ナデ	O：灰白 I：灰白			S 1		S 1		
97	10号溝	(底部)	底:4.6cm			O：ハケ I：ケズリ	O：にぶい黄橙，灰黄褐 I：灰白，淡黄			M 1		S 1		
98	10号溝	(底部) 甕	底:6.5cm			O：ハケ I：ハケ	O：灰白 I：灰白			S 1		S 1		
99	10号溝	(底部)	底:6.0cm			O：ナデ，ハケ I：ハケ	O：灰白，浅黄橙 I：灰白					M 4		
100	10号溝	(底部)	底:5.4cm		O：ハケ I：ハケ	O：ハケ，ケズリ，底面ナデ I：ハケ，底面ナデ	O：にぶい褐 I：灰白	MS 4	MS 3		M 3			
101	10号溝	(底部)	底:6.7cm		O：ナデ，ハケ	O：ハケ I：指頭圧痕	O：にぶい黄橙 I：灰白			S 1		S 1		
102	10号溝	(底部)	底:7.5cm			O：ハケ I：ケズリ，ナデ	O：淡黄 I：浅黄橙	S 2	S 2	S 3				

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
103	10号溝	(底部)	底:5.0cm		O：ハケ I：ハケ→ナデ	O：ケズリ，ハケ I：ケズリ	O：にぶい黄橙 I：灰黄褐	S 3	S 3	S 3				
104	10号溝 10号土坑	(底部)	底:6.2cm		O：タテハケ I：ナデ	O：ハケ，底面ナデ I：ナデ	O：浅黄橙 I：にぶい黄橙	MS 5						
105	10号溝	(底部)	底:4.8cm			O：ハケ I：ハケ	O：灰白，にぶい橙 I：灰白					S 1		
106	10号溝	手捏ね	口:4.4cm 底:2.8cm 器:3.1cm	O：指頭圧痕 I：ナデ	O：指頭圧痕 I：ナデ	O：ナデ I：ナデ	O：灰白 I：灰白					S 1		
107	10号溝	(底部) 鉢B			O：ハケ I：ハケ	O：ハケ I：ナデ	O：浅黄橙 I：黄灰			S 2				
108	11号溝	(底部)	底:3.6cm			O：ナデ I：ナデ	O：にぶい黄橙，褐灰 I：灰白			S 3		S 1		
109	12号溝	壺			O：ハケ赤彩 I：指頭圧痕，ハケ		O：にぶい黄橙 I：にぶい橙			S 3		S 3		
110	202号溝	須恵器坏	口:11.6cm 器:2.8cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：ヨコナデ I：ヘラ切り，ナデ	O：灰 I：灰		S 2					
111	20号溝	甕H_1	口:16.1cm	O：ハケ	O：ハケ		O：灰白 I：灰白					S 3		
112	201号溝	甕A_1	口:16.3cm	O：凹線 I：ヨコナデ	O：ヨコナデ，ハケ I：ナデ		O：黒 I：灰白	S 2						
113	(201溝) SX-1	甕L_1	口:15.5cm 胴:18.2cm	O：凹線，ヨコナデ I：ヨコナデ，キザミ	O：ハケ→ナデ I：ナデ		O：淡黄 I：淡黄	S 2	S 2	S 2				
114	大溝	壺A	口:(18.4)cm	O：ハケ→ナデ，斜格子文 I：ハケ→ナデ			O：黄灰 I：黄灰	S 3			S 1			
115	大溝	甕A_2	口:17.2cm	O：凹線	O：ハケ		O：浅黄橙 I：浅黄橙	S 3						
116	大溝	甕F_1	口:19.8cm 胴:22.0cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ヨコナデ，ケズリ		O：浅黄橙 I：浅黄橙							
117	大溝	甕F_1	口:15.8cm 胴:15.9cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ I：ケズリ		O：黄橙 I：にぶい黄橙							
118	大溝	甕D	口:(14.0)cm	O：ヨコナデ，波状文，凹線 I：ヨコナデ	O：ハケ(粗細)，波状文 I：ハケ→ナデ，ケズリ		O：浅黄橙 I：灰白，灰	MS 3	MS 3					
119	地山道上 大溝	甕J_2	口:19.0cm 胴:19.3cm	O：ヨコナデ，一部ハケ I：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：明黄褐 I：明黄褐							
120	大溝	甕J_2	口:18.2cm	O：ハケ，キザミ I：ハケ	O：ハケ I：ハケ		O：明黄褐 I：明黄褐							
121	大溝	台付鉢B	胴:27.5cm 脚:20.0cm クビレ:12.8cm	O：ヨコナデ，凹線	O：ハケ→ミガキ	O：ハケ→ナデ，凹線，涙形透かし I：ハケ	O：浅黄橙 I：浅黄橙	M 5	S 1					
122	大溝	(底部)	底:6.6cm		I：ハケ	O：ハケ→ナデ I：ハケ	O：浅黄橙 I：灰白							
123	大溝	須恵器坏蓋	口:14.4cm	O：ヨコナデ I：ヨコナデ			O：明オリーブ灰 I：オリーブ灰							
124	大溝	須恵器有台坏	底:11.4cm		O：ヨコナデ I：ヨコナデ，漆紙	O：ヘラケズリ I：ヨコナデ，漆紙	O：灰白 I：灰白							金沢窯跡
125	大溝	土錘												

No.	出土地区	器種	法　量	口頸部	胴　部	底(脚)部	色　調	石	長	黒	他	焼	海	備考
126	北側調査区	甕C₁	口:16.1cm	O：ヨコナデ，凹線 I：ヨコナデ	I：ヨコナデ		O：黄橙 I：灰白							
127	西側調査区	甕D	口:(16.0)cm 胴:(20.3)cm 底:(6.0)cm 器:(24.3)cm	O：ヨコナデ，波状文	O：ナデ	O：ナデ	O：灰白，にぶい橙 I：灰白，浅黄橙	M 4	M 3		M 3	M 3		
128	排水溝	甕D	口:14.4cm	O：ヨコナデ，波状文 I：ヨコナデ	O：ハケ→ナデ，波状文，凹線		O：灰白 I：灰白	M 4			M 4			
129	地山道上	甕H₁	口:13.4cm	O：ヨコナデ	O：ハケ I：ハケ		O：にぶい黄橙 I：淡黄							
130	表採	甕H₁	口:(17.6)cm	O：ヨコナデ			O：浅黄橙 I：浅黄橙							
131	地山道上	甕J₁	口:17.5cm 胴:16.0cm	O：ヨコナデ，キザミ I：ヨコナデ	O：ハケ，ナデ I：ナデ		O：褐 I：橙	L 1 M 3	S 2	2			S 2	
132	地山道上	高坏A	クビレ4.5cm		O：凹線 I：ナデ	I：ケズリ	O：灰白 I：灰白	M 3		S 3				
133	地山道上	(脚)	底:11.4cm			O：ヨコナデ，凹線，キザミ	O：淡黄 I：淡黄	S 5	S 2					
134	表採	須恵器有台坏	底:7.4cm			O：ヨコナデ I：ヨコナデ	O：灰白 I：灰白							
135	排水	陶器(底部)	底:5.6cm		O：施釉 I：施釉	O：施釉 I：施釉	釉：明緑灰 素地：明青灰							

第5章 まとめ

◎戸水B遺跡・戸水B式土器の評価

戸水B遺跡周辺は昭和61年（1986年）から石川県により土地区画整理事業が実施されている。戸水B遺跡もこれに伴う数次の発掘調査で、本報告以降にも平地式建物跡（第6次調査）や集落域を画するとみられる環濠（第7次調査・第9次調査）などが検出され、かなり多くの資料が蓄積されつつある。戸水B遺跡・戸水B式土器の評価は、これらの資料も検討の対象に含めてなされるべきであると考える。その上で本報告書ではいくつかの問題点を挙げるにとどめ、続いて刊行される予定の第6次から第9次の発掘調査報告書の課題としたい。

戸水B式土器は、1974年の戸水B遺跡第1次発掘調査で出土した凹線文系土器群をもって設定された。以来現在に至るまでほとんど戸水B式土器の評価は変わることなく、加賀地域における畿内第Ⅳ様式並行期の土器群として位置付けられてきた。

加賀地域では、前段階の畿内第Ⅲ様式並行の土器群として、小松市八日市地方遺跡出土の櫛描文系土器群をもって、小松式土器が設定されている[1]。増山仁氏はこの小松式をいわゆる櫛描文の最盛期と狭義にとらえ、小松式から戸水B式への移行期の様相を示すものとして磯部運動公園遺跡出土の土器群を当てた[2]。その後、吉岡康暢氏は「北陸弥生土器の編年と画期」[3]の中で、凹線文系土器の波及を指標に、狭義の小松式土器と磯部運動公園遺跡出土土器との間に明確な変化を認めた。さらに氏は、いわゆる戸水B式期を北陸における凹線文系土器群の定着期とし、凹線文系土器が全器種に及び、量的にも櫛描文系土器とほぼ拮抗するまでになるとの指摘をなされた。

第4・5次調査のまとめ

今回の発掘調査は、戸水B遺跡のごく縁辺の調査であった。従って、今回得られた資料によって戸水B遺跡の時代的な変遷や、集落構造を語ることは非常に難しいことであり、良い結果を得ることはできないであろう。しかしながら、とりあえず今回の調査をまとめる意味でも、検出した遺構、出土した土器について検討を加え、今後の課題を模索してみたい。

今回の調査で出土した土器のうち、凹線文系の土器、またはその影響を強く受けた土器と考えられるのが、壺ではD類、E類、F類など、甕ではA類、C類、E類、F類、I類など、高坏ではA類、鉢では台付鉢のA類、B類などである。これに対し在来の土器と考えられるのが、壺ではA類、G類など、甕ではD類、G類、H類、J類、K類などである。また、甕のL類は畿内Ⅲ様式併行期の所産であろう。これらの出土比率や組合せが凹線文系土器群の波及・定着期にあって、その時期を推定するポイントになろう。

これをもとに出土土器を検討すると、大きく2段階程度には区別できそうである。細かく検討すればさらに細分できそうではあるが、それは次の機会に対象とする資料を増やして行いたい。

とりあえず古相を呈するものでは3号土坑、6号土坑、8号土坑、24号土坑、29号土坑出土の土器群などである。これに対し新しい様相がみられるのは1号土坑、2号土坑、5号土坑、7号土坑、9号土坑、10号土坑出土の土器群などである。また11号土坑、10号溝出土の土器群は古新両方の様相がみられる。こうしてみると、今回の調査で出土した土器は、畿内Ⅳ様式併行期の中でも比較的新しい様相を示すものが多いようである。古段階ではまだ在来色が強いが、新段階では量的にみた場合でも凹線文系の土器が在来系の土器を凌駕しているような印象を受ける。これは従来戸水B式の標準資料とされてきた当遺跡第1次発掘調査出土の土器群と比べても、同様の傾向が指摘できるのではないだろうか。

これからの課題としては、今回古い様相とした土器群が、磯部運動公園遺跡出土の土器群とどの様な関係にあるのか。逆に新しい様相とした土器群と、従来の戸水B式土器群との関係も明らかにしなければならないだろう。

新しい様相の土器群は、台付鉢の存在、数条の凹線の定着、内面の削りが頸部にまで達するなどの特徴から、戸水B式期においてもかなり終末に近い時期の土器群と言うことができるのではないだろうか。これに対し、古い様相の土器群は、磯部運動公園遺跡出土の土器との比較検討を行うには若干資料が少なく、決め手に欠ける感がある。時期的な位置付けについては今回は保留しておきたい。

また、出土土器の新古関係を、発掘区の遺構の位置と合わせてみれば、おぼろげながらでも集落構造の変遷が見えてくるのではないだろうか。この辺りの検討も含め今回の調査だけでは解決できない課題としておきたい。

なお本報告書を成すにあたり、以下の方々から御指導・御教示を頂いた。今回の報告では問題点の整理程度のことしかできなかった。筆者の基本的な部分での力量不足を強く感じている次第であり、続いて刊行される予定の6～9次の発掘調査報告書の中では考察を深め、助言を活かしたいと考えている。最後になったが、記して深謝の意を表したい。

赤沢徳明、楠　正勝、増山　仁、湯尻修平、北野博司、安　英樹（順不同・敬称略）

註

(1)　橋本澄夫　「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」(『石川考古学研究会会誌』第11号　石川考古学研究会　1968年)

(2)　『金沢市磯部運動公園遺跡』　金沢市教育委員会　1988年

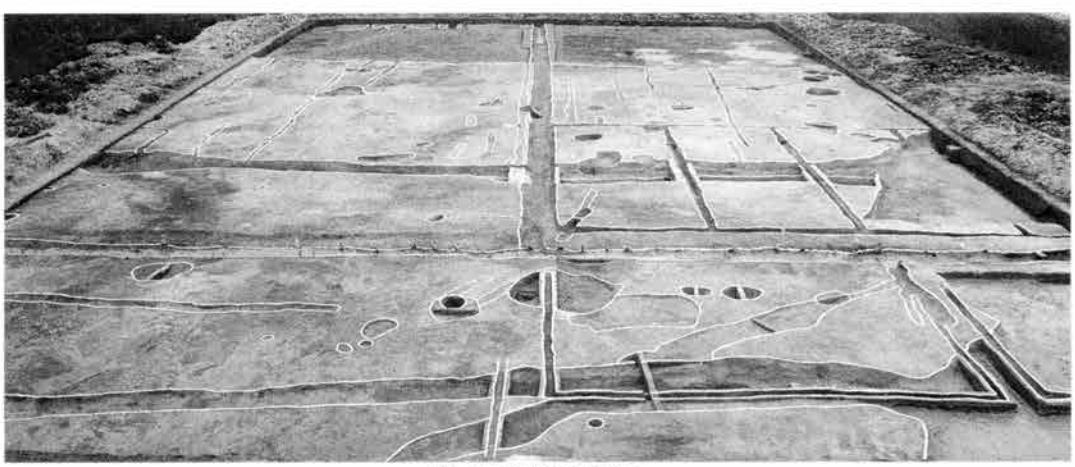
(3)　『日本海域の土器・陶磁［古代編］』　六興出版　1991年

図　　版

図版1

調査前風景

第4次調査表土除去作業



第4次調査完掘状況

図版2

発掘作業風景

発掘作業風景

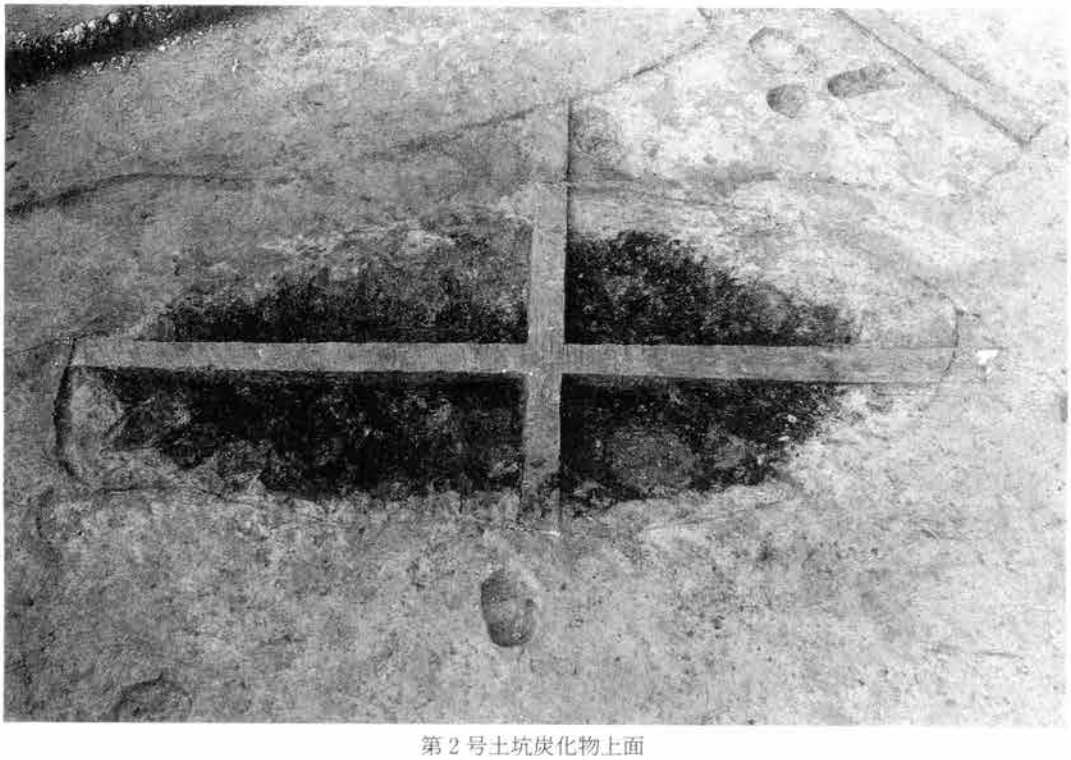
掘立柱建物跡

同　柱穴

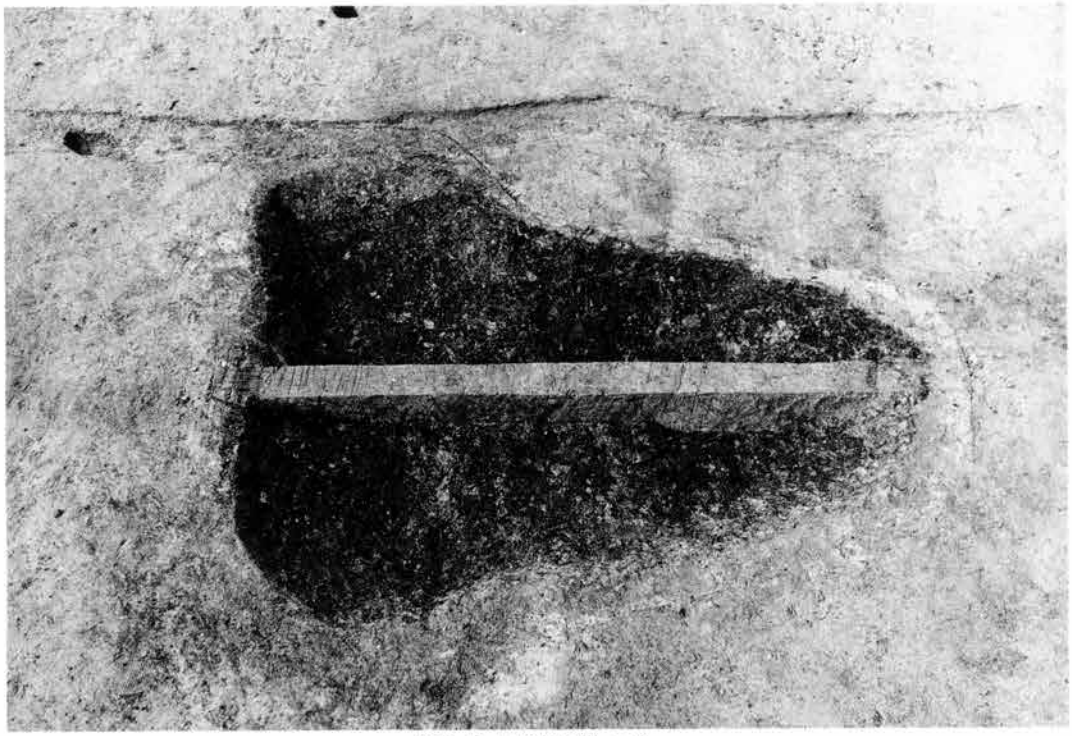
同　柱穴

図版4

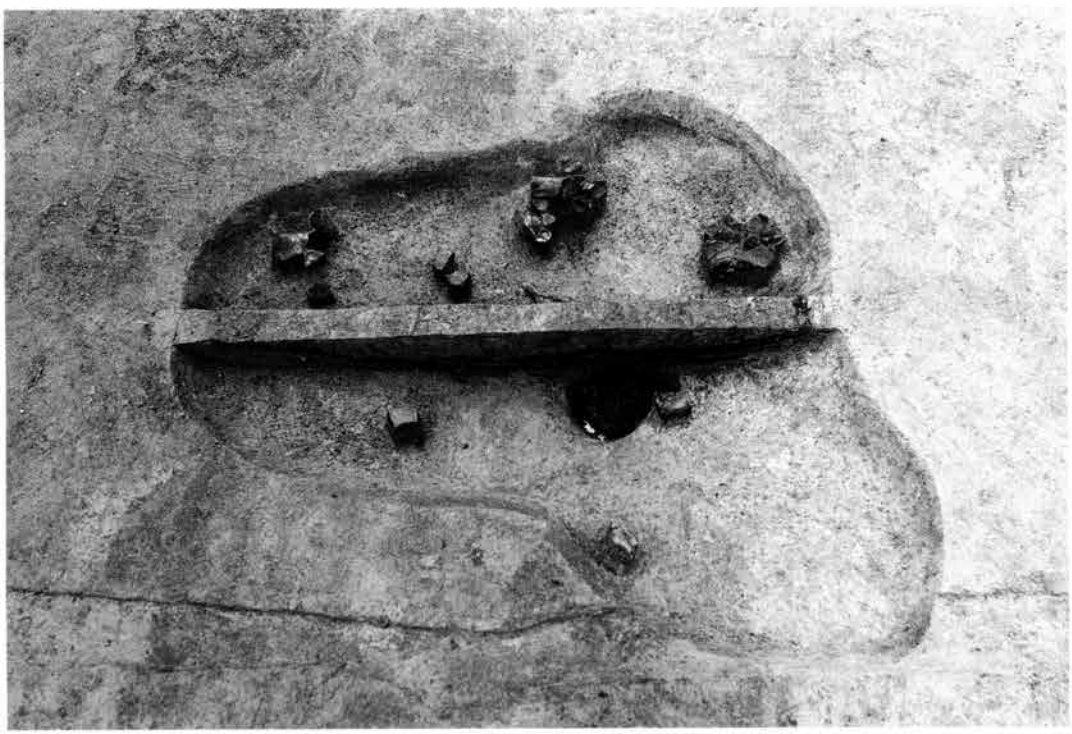
第1号土坑遺物出土状況



第2号土坑炭化物上面

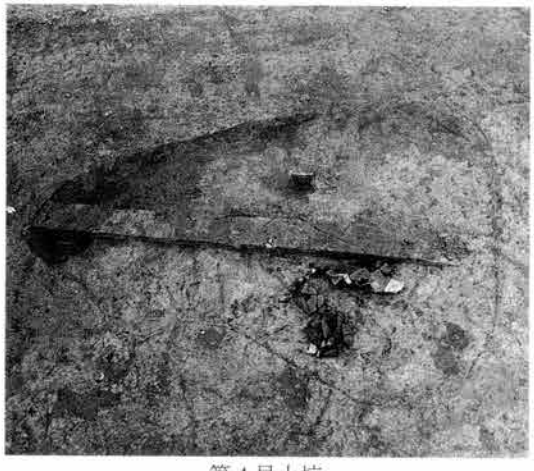


第3号土坑炭化物上面



第3号土坑遺物出土状況

図版6

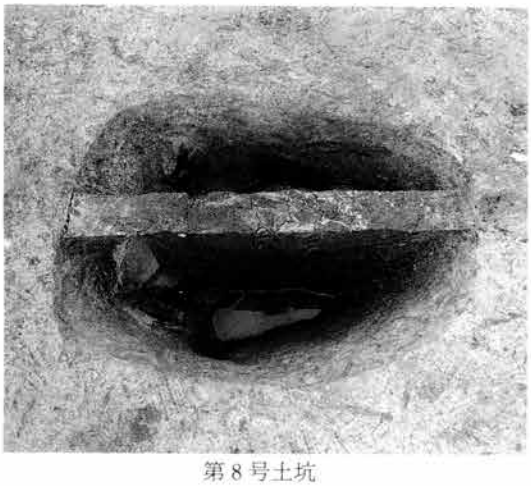


第4号土坑

同遺物出土状況

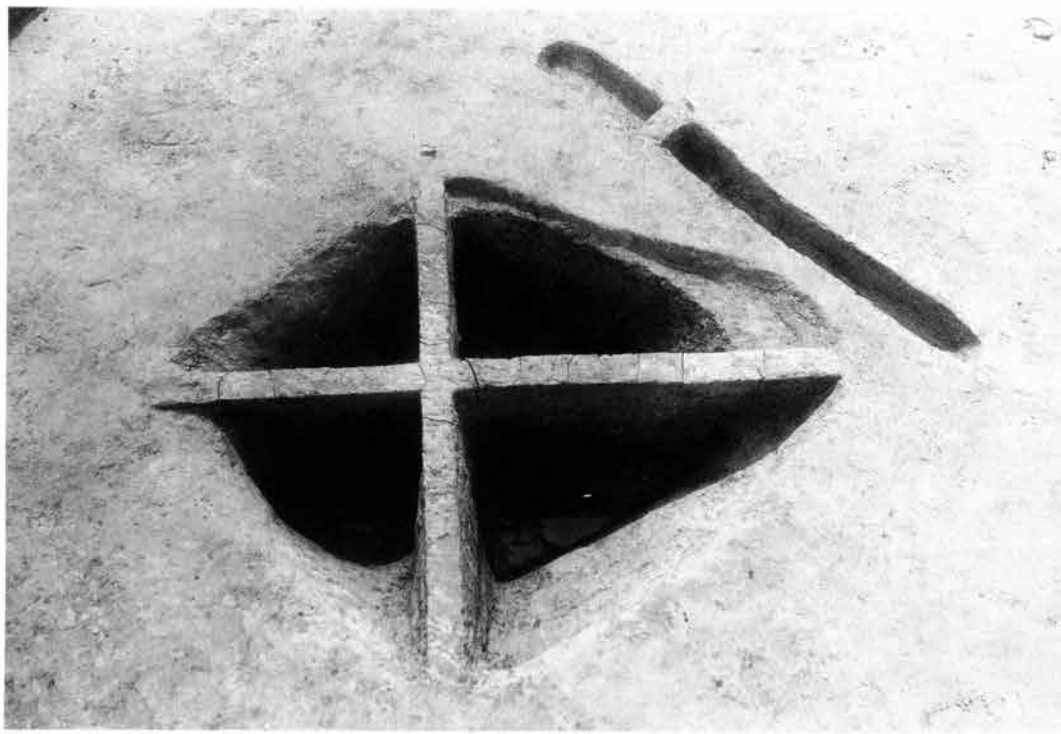
第6号土坑

同遺物出土状況

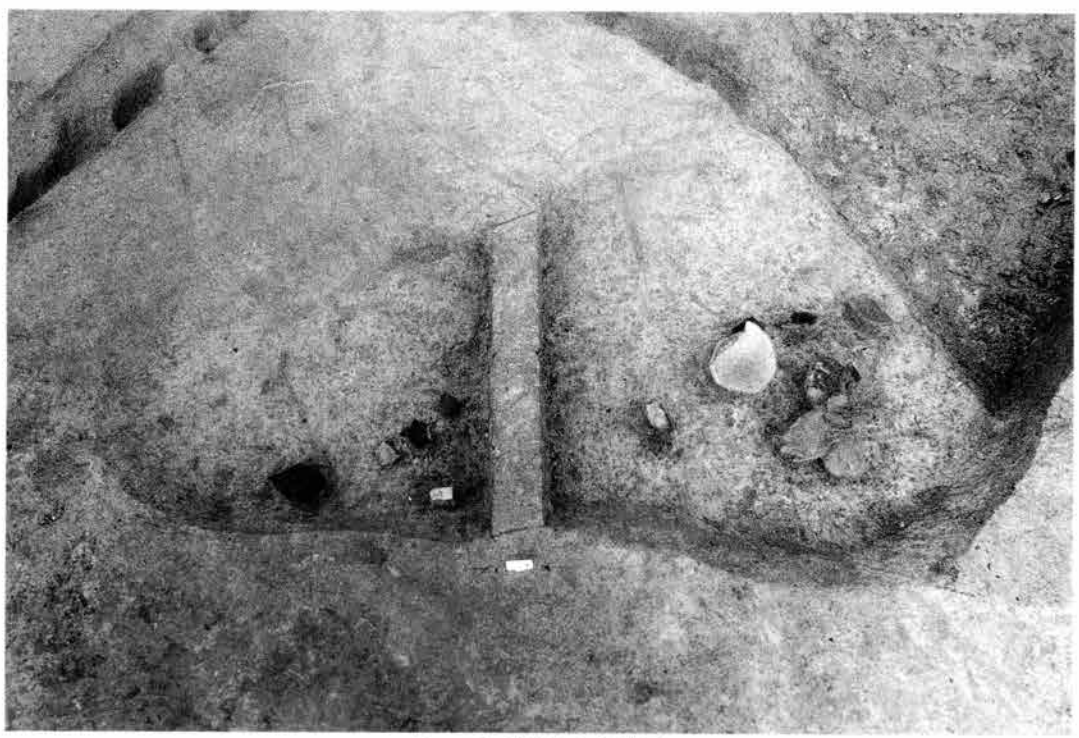


第8号土坑

同遺物出土状況



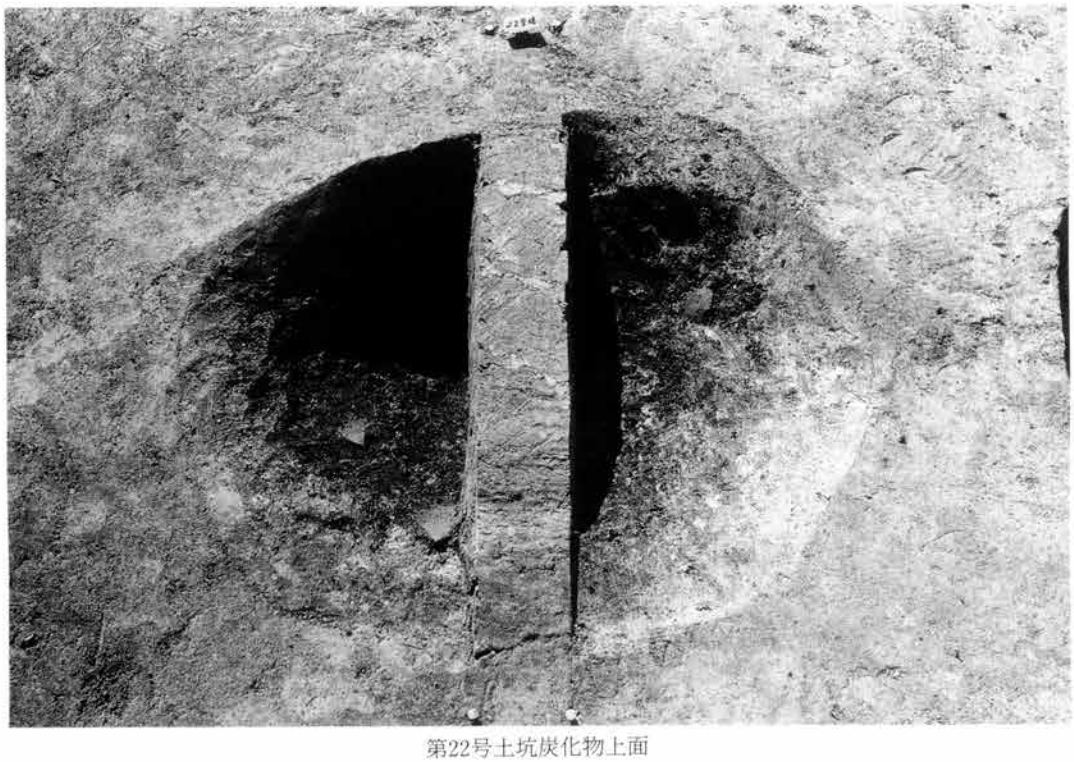
第11号土坑



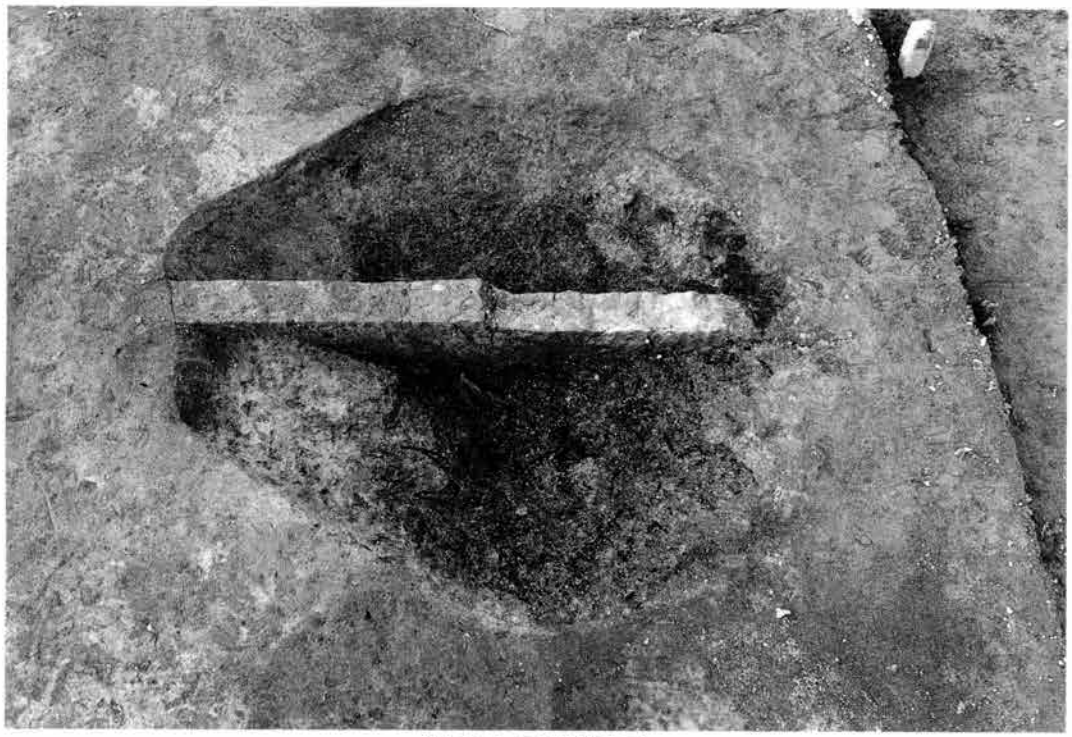
第15号土坑遺物出土状況

図版8

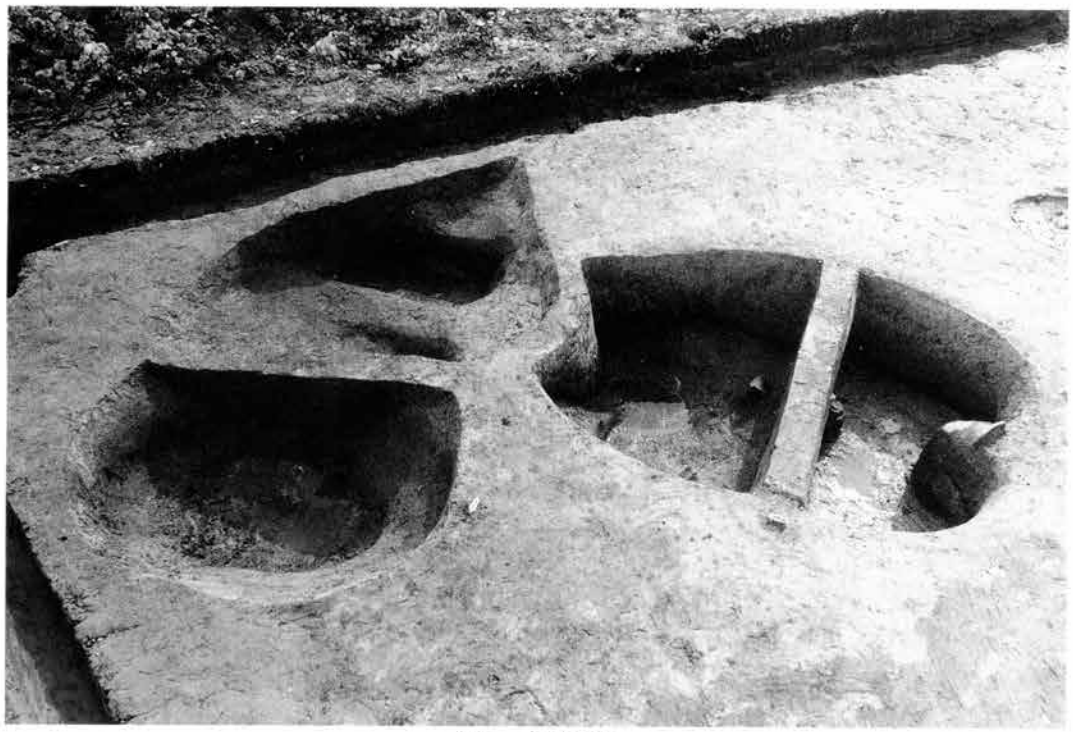
第18号土坑



第22号土坑炭化物上面



第24号土坑炭化物上面



第29・30号土坑

図版10

第9・10号溝遺物出土状況

管玉出土状況（14号溝）

第27号溝遺物出土状況

第5次調査表土除去作業

第201号土坑（第４次調査第１号土坑と同一）

第201号溝

図版12　出土土器（壺）

7

8

66

22

20

65

21

16

図版13　出土土器（甕）

72

76

86

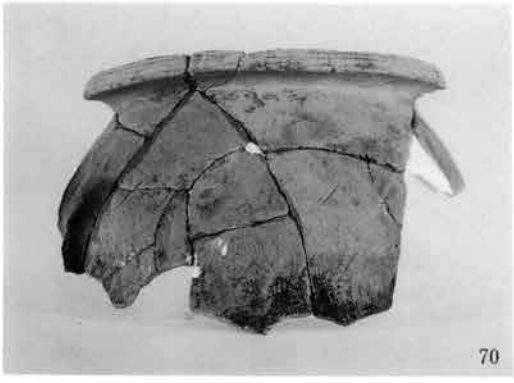
34

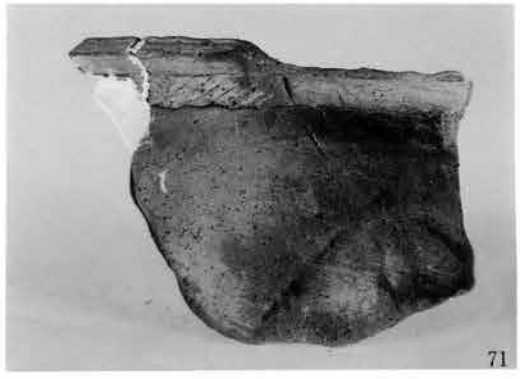
9

27

84

図版14　出土土器（甕）


70


71

17

33

63

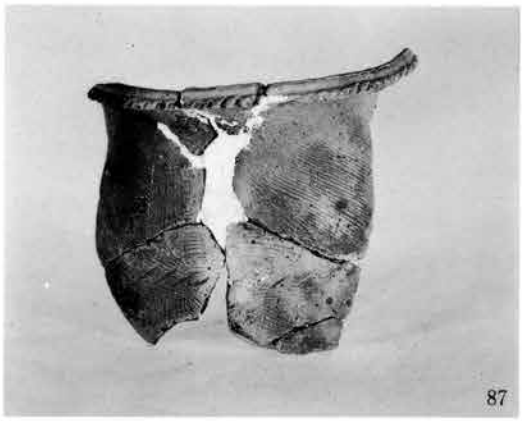
77

114

78

図版15 出土土器（甕）

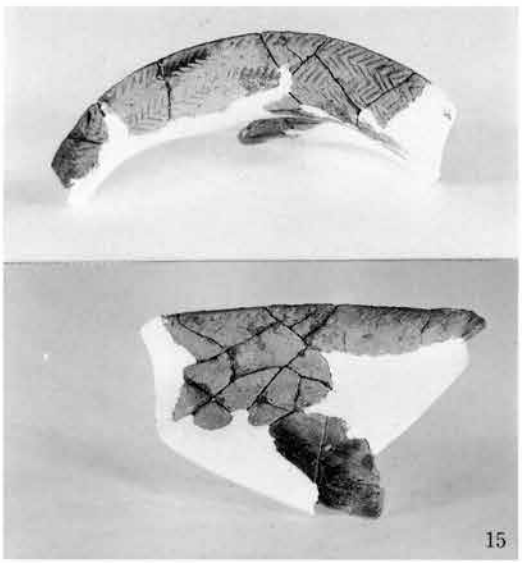
55


87

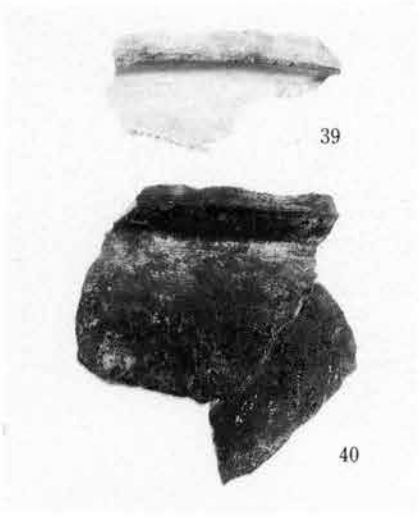
116

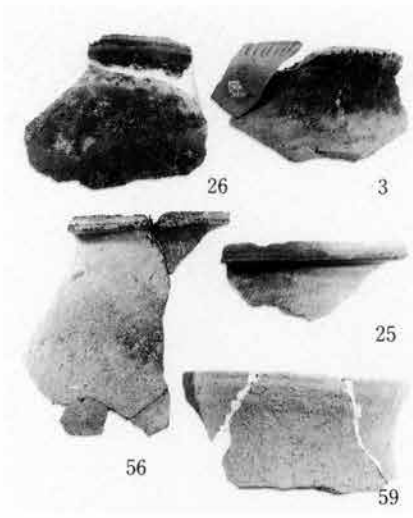
60

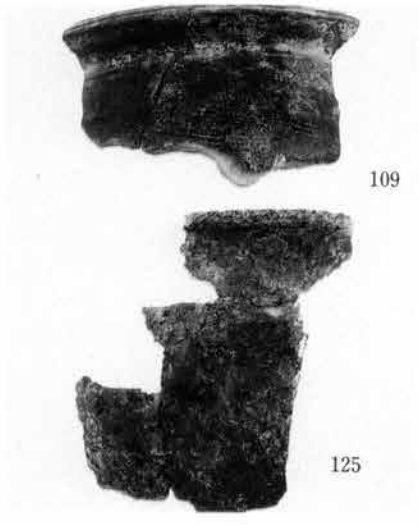
110

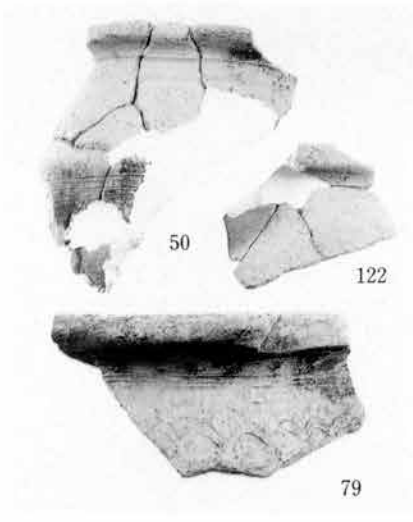

15

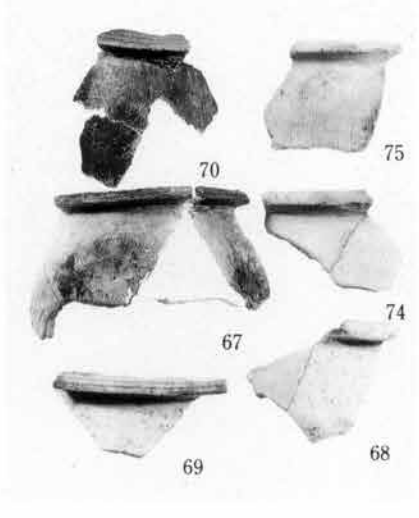
図版16 出土土器

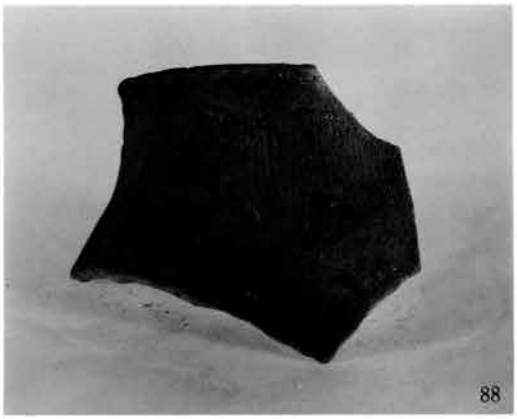











88

41

5

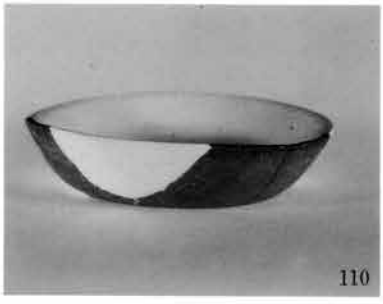
38

48

44

24

19



漆紙付着須恵器

絵画土器

絵画土器（拡大）

石器他

金沢市戸水B遺跡

平成4年3月30日印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　中川大正印刷株式会社

©石川県立埋蔵文化財センター　1992